有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

有明町内遺跡

—有明町閉町に伴う未報告発掘調査記録・未公開収蔵資料の報告書—

[調査報告]

丸岡A遺跡 －県単独農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

仕明遺跡（第４次） －町道宇都鼻志陽１号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

[既刊報告書の追録]

仕明遺跡（陶磁器・羽口）

長田遺跡（刀子の分析）

楠原遺跡（石器）

[収蔵資料の紹介]

高牧城跡遺跡（縄文時代後期の土器ほか）

いせんぼ遺跡（縄文時代後期の土器・磨石・石皿、鉄滓ほか）

水頭地域の表採資料（羽口・鉄滓ほか、町内製鉄跡関係について）

堂ノ上地点の資料（大型打製石斧）

その他の資料

2005年12月

鹿児島県　曽於郡　有明町教育委員会

序　文

埋蔵文化財は、日本の歴史や文化を知ると同時に、自分達の住んでいる有明町の歴史・文化をはじめ、先人達の生活のようすをうかがう貴重な宝物であります。

わたし達の有明町は、近隣の松山町・志布志町と合併することとなり、平成18年1月1日をもって志布志市となります。本報告書は、それに伴い、これまで町内で行われた発掘調査成果及び収蔵資料をできるだけ整理し、公開するために取り組んだものであります。一部、掲載に至らなかった成果・資料もありますが、限られた時間で精いっぱい「ありがとう有明町」の気持ちを込めて作業を進めてまいりました。

今後、これらの出土品を研究や社会教育・学校教育の場などにおいて、手軽に活用できるよう整理保管して、地域の歴史や文化に対する愛着と保護や活用につながるようにして参りたいと思います。そして、自分達の住む有明地域の歴史と文化を知り、果ては郷土への誇りと愛着を持って生活して、未来へと引き継いで参りたいと思っております。

終りに、これまで発掘調査や整理作業・報告書作成に従事していただいた多くの方々をはじめ、ご支援・ご指導をいただきました鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターならびに関係各位の皆様に対して心より感謝申し上げます。

平成17年12月吉日

有明町教育委員会

教育長　長重逸郎

町章

有明町のシンボルマークとして、明治100年を機に、県下に公募して決めたものです。これは、有明町の「ア」を図案化したもので、町民の明るい和と団結をまるく表し、有明町の飛躍と発展を象徴したものです。

※上記及び表紙・裏表紙の写真は有明町役場総務課樺山弘昭氏の提供による
※表紙の田ノ神像は「野井倉開田記念碑」、ヒマワリは有明町花である
※表紙題字は長重逸郎教育長による

報告書抄録

書　　名	有明町内遺跡
副　書　名	－有明町の閉町に伴う未報告発掘調査記録・未公開収蔵資料の報告書－ ［調査報告］丸岡Ａ遺跡－県単独農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－ 仕明遺跡（第４次）－町道宇都鼻志陽１号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－ ［既刊報告書の追録］仕明遺跡　長田遺跡　楠原遺跡 ［収蔵資料の紹介］高牧城跡遺跡　いせんぼ遺跡　水頭地域　堂ノ上地点　その他の資料
シリーズ名	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	(11)
編集者名	中水忍、黒川晃、倉元良文、下園昌三、栗林文夫、堂込秀人、和田るみ子、東徹志
編集機関	有明町教育委員会
所　在　地	〒899－7492　鹿児島県曽於郡有明町野井倉1756番地　TEL　099－474－1111
発行年月日	2005年12月28日

遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
丸岡Ａ遺跡	有明町 伊崎田 字丸岡	46467	69 － 38	31° 32″ 18′	131° 03″ 42′	[確認] 1995, 07, 24 ～ 07, 28 [全面] 1997, 07, 14 ～ 08, 22 [報告書作成] 2005, 06, 01 ～ 12, 28	[確認] 約53㎡ [全面] 約810㎡	農道 整備 事業
	種別	時代		遺構		遺物	特記事項	
	散布地 集落跡	縄文時代晩期・前期 〃　早期前半		竪穴状遺構　1基 集石遺構　1基 柱穴　23基		黒川式、曽畑式、轟式 前平式、吉田式ほか 石鏃、石錐、打製石斧、剥片		

遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
仕明遺跡 第４次	有明町 蓬原 字宮ノ前、 仕明	46467	69 － 66	31° 28” 11’	131° 02” 32’	[H16, 試掘・立会] 2004, 07, 24 ～ 07, 28 [H17, 試掘] 2005, 07, 14 ～ 08, 22	約60㎡ 約10㎡	町道 拡幅
	種別	時代		遺構		遺物	特記事項	
		縄文時代前期		おとし穴状遺構　1基		なし		

※以下、追録・収蔵資料紹介のため詳細を省略する

遺跡名	所在地	遺跡番号	北緯	東経	時代	遺構・遺物
楠原遺跡	蓬原字楠原	69－116	31°29”46’	131°01”18’	弥生、古墳、中世	石器、鉱滓
長田遺跡	原田字長田	69－65	31°27”09’	131°00”13’	古墳	鉄製刀子
高牧城跡遺跡	山重字高牧	69－81	31°32”03’	130°59”01’	縄文早・後期、古墳、中世	石坂式、綾式ほか
いせんぼ遺跡	伊崎田字いせんぼ	69－16	31°32”54’	131°02”06’	縄文後期、中世	綾式、市来式、磨石、石皿
堂ノ上地点	伊崎田字牛ヶ迫付近	－	31°33”27’?	131°02”09’	縄文前期～弥生？	大型打製石斧
水頭地域	野井倉字水頭	－	31°28”37’	131°03”10’	縄文前期、中世～近世	羽口、鉱滓ほか

1．丸岡遺跡　2．仕明遺跡　3．長田遺跡　4．楠原遺跡　5．高牧城跡遺跡　※飛地の一部が抜ける
6．いせんぼ遺跡　7．水頭地域　8．堂ノ上地点　9．土器Ⅴ．102 出土地　10．土器Ⅴ．103 出土地

図１　掲載遺跡・地域・地点の位置

例　言

1．本書は、鹿児島県曽於郡有明町閉町に伴う未報告発掘調査記録･未公開収蔵資料の報告書である。そのため、既に報告書刊行済みの発掘調査に関する追録や町収蔵資料の報告も含んでいる。

2．発掘調査は、各事業主より依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力･支援のもと有明町教育委員会が実施している。今回の整理作業ならびに報告書作成は有明町教育委員会が経費を負担して行っている。

3．発掘調査は各事業年度内に実施している。整理作業ならびに報告書作成は平成17年4月1日から12月末日にかけて行い、報告書刊行をもって完了している。

4．発掘調査･整理作業ならびに報告書作成は以下の者が担当している。所属は当時である。なお、その他は東徹志が実施している。

丸岡A遺跡の確認調査：黒川晃（有明町教育委員会）、倉元良文・下園昌三（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

本調査：中水忍（有明町教育委員会）、栗林文夫（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

整理作業・報告書作成：堂込秀人（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、出口順一朗、東徹志（有明町教育委員会）

5．遺物写真の撮影を福永修一・西園勝彦（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、現像･焼付けを大村彌紀・中川ヒロミ（鹿児島県立埋蔵文化財センター）にご協力頂いている。

6．本書の作成は、東のもと川ノ上真理を中心に安野美子・若松孝雄・山元弓枝が各作業を実施している。丸岡遺跡・楠原遺跡の石器については堂込秀人が選別している。石材同定については和田るみ子（鹿児島大学大学院）が行っている。執筆については中水忍・黒川晃・和田るみ子・東徹志が分担している。

7．発掘調査･整理作業ならび報告書作成に際しては、以下の方々のご指導･ご支援を賜った。記して感謝を申し上げたい。

新東晃一、池畑耕一、中村耕治、長野眞一、立神次郎、鶴田靜彦、前迫亮一、黒川忠広、東和幸（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、小村美義（志布志町教育委員会）、 東朋子　［組織別・五十音順・敬称略］

8．本書の編集は、東徹志が行っている。

9．調査記録･遺物の保管は、鹿児島県曽於郡有明町野井倉1760番地 有明町総合体育館内および有明町農業歴史資料館内に保管する。問合せは有明町教育委員会 社会教育課 社会教育係まで。なお、平成18年1月1日以降は、志布志市教育委員会 文化振興課 文化財係に移管する。

凡　例

1．各調査並びに作業については、基本的に鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導などに準拠して行っている。

2．遺構配置図などに国土座標ラインを明示している。国土座標の基軸方向及び数値は、事業実施計画図面より引用し、旧測地系を用いている。

3．遺構平面図には方位を記載している。方位は、調査に際してはおもに磁北を用い、報告書では磁北と座標値を用いた。磁北の場合は「MN」と表記している。

4．遺構実測図･土層断面図などに表記した標高は、事業実施計画図面より引用した数値であり、m（メートル）をおもな単位として用いている。遺構の法量は検出面からの数値である。掲載図面の縮尺は、各図に縮尺を明示している。なお、写真図版の遺物写真については、縮尺を統一していない。

5．報告書中における遺構の呼称は遺構ごとに通し番号を用いている。挿図に示した遺物番号は本文中の遺物番号に対応する。遺物番号は章ごとの通し番号である。まとめや写真図版においては「章番号．遺物番号」と表示している。

6．土色名に数字が入っているものは、小山正忠・竹原秀雄編著 2001 農林水産省農林水産技術会議事事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖23版』に準じた。記載に際しては、原則として色名･記号･土質の順で記した。

7．本書に用いた広域地図は、有明町所有の『有明町管内図』を使用している。

8．土器は、同一個体と考えられるものを観察表中において、同一セルにて表記して示している。土器胎土中の混和材同定は肉眼観察であり、記述は、石英＝半透明や透明なもの、長石＝不透明な白色砂、雲母＝扁平で薄く光るもの、黒色砂＝黒色のもの、赤色砂＝赤色のもの、に分けている。観察表中の記号は、◎最も多量、○含む、△極少量、―含まない、を意味する。

9．石器の石材同定は、肉眼観察による。

目　次

序　　文
報告書抄録
例言・凡例

第Ⅰ章　有明町の環境 ……（東）1

第Ⅱ章　丸岡Ａ遺跡の発掘調査報告 ……（中水・黒川・東）9

第Ⅲ章　仕明遺跡（第４次）の発掘調査報告 ……（東）43

第Ⅳ章　既刊行報告書の追録 ……（財団法人 元興寺文化財研究所・東）46
　第１節　仕明遺跡（1～3次）
　第２節　長田遺跡
　第３節　楠原遺跡

第Ⅴ章　町収蔵資料の紹介 ……（和田・東）53
　第１節　いせんぼ遺跡
　第２節　高牧Ａ遺跡
　第３節　水頭地域の表採資料
　第４節　堂ノ上地点の表採資料
　第５節　その他の資料

あとがきにかえて
図　　版

挿図・表・写真　目次

報告書抄録
図１　調査地点

第Ⅰ章
図Ⅰ.01　有明町の位置 ……3
図Ⅰ.02　有明町の周辺地形 ……3
図Ⅰ.03　有明町域の略地形 ……3
図Ⅰ.04　鹿児島県旧市町村配置 ……4
図Ⅰ.05　有明町遺跡分布図（1）……5
図Ⅰ.06　有明町遺跡分布図（2）……5
表Ⅰ.01　有明町遺跡一覧表 ……6～8

第Ⅱ章
表Ⅱ.01　確認調査・本調査の組織 ……10
表Ⅱ.02　整理作業と報告書作成の組織 ……10
図Ⅱ.01　確認調査トレンチ配置 ……11
表Ⅱ.03　確認調査の基本層序 ……11
表Ⅱ.04　確認調査トレンチの概要 ……11
図Ⅱ.02　丸岡Ａ遺跡の位置 ……12
写真Ⅱ.01　調査状況（表土除去）……13
図Ⅱ.03　調査区範囲とグリッド配置 ……13
図Ⅱ.04　調査区土層断面（1）……14
表Ⅱ.05　基本層序 ……14
図Ⅱ.05　調査区土層断面（2）……15

図Ⅱ.06　Ⅲ・Ⅳ層 出土遺物の分布状況 ……17
図Ⅱ.07　Ⅲ・Ⅳ層 出土土器（1）……18
図Ⅱ.08　Ⅲ・Ⅳ層 出土土器（2）……19
表Ⅱ.06　Ⅲ・Ⅳ層 出土土器の観察表（1）……20
図Ⅱ.09　Ⅲ・Ⅳ層 出土土器（3）……21
図Ⅱ.10　Ⅲ・Ⅳ層 出土土器（4）……22
表Ⅱ.07　Ⅲ・Ⅳ層 出土土器の観察表（2）……23
図Ⅱ.11　Ⅳ層 出土土器（1）……24
表Ⅱ.08　Ⅲ～Ⅴ層 出土石器の計測表（1）……25
図Ⅱ.12　Ⅳ層 出土土器（2）……26
表Ⅱ.09　Ⅲ～Ⅴ層 出土石器の計測表（2）……27
写真Ⅱ.02　Ⅳ層 出土石器176（磨製石斧）……27
図Ⅱ.13　調査区土層断面 ……28
図Ⅱ.14　Ⅷ層上面 遺構配置 ……28
図Ⅱ.15　Ⅷ層上面 竪穴状土坑1・柱穴1～23の検出状況 ……29
図Ⅱ.16　Ⅷ層上面 竪穴状土坑1と出土土器 ……30
図Ⅱ.17　Ⅷ層上面 柱穴1～23 ……30

写真Ⅱ.03　柱穴１土層断面 ……30
表Ⅱ.10　柱穴１～23の詳細……31
図Ⅱ.18　Ⅷ層上面 集石遺構と出土土器……31
図Ⅱ.19　Ⅵ層 出土遺物の分布状況……32
図Ⅱ.20　Ⅵ層 出土土器（１）……33
図Ⅱ.21　Ⅵ層 出土土器（２）……34
図Ⅱ.22　Ⅵ層 出土土器（３）……35
図Ⅱ.23　Ⅵ層 出土土器（４）……36
図Ⅱ.24　Ⅵ層 出土土器（５）……38
表Ⅱ.11　Ⅵ層 出土土器の観察表（１）……39
表Ⅱ.12　Ⅵ層 出土土器の観察表（２）……40
図Ⅱ.25　Ⅵ層 出土石器（１）……41
図Ⅱ.26　Ⅵ層 出土石器（２）……42
表Ⅱ.13　Ⅵ層 出土石器……42

第Ⅲ章
図Ⅲ.01　仕明遺跡の位置 ……43
図Ⅲ.02　仕明４次（2004）基本層序……44
図Ⅲ.03　仕明４次（2005）３トレンチ遺構検出状況 …44
写真Ⅲ.01　調査地（2004）の近景 ……44
写真Ⅲ.02　アカホヤ層堆積状況（2004）……44
写真Ⅲ.03　調査状況（2005）……45

第Ⅳ章
図Ⅳ.01　仕明遺跡 出土土器……46
写真Ⅳ.01　鉄分付着の軽石製品 ……46
図Ⅳ.02　長田遺跡の位置 ……47
図Ⅳ.03　長田遺跡　出土刀子 ……48
写真Ⅳ.02　長田遺跡 出土刀子のレントゲン写真……48
写真Ⅳ.03　刀子の分析箇所 ……48
図Ⅳ.04　刀子表面のＸＲＦスペクトル ……49
図Ⅳ.05　楠原遺跡の位置 ……50
図Ⅳ.06　楠原遺跡　遺物分布 ……51
図Ⅳ.07　楠原遺跡　出土鉱滓 ……51
表Ⅳ.01　楠原遺跡　石器の計測表 ……51
図Ⅳ.08　楠原遺跡　出土石器 ……52
第Ⅴ章
図Ⅴ.01　高牧城跡遺跡の位置 ……53
図Ⅴ.02　高牧城跡遺跡　表採遺物（１）……54
図Ⅴ.03　高牧城跡遺跡　表採遺物（２）……55
表Ⅴ.01　高牧城跡遺跡　表採土器の観察表 ……56
図Ⅴ.04　いせんぼ遺跡・堂ノ上地点の位置 ……57
表Ⅴ.02　鉱滓の観察表 ……58
図Ⅴ.05　いせんぼ遺跡　表採遺物（１）……58
図Ⅴ.06　いせんぼ遺跡　表採遺物（２）……59
表Ⅴ.03　いせんぼ遺跡　土器の観察表 ……60
表Ⅴ.04　いせんぼ遺跡　石器の観察表 ……60
図Ⅴ.07　いせんぼ遺跡　表採遺物（３）……61
図Ⅴ.08　いせんぼ遺跡　表採遺物（４）……62
図Ⅴ.09　いせんぼ遺跡　表採遺物（５）……63
図Ⅴ.10　いせんぼ遺跡　表採遺物（６）……64
図Ⅴ.11　いせんぼ遺跡　表採遺物（７）……65
図Ⅴ.12　いせんぼ遺跡　表採遺物（８）……66
図Ⅴ.13　堂ノ上地点　表採遺物（１）……67
図Ⅴ.14　堂ノ上地点　表採遺物（２）……68
図Ⅴ.15　水頭地域の位置 ……69
図Ⅴ.16　水頭地域　表採遺物（１）……70
図Ⅴ.17　水頭地域　表採遺物（２）……71
図Ⅴ.18　土器102の出土地点 ……72
図Ⅴ.19　2005年度の寄贈遺物 ……72
表Ⅴ.05　土器102・103の観察表……73
図Ⅴ.20　土器103推定出土位置 ……73
図Ⅴ.21　明治39年頃の周辺地形……73

図版目次

図版１　丸岡Ａ遺跡　空中写真
図版２　丸岡Ａ遺跡　遺構（１）
図版３　丸岡Ａ遺跡　遺構（２）
図版４　丸岡Ａ遺跡　土器（１）
図版５　丸岡Ａ遺跡　土器（２）
図版６　丸岡Ａ遺跡　石器
図版７　仕明遺跡・長田遺跡・楠原遺跡の追録
図版８　高牧城跡遺跡
図版９　いせんぼ遺跡ほか
図版10　いせんぼ遺跡・堂ノ上地点・水頭地域ほか

第Ⅰ章　有明町の環境

第１節　現在の有明町

有明町は鹿児島県の曽於郡にあり、大崎町・志布志町・松山町・旧大隅町（現、曽於市）に接する。町の沿革は、明治24年に志布志村から西志布志村として分かれた後、旧野方村の山重地区と合併して、昭和33年に有明町となり現在に至っている。平成18年１月からは志布志町・松山町と合併して志布志市として市制に移行する予定である。

町の人口は大正９年では約9,200人、平成17年で約12,200人である。町域面積は98.05㎢、その内訳は田畑37.5％・山林42.1％・その他20.4％である。このうち水田の多くは、河川より高い台地上に広がる蓬原開田・野井倉開田が占めており、この約1,000haにもおよぶ開田事業は有明町の代名詞となっている。

現在の基幹産業は農業で、畜産・茶・園芸・水稲などが生産されている。とくに茶業振興は盛んで、近年の栽培面積が県内３位にまで伸びている。また、菱田川・田原川沿いでは、水質が養殖に適しているため、うなぎの養殖が盛んである。

第２節　地理的環境

有明町は鹿児島県の大隅半島に位置し、宮崎県との県境に近く、日向灘沿岸にあたる。町域は志布志湾奥にわずかな海岸線をもち、そのほとんどは内陸に広がっている。町域は河川流域などの低地が極わずかで、標高が高い台地が多くを占め、河岸段丘で標高15～35ｍ、台地で標高60ｍ以上を測る。しかし、その様相は南北域で異なっている。町域の南部は、典型的なシラス台地が広がり、「原（ばる）」と表現される比較的平坦な地形が見られる。菱田川下流域には平坦な河岸段丘面が広がっている。一方、北部域は、山林の割合が多く、シラス台地を侵食した谷が多く見られる。台地上には平坦面が少なく、山間部に近い状況である。

河川については、町域を二分するように流れる菱田川が最も大きく、次いで田原川や安楽川支流の本村川・高下谷川などがある。その他にも湧水を水源とした小川や小規模な河川が数多く存在する。これらの河川はシラス台地を浸食して形成した谷底を流れており、集落の営まれる台地と河川の高低差が大きい点が特徴である。

気候については、温帯気候南海型気候区に属しており、高温多雨が特徴である。冬季でも農作物の作付けが可能であり、植物の生育も盛んである。

第３節　歴史的環境

有明の歴史は、近代の蓬原開田と野井倉開田に代表されるように農業の歴史として語られる。蓬原開田は、明治25年に始まり大正７年に完成している。測量技術も未熟な時期に、馬場藤吉に代表される地域住民の借財によって進められた特徴をもっている。一方、蓬原開田から数十年遅れて始まり太平洋戦争後に完成した野井倉開田は、野井倉甚兵衛や地域住民の代表者達を中心にして国や県の力を借りつつ進められている。その他にも山重太吉を中心に行われた荒谷開田などがあり、開田・開拓による生産増加と生活改善が今日までの目標となっている。そして、現在も農業を基幹産業とした生活には、熊野神社の神舞や白鳥神社の福神舞、集落単位の田ノ神講・観音講など、昔から引き継がれてきた民俗行事が数多く残っており、生活の中に活きている。

文献などからうかがい知ることのできる町域全体の動向としては、古代末に発生した荘園の救仁院（有明町の川東地区※2と志布志町、松山町の範囲）と救仁郷（有明町の川西地区と大崎町の範囲）が菱田川を境に南北に二分して存在しており、近世に至るまで変わらなかった。近世になり当時の松山村が救仁院から分離すると、救仁郷より救仁院へ川西地区（蓬原・原田・野神）を組み入れ、明治に志布志村となっている。

近代以前の詳しい歴史は、農村地帯のため今に遺る文献資料が乏しいうえ、明治期の廃仏毀釈が激しかったこともあり、貴重な資料が失われ、不明が多い。しかし、近年は発掘調査により貴重な考古資料が多く発見されている。

先ず、旧石器時代・縄文時代草創期は遺跡が少なく、遺物が数点確認されたのみである。しかし、縄文時代早期になると遺跡数は大幅に増え、町内全域に分布する。下堀遺跡の調査では、連穴土坑の燃焼部下に見られる「シミ状遺構」や何らかの施設の可能性のある杭状柱穴で構成された円形柱列などと類例の少ない遺構も発見されている。縄文時代前期から晩期にかけては、町域北側に遺跡分布が

偏る傾向があるが、晩期終末もしくは弥生時代早期には、町域南側にも分布が見られる。このように遺跡の動態に時期ごとの変化が見ることができる。

弥生時代になると遺跡数は少なくなるが、野井倉校区の土橋集落出土の青銅製銅矛や本村の花弁形住居などと貴重な遺物・遺構が発見されている。弥生時代の集落分布は、現在のところ不明な点が多いが、台地・河岸段丘上の古墳時代の集落と共に一部が発見されることが多い。他地域の弥生時代の集落立地傾向を参考にすると、今後は現在の河川周辺の低地において、集落などが発見されることが予想される。

古墳時代では、円墳として県内最大級の原田古墳やその周囲で発見された地下式横穴墓、金装飾の太刀が出土したと言われる蓬原上馬場の土壙墓群などの墳墓に関することが知られていた。しかし、近年は長田遺跡・仕明遺跡・上苑Ａ遺跡などの様に、竪穴住居や掘立柱建物の集まった集落跡が確認されることが多く、また、馬具・耳環などの金属製品も出土している。

古代は発掘調査調査例が少なくて詳しくは不明であるが、町保管の出土地不明の表採遺物に良好な土師皿などが含まれており、未発見の集落などが存在するものと考えられる。

古代末からは、中国の輸入陶磁器の出土が多くなり、中世になると蓬原城が救仁郷の中心として栄えていたことが文献資料からうかがい知ることができる。蓬原城は菱田川のほとりにあり、独立した丘陵上に築かれている。隣接して金丸城が存在する。それ以外にも、台地上には「内城」の小字があることから、縄張りが周囲に広く拡がっていた可能性が考えられる。その周辺にも、菱田川やや上流の対岸にある仮屋集落の砦伝承や猜ヶ宇都集落の馬具・武具製作伝承、小松集落の製鉄伝承などが存在しており、縄張りの復元がまたれる。また、菱田川下流には蓬原城の前身と言われる片平城や大崎町内の天守（あもい）城があり、菱田川が戦略上重要視されていたことが想像できる。

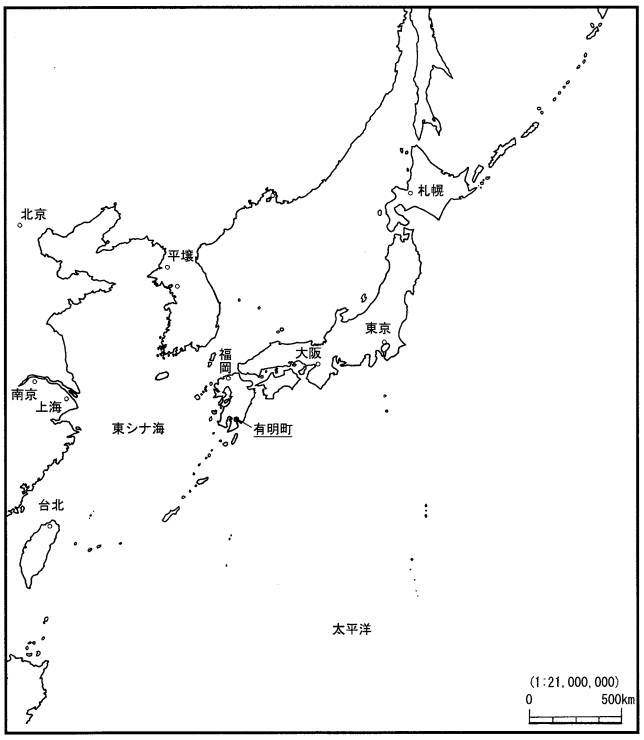
この他詳しい有明町の歴史については、下記の参考文献を参照されたい。

※１　有明町役場企画課資料による

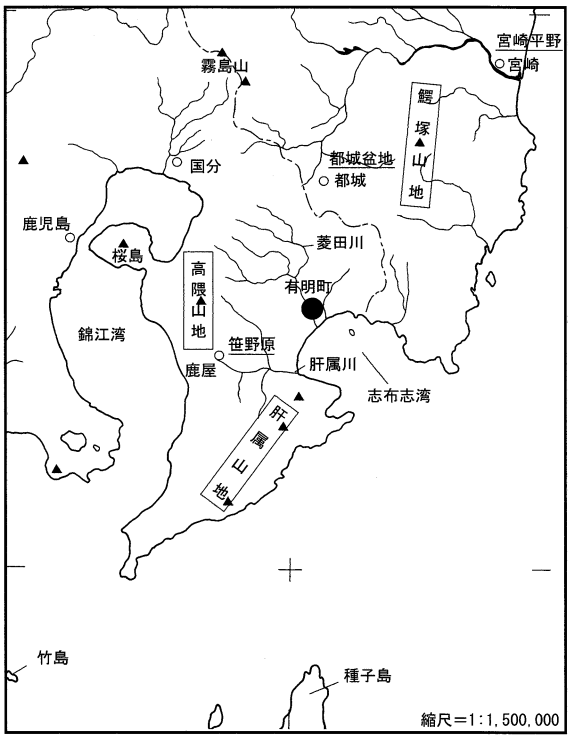
※２　町内は菱田川を境に川西地区と川東地区に分けることが多く、さらにほぼ江戸時代の旧村単位である小学校校区で地域がまとまっている。川西地区（山重校区・野神校区・原田校区・蓬原校区）と川東地区（伊崎田校区・野井倉校区・通山校区）である。

【参考文献】

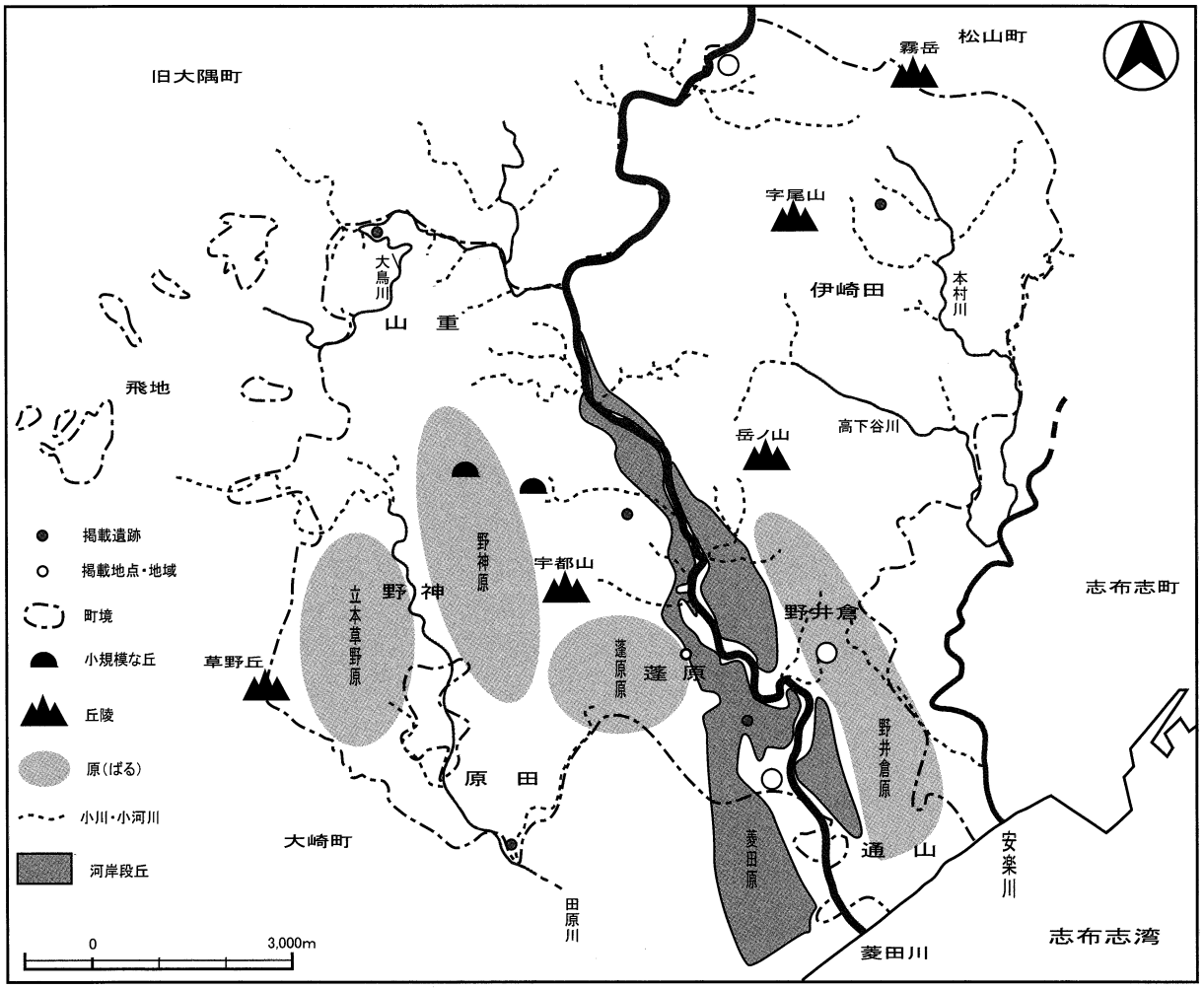
有明町郷土史編さん委員会　昭和55年　『有明町誌』　有明町
有明町文化財保護審議委員会　昭和49年　『有明町の文化財 第１集』　有明町教育委員会
有明町文化財保護審議委員会　昭和51年　『有明町の文化財 第２集 －蓬原･野井倉の開田史－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護審議委員会　昭和54年　『有明町の文化財 第３集 －有明町のタノカンサア－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護審議委員会　昭和55年　『有明町の文化財 第４集 －お地蔵さんと観音さま－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護審議委員会　昭和56年　『有明町の文化財 第５集 －早馬どんと水神さま－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護審議委員会　昭和57年　『有明町の文化財 第６集 －伝説－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護委員会　昭和58年　『有明町の文化財 第７集 －むかし話－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護委員会　昭和58年　『有明町の文化財 第８集 －おどりと民謡－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護審議委員会　昭和61年　『有明町の文化財 第９集 －いしぶみをたずねて－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護審議委員会　昭和61年　『有明町の文化財 第10集 －戦争体験記－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護審議委員会　平成元年　『有明町の文化財 第11集 －祭りと講－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護委員会　平成２年　『有明町の文化財 第12集 －伊崎田和紙の歴史と伝承－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護審議委員会　平成３年　『有明町の文化財 第13集 －昔の地名－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護審議委員会　平成５年　『有明町の文化財 第14集 －昔の方言－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護審議委員会　平成７年　『有明町の文化財 第15集 －昔のあそび－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護委員会　平成９年　『有明町の文化財 第16集 －昔の慣習－』　有明町教育委員会
有明町文化財保護委員会　平成16年　『有明町の文化財 第17集 －石塔－』　有明町教育委員会
有明町教育委員会　昭和56年３月　『鹿児島県無形民俗文化財 熊野神社神舞保存記録報告書』　有明町教育委員会
鹿児島県教育委員会　1973　『鹿児島県市町村別遺跡地名表』
鹿児島県教育委員会　1977　『鹿児島県市町村別遺跡地名表』
鹿児島県教育委員会　1978　『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（9）
池畑耕一・中村耕治　1984　『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報－昭和58年度－』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（29）　鹿児島県教育委員会
鹿児島県教育委員会　1985　『鹿児島県市町村別遺跡地名表』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（36）
牛ノ浜修･中村耕治･弥栄久志　1985　『札元遺跡、山原遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）　有明町教育委員会
出口順一朗･堂込秀人　2003　『長田遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）　有明町教育委員会
中水忍･出口順一朗･東徹志　2003　『黒葛遺跡（第１･２次）、牧原遺跡、牧原Ａ遺跡、大迫遺跡、飯野Ａ遺跡、本村遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）　有明町教育委員会
出口順一朗･黒川忠広　2003　『屋部当遺跡、楠原遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）　有明町教育委員会
中水忍･東徹志　2004　『上苑遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）　有明町教育委員会
中水忍･松崎卓朗･東徹志　2004　『浜場遺跡、下堀遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）　有明町教育委員会
出口順一朗･中水忍･堂込秀人･横手浩二郎･東徹志　2005　『仕明遺跡（１～３次）』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）　有明町教育委員会
中水忍･出口順一朗･堂込秀人･東徹志　2005　『横掘遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）　有明町教育委員会
出口順一朗･賦句博隆･松崎卓朗･横手浩二郎･和田るみ子･東徹志　2005　『牧遺跡（１･２次）』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）　有明町教育委員会



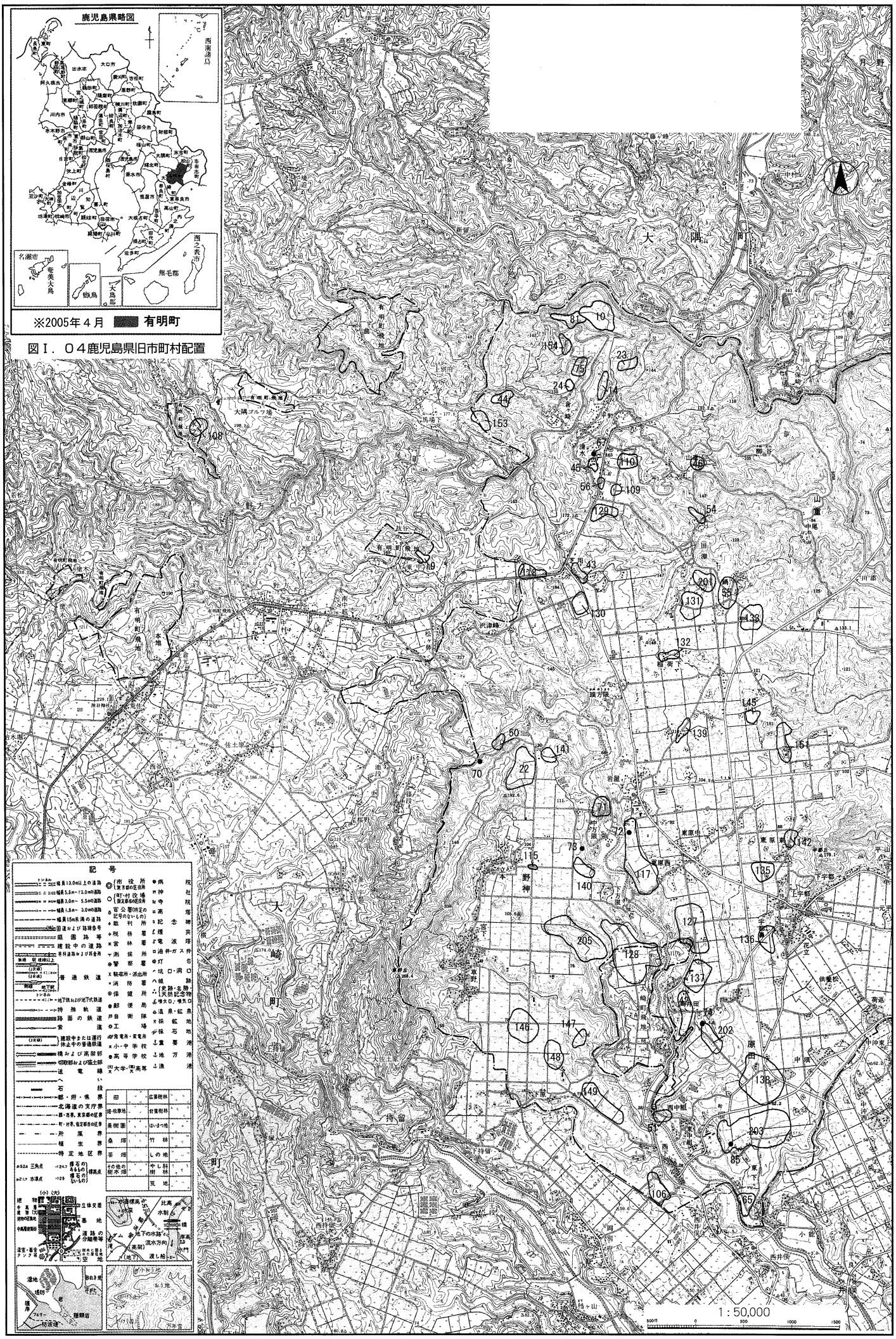
図Ⅰ.01　有明町の位置



図Ⅰ.02　有明町の周辺地形



図Ⅰ.03　有明町域の略地形



図Ⅰ．０４鹿児島県旧市町村配置

図Ⅰ.05　有明町遺跡分布図（１）

図Ⅰ.06　有明町遺跡分布図（2）

表1．01　有明町の遺跡一覧

番号	遺跡名	フリガナ	所在地	地形	時代	遺構・遺物等	備考
69-1	柳井谷	ヤナイダニ	山重字柳井谷	台地	縄（早・晩）	土器（前平式），黒色研磨土器，粗製土器	
2	松ヶ尾	マツガオ	伊崎田字松ヶ尾	台地	縄（早・晩）・中	前平式，打製石斧，土師器	H 11 分布
3	松ヶ尾B	マツガオ	伊崎田字松ヶ尾・茗ヶ谷	台地	古	平栫式	H 11 分布
4	牧原A	マキハラ	伊崎田字牧原・大迫	台地	古	石坂式，前平式	H 7 分布，H 12 全面
5	伊崎田鍋	イサキダナベ	伊崎田字牧・西ヶ迫・鍋前田	台地	縄（早・後）	石坂式，吉田式	H 11 分布，旧名称「西之」)
6	仮屋A	カリヤ	野井倉字仮屋	台地	縄（早・後）	前平式	H 11 分布
7	仮屋B	カリヤ	野井倉字仮屋	台地	縄(早・後)・弥(前)	打製石斧，平栫式	H 11 分布
8	社ヶ段B	シャガダン	伊崎田字社ヶ段・縄瀬	台地	中世	永山式土器	H 11 分布
9	抜谷	ヌキタニ	野神字抜谷	台地	縄(中・晩)・弥(中)	打製石斧，石皿	
10	高牧A	タカマキ	山重字高牧	台地	縄（早・中・晩）・弥	石鏃	H 11 分布
11	向段	ムコウダン	伊崎田字向段・谷ヶ迫	台地	古	石，土器	H 11 分布
12	高吉	タカヨシ	野井倉字高吉・前田・下段	台地	縄（中・晩）・弥	石皿	
13	縄瀬C	ナワセ	伊崎田字縄瀬・社ヶ段	台地	古		H 11 分布
14	下平野	シモヒラノ	山重字下平野	台地	縄（後）	土器	
15	黒葛A	ツヅラ	伊崎田字黒葛・牧原	台地	縄（後）・歴	土師器	H 7 分布
16	いせんぼ	イセンボ	伊崎田字社ヶ段・大迫	台地	縄（後・晩）・弥	磨製石斧，土器	
17	社ヶ段A	シャガダン	伊崎田字社ヶ段・坂ノ下	台地	縄（後）	土器	H 11 分布
18	仮屋頭	カリヤカシラ	野井倉字仮屋頭・仮屋	台地	縄（後）・中世	土師器，鉄滓	H 11 分布
19	平尾A	ヒラオ	野井倉字平尾・井手上	台地	縄（後）・中世	三万田式，土師器	H 11 分布
20	土橋	ツチバシ	野井倉字土橋・下原・土原	台地	縄（後）・弥（中）	銅矛	
21	向段B	ムコウダン	蓬原字向段	台地	縄（後）		
22	牧原 A	マキハラ	野神字牧原・高尾・中牧	台地	縄（後）	磨製石斧，打製石斧	
23	高牧B	タカマキ	山重字高牧	台地	弥・古代	中津野式，土師器	H 11 分布
24	倉ヶ崎C	クラガサキ	山重字倉ヶ崎	台地	縄（晩）・弥	土器	H 11 分布
25	中尾	ナカオ	山重字中尾・長谷	台地	縄（晩）・弥	土器	
26	牛ヶ迫	ウシガサコ	伊崎田字牛ヶ迫・松ヶ尾・午休	台地	縄（晩）・弥	石鏃	
27	大迫	オオサコ	伊崎田字大迫	台地	縄（早・晩）	塞ノ神式，入佐式	H 7 分布
28	縄瀬A	ナワセ	伊崎田字縄瀬・坂ノ下	台地	縄（晩）・中世	土器，土師器	H 11 分布
29	飯野	イイノ	伊崎田字飯野・丸岡・力石	台地	縄（晩）		H 11 分布
30	向江原	ムカエバラ	伊崎田字向江原	台地	縄（晩）	剥片石器	H 7 分布
31	山原	ヤマバル	伊崎田字山原・宮谷	台地	縄（晩）	入佐式，敲石，磨石，剥片	H 11 分布，全面
32	札元	フダモト	伊崎田字札元	台地	縄（後・晩）・古	中岳Ⅱ類，磨石，石斧	H 11 分布，全面
33	下原	シモハラ	伊崎田字下原	台地	縄（晩）・弥	土器	H 11 分布
34	向原	ムコウバル	野井倉字向原・岩坂・中川・出水	台地	縄（晩）・古	打製石斧 円墳（牧ノ内古墳）	H 11 分布
35	平尾B	ヒラオ	野井倉字平尾・井手・小松	台地	縄（晩）・中世	打製石斧，青磁	H 11 分布
36	黒葛C	ツヅラ	伊崎田字黒葛・大迫	台地	縄・弥	土器	
37	坂ノ下	サカノシタ	伊崎田字坂ノ下	台地	縄		H 11 分布
38	丸岡A	マルオカ	伊崎田字丸岡・力石	台地	縄	石鏃，土器，石器（打，磨）	
39	上ノ原A	ウエノハラ	伊崎田字上ノ原	台地	縄	青磁	H 11 分布
40	平尾	ヒラオ	野井倉字平尾	台地	縄		H 11 分布
41	川添	カワゾエ	山重字川添・鍋ヶ迫・谷後	台地	縄・弥（前・中）	石斧	
42	塚堀	ツカボリ	原田字塚堀・下原	台地	縄・歴	土師器	
43	釣段	ツリダン	山重字釣段・中迫・水道	台地	弥（前）	土器，石器	
44	前迫A	マエサコ	山重字前迫・松ヶ迫	台地	弥（中）	石斧	
45	上平野	カミヒラノ	山重字上平野・清水	台地	弥（中）	土器	
46	山重	ヤマシゲ	山重字山重	台地	弥（中）	土器，石器	
47	松原	マツバラ	野井倉字松原・上ノ浜	低地	弥（中・後）	土器	
48	捨り	ステリ	蓬原字捨り・日鎌・山ノ前	台地	弥（中）	土器，石器	
49	大園A	オオゾノ	蓬原字大園・上大園・小松	台地	縄・古	土器，石器	H 11 分布
50	古池	フルイケ	野神字古池・高尾	台地	弥（中）	石斧（磨製，打製）	
51	清水	シミズ	原田字清水	台地	弥（中）	打製石斧，磨製石斧	旧名称「元宮の下・永田」
52	草場	クサバ	野井倉字草場・坪山・前畑	台地	弥（後）・古	石斧，土師器	
53	下水流	シモヅル	蓬原字下水流・宮ノ前	台地	古	石斧，土師器	H 11 分布
54	田渕A	タブチ	野神字田渕・山中	台地	弥	土器，石器	
55	田渕B	タブチ	野神字田渕・大久保	台地	弥	打製石器	
56	吹切C	フキキリ	山重字吹切・上平野	台地	弥		
57	三方境	サンポウザカイ	伊崎田字三方境	台地	弥	土器	
58	前田	マエダ	伊崎田字前田	台地	弥	土器，石器	
59	東段A	ヒガシダン	伊崎田字東段	台地	弥		
60	中野	ナカノ	伊崎田字中野・下原	台地	弥	土器，石斧	
61	西ノ谷	ニシノタニ	野井倉字西ノ谷	台地	弥		
62	井手上A	イデウエ	野井倉字井手上・上ノ水流	台地	縄・弥・古	土器，石器，人骨，土師器	H 11 分布
63	吉村	ヨシムラ	野井倉字吉村・野吉	台地	弥	石鏃，打製石斧	
64	上原A	ウエハラ	野井倉字上原・西原	台地	弥	土器	
65	長田	ナガタ	原田字長田	台地	弥・古・中世	山ノ口式，成川式，土器，磁器	H 8 分布，H 11 全面
66	仕明	シアケ	蓬原字仕明・宮ノ前・大園・牧	台地	旧・縄早・弥・古・中世	成川式，土器	H 8 分布，H 12 ～ 14 全面

番号	遺跡名	フリガナ	所在地	地形	時代	遺構・遺物等	備考
67	平野古墳	ヒラノコフン	山重字上平野	台地	古	円墳	
68	鍋古墳	ナベコフン	伊崎田字渡ヶ迫	台地	古	円墳	
69	片平古墳	カタヒラコフン	蓬原字仕明	低地	古	円墳	
70	山神ノ上古墳	ヤマンカンノウエコフン	野神字後平	台地	古	円墳	
71	岩屋古墳群	イワヤコフングン	野神字河内・井手元	台地	古	円墳３基	
72	中方限古墳群	ナカホウギリコフングン	野神字穴倉	台地	古	円墳	
73	渡迫古墳群	ワタリザココフングン	野神字岩道	台地	古	円墳	
74	高井田古墳群	タカイダコフングン	原田字下原	台地	古	円墳１基，方墳１基	
75	倉ヶ崎Ｂ	クラガサキ	山重字倉ヶ崎・平野	台地	歴		
76	牧原	マキハラ	伊崎田字牧原・大迫	台地	歴		Ｈ 13 全面
77	縄瀬Ｂ	ナワセ	伊崎田字縄瀬	台地	中世		
78	向段Ａ	ムコウダン	蓬原字向段	台地	歴		
79	金丸城跡	カナマルジョウアト	蓬原字神領	丘陵	中世	空堀	
80	片平城跡	カタヒラジョウアト	蓬原字下水流・仕明	丘陵	中世		
81	高牧城跡	タカマキジョウアト	山重字高牧	丘陵	中世	山城	
82	大代	オオダイ	野井倉字大代・鎌迫・大森	台地	縄・古代	土師器	Ｈ 11 分布
83	平Ｂ	ヒラ	野井倉字平	台地	古代・中世	土師器，青磁	Ｈ 11 分布
84	次五	ジゴ	野井倉字次五	台地	古代	土師器	Ｈ 11 分布
85	原田古墳	ハラダコフン	原田字大塚・出口・牧	台地	古	円墳	昭 44.4. 1 町指定
86	馬場地下式横穴	ババチカシキヨコアナ	蓬原字小松・内城	台地	古	剣，槍，人骨	昭 52.4.21 町指定
87	東	ヒガシ	野井倉字東・横堀	台地	弥	土器	Ｈ 11 分布
88	横堀	ヨコボリ	野井倉字横堀	台地	縄（早）・弥・古・古代	連穴土坑１基，集石 30 基，耳栓，塞ノ神式，土師器	Ｈ 12 全面
89	下段Ｃ	シモダン	野井倉字下段・東	台地	縄・弥	土器	Ｈ 11 分布
90	下段Ｂ	シタダン	野井倉字下段・東	台地	弥		Ｈ 11 分布
91	蓬原城跡	フツハラジョウアト	蓬原字出水	台地	中世	堀，空堀，土塁	昭 44.4.1 町指定
92	真言宗惣持院跡	シンゴンシュウソウジインアト	蓬原字出水	低地			昭 44.4.1 町指定
93	禅宗好善寺跡	ゼンシュウコウゼンジアト	蓬原字神領	低地			昭 44.4.1 町指定
94	禅宗仏心院跡	ゼンシュブッシンインアト	野井倉字通山	低地		一字一石塔	昭 44.4.1 町指定
95	時衆宗願行寺跡	ジシュウソウガンジアト	伊崎田字山ノ口	台地			昭 44.4.1 町指定
96	早馬Ａ	ハヤマ	野井倉字早馬	台地	弥		Ｈ 11 分布
97	早馬Ｂ	ハヤマ	野井倉字早馬	台地	弥	土器	Ｈ 11 分布
98	早馬Ｃ	ハヤマ	野井倉字早馬	台地	弥	土器	Ｈ 11 分布
99	吉原	ヨシハラ	野井倉字吉原	台地	弥	土器	Ｈ 11 分布
100	中次Ａ	ナカツギ	野井倉字中次	台地	弥		Ｈ 11 分布
101	中次Ｂ	ナカツギ	野井倉字中次	台地	弥		Ｈ 11 分布
102	前原	マエバラ	野井倉字前原	台地	弥	土師器	Ｈ 11 分布
103	坂ノ下Ａ	サカノシタ	伊崎田字坂ノ下	台地	古		Ｈ 11 分布
104	上苑	ウエンソン	野井倉字上苑・高吉	台地	縄（早）・古	埋甕，成川式，竪穴住居２基	Ｈ８分布，Ｈ 13 全面
105	牧	マキ	蓬原字牧・外堀	台地	古	土器	Ｈ 11 分布
106	坂ノ上	サカノウエ	原田字坂ノ上・前田・西原	台地	弥・古		Ｈ 11 分布
107	谷ヶ迫Ａ	タニガサコ	伊崎田字谷ヶ迫・宝永・向段	台地	古		Ｈ 11 分布
108	堀切	ホリキリ	野神字堀切	台地	弥		
109	吹切Ａ	フツキリ	山重字吹切	台地	弥		
110	船迫	フナザコ	山重字船迫	台地	古		Ｈ 10 分布
111	山ノ口	ヤマノクチ	伊崎田字馬場ヶ迫・中田・山ノ口前・楢ヶ迫	台地	縄	石皿，石斧	Ｈ 11 分布
112	段	ダン	伊崎田字段・楢ヶ原	台地	縄（中・後）		
113	立山	タチヤマ	伊崎田字立山・上ノ園・平・室太郎	台地	古		Ｈ 11 分布
114	楠原古墳	クスバルコフン	蓬原字大迫・金丸	台地	古	円墳	
115	長塚古墳	ナガツカコフン	野神字岩道・立下	台地	古	円墳	
116	楠原	クスバル	蓬原字楠原・大迫	台地	弥・古	土坑２基，成川式	Ｈ２分布，Ｈ９全面
117	穴倉	アナクラ	野神字穴倉	台地	縄（早）・弥・古	石坂式，成川式	Ｈ６分布，Ｈ９全面
118	北別府	キタンビュウ	野神字芝用・小迫	台地	縄		Ｈ７分布
119	本村	ホンムラ	伊崎田字本村・下原	台地	縄・弥	貝殻条痕文，深浦式，山ノ口式，集石１基，竪穴住居１基	Ｈ７分布，Ｈ 13 全面
120	飯野Ａ	イイノ	伊崎田字飯野	台地	縄（早・前）	吉田式，前平式，黒川式，古道１基	Ｈ７分布，Ｈ 13 全面
121	飯野Ｂ	イイノ	伊崎田字宝永・飯野	台地	縄		Ｈ７分布
122	春日堀	カスガボリ	蓬原字春日堀	台地	縄		Ｈ 11 分布
123	仮宿	カリシュク	伊崎田字仮宿・多々越	台地	縄		Ｈ７分布
124	天神ノ尾	テンジンノオ	伊崎田字天神ノ尾	台地	縄		Ｈ７分布
125	谷ヶ迫	タニガサコ	伊崎田字谷ヶ迫・向段	台地	縄		Ｈ７分布
126	平Ａ	ヒラ	野井倉字平	台地	古		Ｈ８分布
127	下堀	シモボリ	野神字下堀・立山	台地	縄（早）・弥・古	成川式	Ｈ８分布
128	浜場	ハマバ	野神字浜場	台地	縄・古	成川式	Ｈ８分布
129	吹切Ｂ	フッキリ	山重字吹切	台地	縄・古		Ｈ 10 分布
130	水道	スイドウ	野神字水道	台地	古		Ｈ 11 分布
131	釣ヶ段	ツリガダン	山重字釣ヶ迫・野神字田渕・大久保	台地	古		Ｈ 10 分布
132	森土	モリツチ	野神字森土	台地	縄・古		Ｈ 11 分布
133	鍋迫	ナベサコ	野神字鍋迫・鍋前	台地	古		Ｈ 10 分布

番号	遺跡名	フリガナ	所在地	地形	時代	遺構・遺物等	備考
134	井ノ木	イノキ	山重字上ノ段・竹迫	台地	古		H 11 分布
135	大堀	オオボリ	野神字大堀・水喰	台地	古・古代		H 10 分布
136	上原	ウエハラ	原田字上原	台地	古		H 10 分布
137	立山	タチヤマ	原田字立山	台地	古		H 10 分布
138	東中原	ヒガシナカハラ	原田字東中原・大塚	台地	古		H 10 分布
139	廣迫	ヒロサコ	野神字廣迫・中岡	台地	古		H 10 分布
140	渡迫	ワタリザコ	野神字渡迫・岩道・薗田	台地	古代	土師器	H 11 分布
141	牧原B	マキハラ	野神字牧原	台地	古		H 10 分布
142	水喰	ミックレ	野神字水喰・蓬原字山ノ後	台地	古代		H 10 分布
143	山ノ前	ヤマノマエ	蓬原字山ノ前	台地	古		H 10 分布
144	日鎌	ヒガマ	蓬原字日鎌・捨り・内城	台地	古		H 10 分布
145	丸岡A	マルオカ	野神字丸岡・中ノ丸	台地	古		H 10 分布
146	風穴	カザアナ	野神字風穴・五色	台地	古		H 10 分布
147	上五敷	カミゴシキ	原田字上五敷・五色	台地	古		H 10 分布
148	五色	ゴシキ	野神字五色・風穴	台地	古		H 10 分布
149	西ノ堀	ニシノホリ	原田字西ノ堀・下五敷	台地	古		H 10 分布
150	屋部当	ヤベアタリ	蓬原字屋部当・大迫・楠原	台地	旧・縄早・古		H 10 分布，H 13 全面
151	丸岡B	マルオカ	野神字丸岡，蓬原字楠原・山ノ後	台地	古		H 10 分布
152	楠原B	クスバル	蓬原字楠原・山ノ後・屋部当	台地	古		H 10 分布
153	前迫B	マエサコ	山重字前迫	台地	縄	土器	H 11 分布
154	倉ヶ崎D	クラガサキ	山重字倉ヶ崎	台地	古・古代	土師器	H 11 分布
155	塩入	シオイリ	野井倉字塩入・押山・山添	台地	弥	土師器	H 11 分布
156	坂上	サカウエ	野井倉字坂上・大代	台地	古代	土師器	H 11 分布
157	木森	キモリ	野井倉字木森・田尾	台地	縄・古代		
158	鎌迫	カマザコ	野井倉字鎌迫・上苑上	台地	弥	土器	H 11 分布
159	上苑上	ウエンソンウエ	野井倉字上苑上	台地	古代	土師器	H 11 分布
160	甚堀	ジンボリ	野井倉字甚堀・上苑上	台地	弥	土器	H 11 分布
161	上苑B	ウエンソン	野井倉字上苑・下段・上苑下	台地	古代	土師器	H 11 分布
162	下段A	シモダン	野井倉字下段	台地	古代	土師器	H 11 分布
163	中牟田	ナカムタ	野井倉字中牟田	台地	古代		
164	田尾下	タオシタ	野井倉字田尾下	台地	古代	土師器	H 11 分布
165	上苑A	ウエンソン	野井倉字上苑	台地	弥・古代	山ノ口式，土師器	H 11 分布
166	前畑	マエハタ	蓬原字前畑	台地	古		H 11 分布
167	塩水流	シオズル	伊崎田字塩水流・前谷	台地	古	土師器，青磁	H 11 分布
168	鹿藤	カフジ	伊崎田字鹿藤・二反田	台地	縄		H 11 分布
169	東段B	ヒガシダン	伊崎田字東段	台地	古		H 11 分布
170	丸岡B	マルオカ	伊崎田字丸岡	台地	弥		H 11 分布
171	萩ノ迫	ハギノサコ	伊崎田字萩ノ迫・土江	台地	古		H 11 分布
172	土光	ドコウ	伊崎田字土光・三方境	台地	古		H 11 分布
173	渡ヶ迫	ワタリガサコ	伊崎田字渡ヶ迫・牧	台地	古		H 11 分布
174	牧	マキ	伊崎田字牧・堂免	台地	古		H 8 分布
175	小迫	コザコ	伊崎田字小迫・鹿藤	台地	縄・古		H 11 分布
176	川原田	カワハラダ	伊崎田字川原田・後迫・大道	台地	古		H 11 分布
177	見返段	ミカエリダン	伊崎田字見返段・前迫・中尾	台地	縄・弥		H 11 分布
178	仮宿A	カリジュク	伊崎田字仮宿・別当	台地	古		H 11 分布
179	稗ノ迫	ヒエノサコ	伊崎田字稗ノ迫・鍋前畑・蔦ノ段	台地	古		H 11 分布
180	鍋A	ナベ	伊崎田字鍋・西ノ迫	台地	古		H 11 分布
181	石割迫	イシワリザコ	伊崎田字石割迫・関松・弓場ヶ迫	台地	古		H 11 分布
182	榎	エノキ	野井倉字榎・一合田	台地	縄・古		H 11 分布
183	中原	ナカハラ	野井倉字中原	台地	弥・古	土師器	H 11 分布
184	東原	ヒガシハラ	野井倉字東原	台地	弥・古	土師器	H 11 分布
185	西原A	ニシハラ	野井倉字西原	台地	弥		H 11 分布
186	西原B	ニシハラ	野井倉字西原	台地	弥・古	土師器	H 11 分布
187	上原	ウエハラ	野井倉字上原・東原・西原	台地	弥・古	土師器	H 11 分布
188	中尾	ナカオ	野井倉字中尾・西原迫	台地	弥		H 11 分布
189	西原迫A	ニシハラザコ	野井倉字西原迫	台地	古代	土師器	H 11 分布
190	西原迫B	ニシハラザコ	野井倉字西原迫	台地	縄・弥	土器	H 11 分布
191	上ノ段A	ウエノダン	野井倉字上ノ段	台地	弥	土器	H 11 分布
192	上ノ段B	ウエノダン	野井倉字上ノ段	台地	弥	土器	H 11 分布
193	上ノ段C	ウエノダン	野井倉字上ノ段	台地	古代	土師器	H 11 分布
194	上ノ段D	ウエノダン	野井倉字上ノ段	台地	古代		H 11 分布
195	上ノ段E	ウエノダン	野井倉字上ノ段	台地	弥		H 11 分布
196	井手上B	イデウエ	野井倉字井手上	台地	古代	土師器	H 11 分布
197	稲付	イナツキ	野井倉字稲付・下段	台地	弥		H 11 分布
198	下段	シモンダン	野井倉字下段	台地	弥	土器	H 11 分布
199	和田上	ワダウエ	野井倉字和田上	台地	弥・古	土器，土師器	H 11 分布
200	大園B	オオゾノ	蓬原字大園・井手ノ上	台地	古		H 11 分布
201	大久保	オオクボ	野神字大久保・釣ヶ段	台地	弥		
202	下原	シモハラ	原田字下原	台地	古		H 10 分布
203	大塚	オオツカ	原田字大塚・出口	台地	縄・古	円墳５基，方墳１基（原田古墳を含む）	H 8 分布
204	前畑	マエハタ	野井倉字前畑	台地			
205	浜場A	ハマバ	野神字浜場	台地	古	土器（成川式）	H 16 分布

※　時代の「縄」は縄文時代、「弥」は弥生時代、「古」は古墳時代、「歴」は歴史時代を示す。（前・中・後・晩）は前期・中期・後期・晩期を示す。

第Ⅱ章　丸岡Ａ遺跡の発掘調査報告

はじめに

報告する調査成果は、調査担当者が記した調査記録及び事業報告書をもとに再度まとめ直したもので、確認の取れなかった成果については、掲載を見合わせている。

第１節　調査に至る経緯と調査の経過

１．調査に至る経緯

有明町役場耕地課は、有明町大字伊崎田の丸岡地区において県単独農業農村整備事業を計画し、計画の実施に伴い事業区内における埋蔵文化財の存在の有無について、鹿児島県教育庁文化財課及び有明町教育委員会社会教育課に照会を依頼した。

これを受けて鹿児島県教育庁文化財課が鹿児島県立埋蔵文化財センターと有明町教育委員会に埋蔵文化財の分布調査を依頼し、両者が平成４年に実施したところ、事業区内に遺物散布地として丸岡Ａ遺跡※1が存在することを確認した。これにより有明町役場耕地課・鹿児島県教育庁文化財課・有明町教育委員会社会教育課の三者は、埋蔵文化財保護と開発事業との調整を図ることを目的に協議を行ったところ、先ずは工事着手前に埋蔵文化財包蔵地の実態把握のために確認調査を実施し、その後に遺跡の取り扱いについて再び協議を行うことを約束した。

確認調査は、調査主体である有明町教育委員会の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成７年７月に実施した。調査の結果、縄文時代早期･前期･晩期の遺物包含層の存在が判明した。この確認調査の結果を受けて再度協議を実施したところ、事業の推進にあたっては遺跡の現状保存は困難であると判断し、事業実施前に記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。

本調査は、有明町役場耕地課からの受託事業として、鹿児島県立埋蔵文化財センターの支援･協力のもと、有明町教育委員会が調査主体となって実施した。

整理作業ならびに報告書作成については、有明町教育委員会が平成 17 年６月から整理作業を行い、平成 17 年 12 月末の報告書刊行をもって一連の作業を終了した。

２．調査の経過

確認調査の経過と成果

確認調査は、調査主体である有明町教育委員会から鹿児島県立埋蔵文化財センターへと依頼され、同センターの倉元良文氏・下園昌三氏を調査担当者として実施した。庶務は有明町教育委員会の黒川晃が行った。調査は有明町山重の北別府遺跡と合わせて実施されており、両遺跡合わせて、期間が平成７年７月 24 日から 28 日までの約５日間、対象面積が約 3,000 ㎡であった。丸岡遺跡では対象範囲内に 12 ヶ所のトレンチを設けて調査を行っている。

層位については、遺跡範囲が畑地帯となっていることから、削平を大きく受けている。そのため現在の地形は平坦になっている。各層の詳細については表Ⅱ.03 に述べている。

調査成果としては、確認調査トレンチの６トレンチから 12 トレンチにおいて、縄文時代早期･前期･晩期の遺物包含層が確認されており、この範囲を中心に遺物･遺構が拡がるものと考えられた。詳細については表Ⅱ.04 に述べている。

本調査の経過

本調査は、黒川晃・中水忍が庶務を担当し、中水・栗林文夫氏が発掘調査を実施した。調査期間は平成９年７月４日から８月 22 日までの 24 日間を費やし、調査面積は約 810 ㎡を測った。詳しい調査成果については後述する。

整理作業並びに報告書作成の経過

整理作業は調査終了後に担当者が一部を実施していたが諸事情※2により報告書刊行には至っていなかったが、一度はおもな調査成果の概要が報告されるに至った※3。しかし、調査成果の重要性から、平成 17 年度に町単独予算として整理作業及び報告書作成の費用を計上して作業を実施すること

となった。

整理作業は、東徹志のもと分担して行われ、各作業は川ノ上真理を中心に安野美子・若松孝雄・山元弓枝が従事した。庶務は東が行い、事務補助は吉井麗子が行った。

各作業は、土器の接合を川ノ上、石膏復元を若松が行い、遺構の図化を東・川ノ上が、土器の図化は実測を東、拓本を川ノ上、トレースを安野が行っている。遺物分布図は東・山元が図化している。

石器の図化については、東・山元・若松などが実測・トレースを行っている。

遺物の写真撮影は、おもに東が行い、一部の写真撮影を鹿児島県立埋蔵文化財センター福永修一氏・西園勝彦氏に、現像・焼付けを同センターの大村彌紀氏・中川ヒロミ氏にご協力いただいている。
その他の作業については、東・川ノ上が行い、報告書刊行をもって作業を完了している。

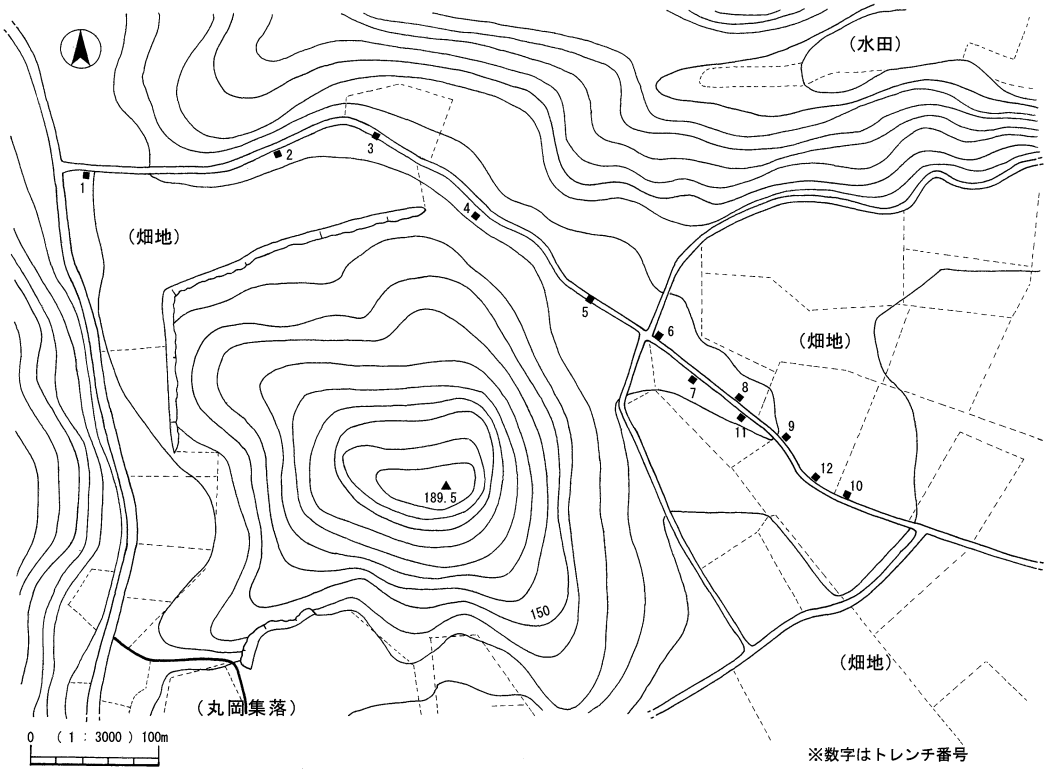
※１　調査時は「丸岡遺跡」と呼称しており、その後、遺跡台帳の改変に伴い「丸岡Ａ遺跡」と変更されている。
※２　調査後に多くの発掘調査が計画され、有明町役場の方針として報告書刊行より発掘調査の遂行による開発事業の推進が優先されたためである。
※３　平成15年度刊行の『屋部当遺跡・楠原遺跡』報告書中において、鹿児島県立埋蔵文化財センター調査課黒川忠広氏が報告している。

表Ⅱ.01　確認調査・本調査の組織

				確認	本調査	
調査主体	有明町教育委員会					
調査責任	〃		教　育　長	福岡　　孝	大脇　茂夫	
調査企画	〃	社会教育課	社会教育課長	川辺　繁久	高崎　成行	
〃	〃	〃	社会教育課長補佐	—	上村　宗市	※係長兼務
〃	〃	〃	社会教育係長	萩本昌一郎	〃	
庶　　務	〃	〃	主　　事	—	黒川　　晃	
〃	〃	〃	主　事　補	黒川　　晃	—	
庶務・調査	〃	〃	主　　事	—	中水　　忍	
調　　査	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査課	文化財研究員	倉元　良文	栗林　文夫	
	〃	〃	〃	下園　昌三		

表Ⅱ.02　整理作業と報告書作成の組織

調査主体	有明町教育委員会			
調査責任	〃		教育長	長重　逸郎
調査企画	〃	社会教育課	社会教育課長	中﨑　秀博
〃	〃	〃	社会教育課長補佐	森重　晃一
〃	〃	〃	社会教育係長	岩元　秀光
調査・庶務	〃	〃	主　　事	東　　徹志
事務補助	〃	〃	臨時職員	吉井　麗子
調査補助	〃	〃	〃	川ノ上真理・安野美子・若松孝雄・山元弓枝



図Ⅱ.01　確認調査トレンチ配置

表Ⅱ.03　確認調査の基本層序

層位	土色質	備考
Ⅰ層	表土	現在の耕作土
Ⅱ層	火山灰層	大正３年桜島噴火の火山灰
Ⅲ層	黒色腐食土層	
Ⅳ層	黄褐色土層	縄文時代前期の包含層
Ⅴa層	黄褐色土層	アカホヤ火山灰層
Ⅴb層	黄褐色パミス層	アカホヤ降下軽石層
Ⅵ層	黒色土層	縄文時代早期の包含層
Ⅶ層	暗茶褐色土層	
Ⅷ層	黄褐色パミス層	薩摩火山灰層

表Ⅱ.04　確認調査トレンチの概要

トレンチ番号	規模 幅×長さ(m)	遺構	遺物	備考
１Ｔ	1.2×2.3	ナシ	ナシ	地表面に近い部分の層序が削平される
２Ｔ	1.1×2.4	ナシ	ナシ	〃
３Ｔ	1.0×2.0	ナシ	ナシ	〃
４Ｔ	1.4×2.2	ナシ	ナシ	〃
５Ｔ	1.4×2.5	ナシ	ナシ	〃
６Ｔ	1.6×3.3	ナシ	土器・石器	縄文時代晩期の土器１点　縄文時代早期の土器１点と石器（剥片）が出土する
７Ｔ	2.6×3.2	ナシ	ナシ	地表面に近い部分の層が削平される
８Ｔ	1.6×3.4	ナシ	ナシ	〃
９Ｔ	1.4×3.8	ナシ	土器	縄文時代早期の土器９点が出土する　現地表面より約60㎝下が早期の包含層にあたる
10Ｔ	1.4×3.8	ナシ	ナシ	地表面に近い部分の層所が削平される
11Ｔ	1.5×3.1	ナシ	土器・石器	縄文時代早期の土器４点と石鏃１点が出土する　現地表面より約30㎝下が早期の包含層にあたる
12Ｔ	1.5×3.1	ナシ	土器	縄文時代晩期の土器１点と縄文時代早期の土器１点が出土する　現地表面より約80㎝下が早期の包含層にあたる

第２節　発掘調査の環境

１．丸岡Ａ遺跡の環境

丸岡Ａ遺跡（69 - 38）は、調査以前から縄文時代の遺跡として周知されている。立地は有明町北部域の台地上にあり、現地に存在する「丸岡」とよばれる丘の麓に位置する。標高は約 140mを測る。台地はシラス堆積により形成され、長く舌状に延びており、その台地の根元に遺跡は位置する。台地の南北には、現在、湧水を利用した水田の広がる谷が存在する。この湧水から発生した小川は、すぐに安楽川支流の本村川に流れ込んでいる。

同じ台地には、縄文時代晩期の向江原遺跡（69 - 30）、古墳時代の東段Ｂ遺跡（69 - 169）、弥生時代の丸岡Ｂ遺跡（69 - 170）が存在し、現在も遺跡の南西側には丸岡集落が広がる。遺跡の存在する町北部域の伊崎田校区は、町南部域に比べて山がちな地域であり、縄文時代前期から晩期の遺跡が集中する地域でもある。

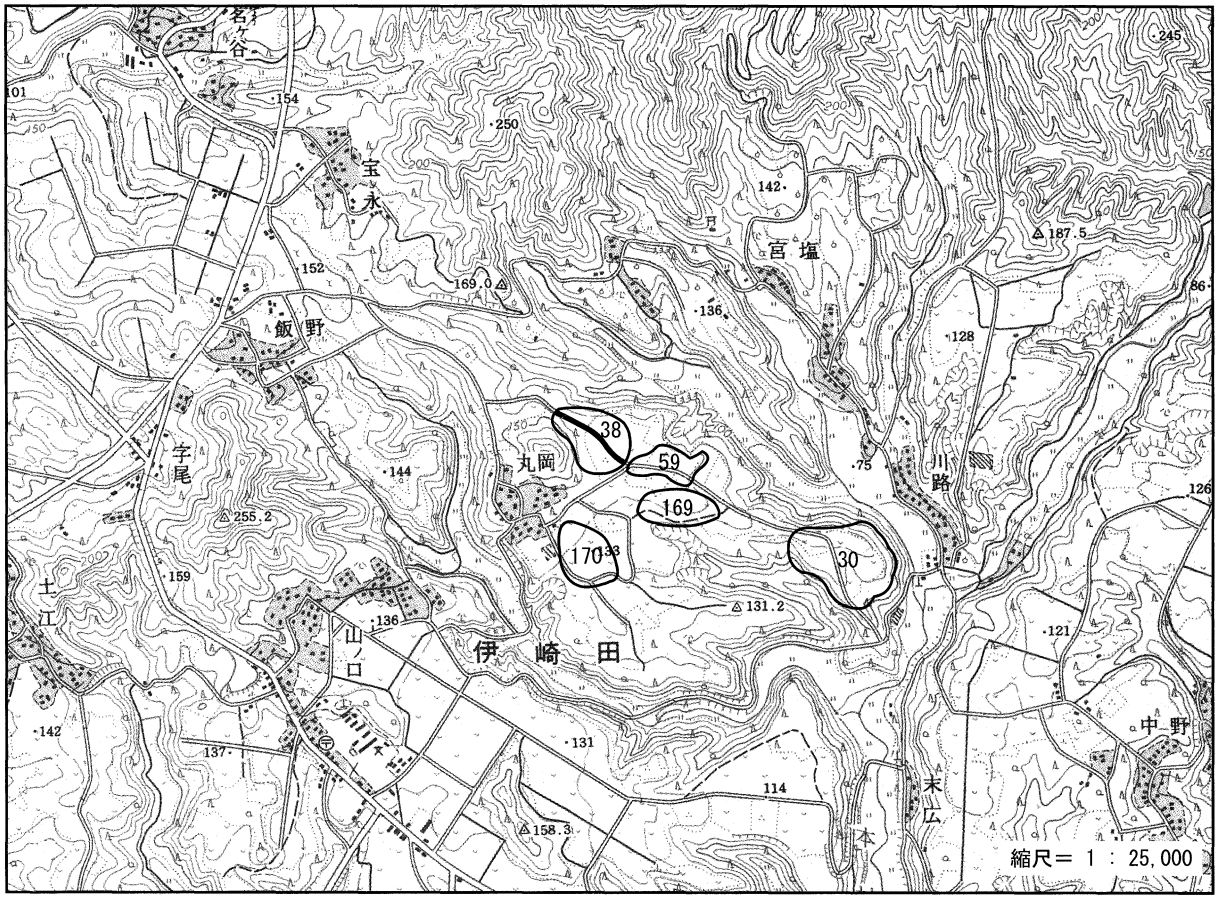
現在、調査地の周辺は農地整備が実施された畑地が広がっており、遺物包含層の多くが削平を受けているものと考えられる。

２．調査の方法

本調査は、調査対象範囲を「Ａ～Ｅ」の任意の地区に分割して調査区を設定し、南側より調査を開始している。調査区の配置状況は図Ⅱ.03 に示している。また、調査グリッドは 10m間隔で任意の点を基準に設定している。

遺物包含層などの掘り下げは、Ⅰ・Ⅱ層は調査員の立会のもと重機を用いて土を薄く剥ぎ取り、その後は前述の地区ごとに、人力による掘り下げ作業を実施している。遺物の取り上げは、遺物に通し番号を振って平板を用いて記録している。

遺構の精査及び検出作業は、基本層序第Ⅴ層上面とⅧ層上面において行っている。



図Ⅱ.02　丸岡Ａ遺跡の位置

３．基本層序

層位の遺存状況は、調査地周辺が農耕地として整備されており、全体が平坦な地形となっている。そのため層位も旧地表面に近い層は大きく削平を受けており、遺存していない。

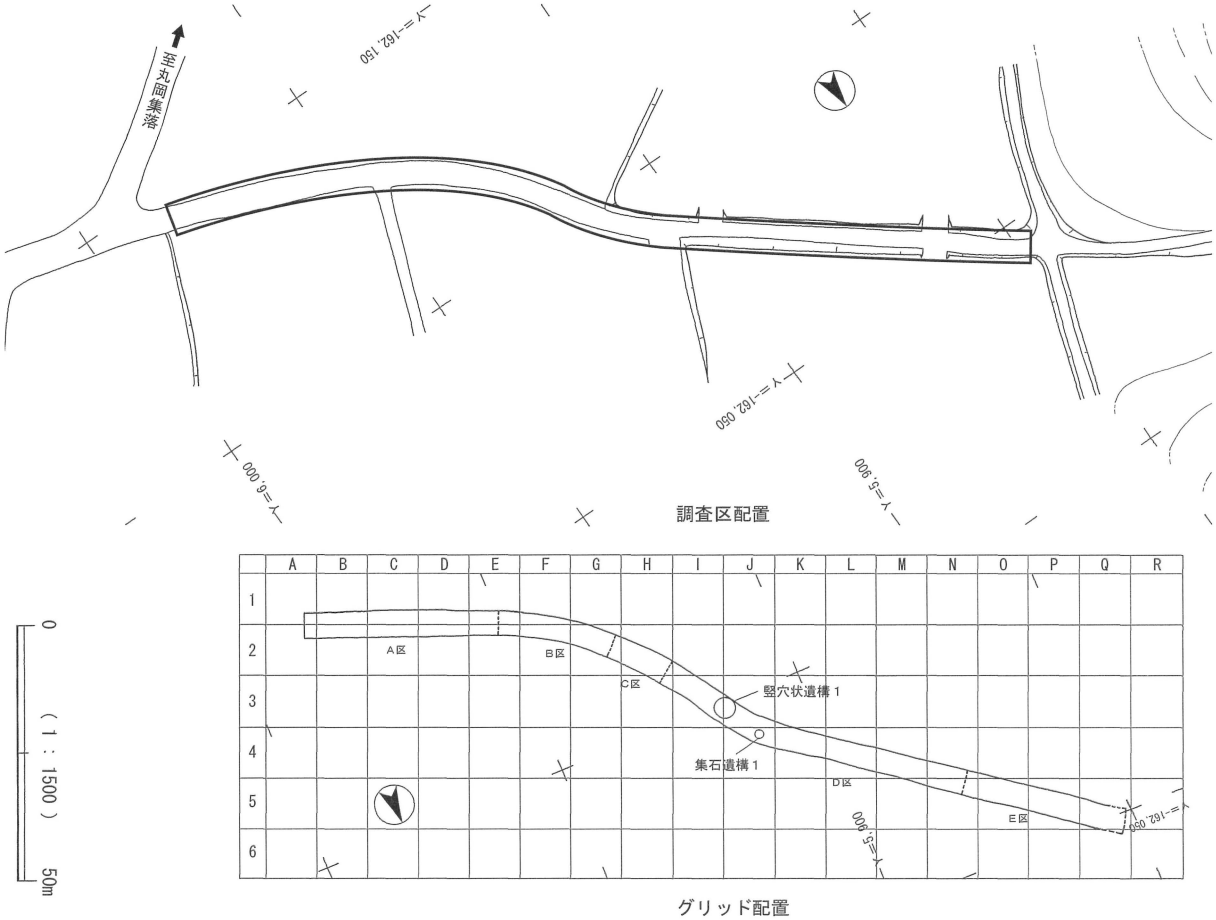
基本土層は表のとおりである。

写真Ⅱ.01　調査状況（表土除去）

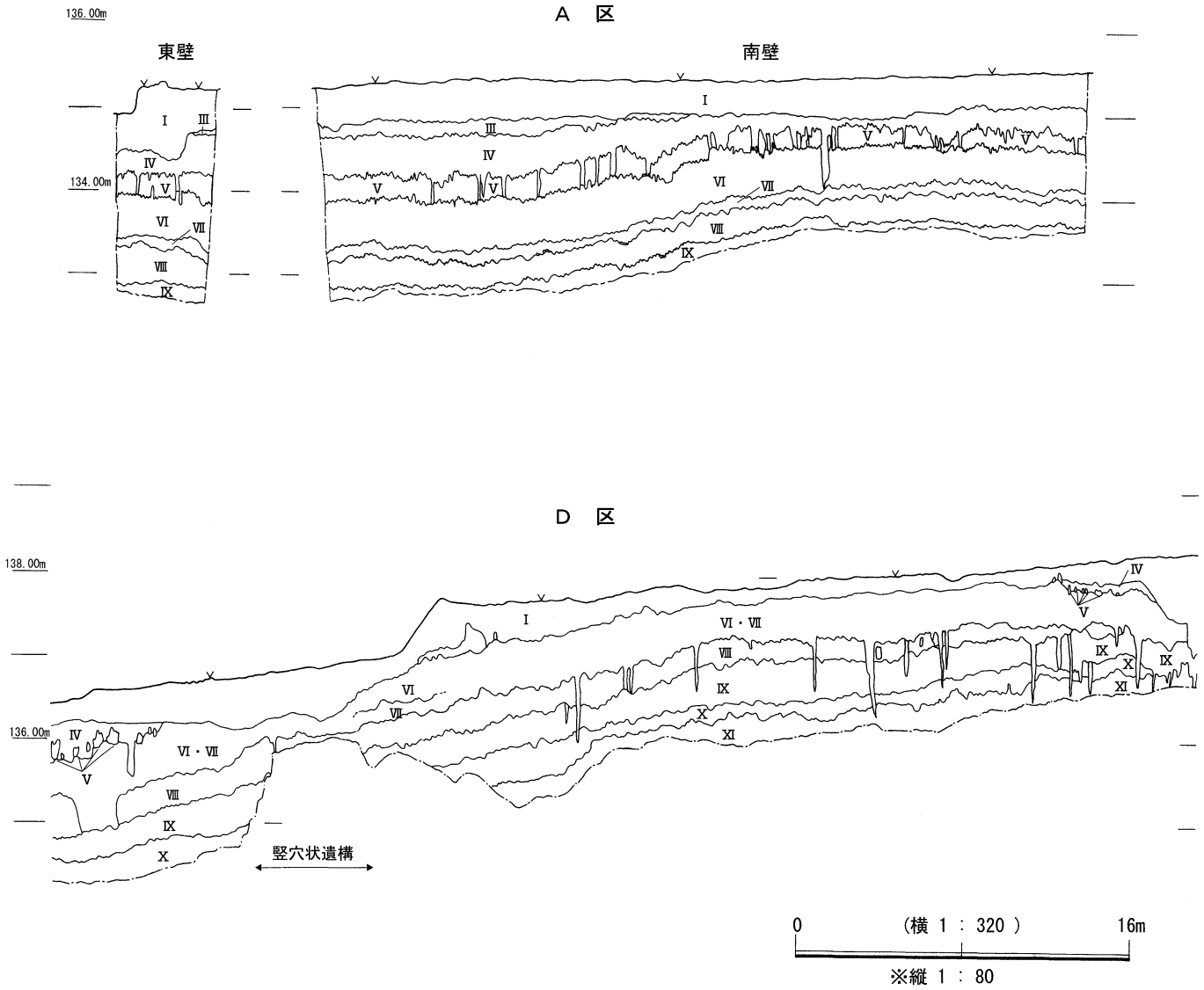
※１　出土遺物からは確認されていない、調査者の見解による。

※２　有明町既刊行報告書において「アカホヤ二次堆積層」と呼んでいる層である。

※３　有明町域全体では、アカホヤ降下火山灰層は切れ目のない層として確認されるが、この地点に関してはブロック状と化している。原因については不明であるが、層を観察すると降下軽石層が最も下位にあることから堆積自体は攪拌等を受けていないと考えられる。牧遺跡１・２次調査におけるアカホヤ降下火山灰層の堆積状況を参考にすると立木状態の樹木などの痕跡である可能性が考えられる（出口ほか 2005）。



図Ⅱ.03　調査区範囲とグリッド配置

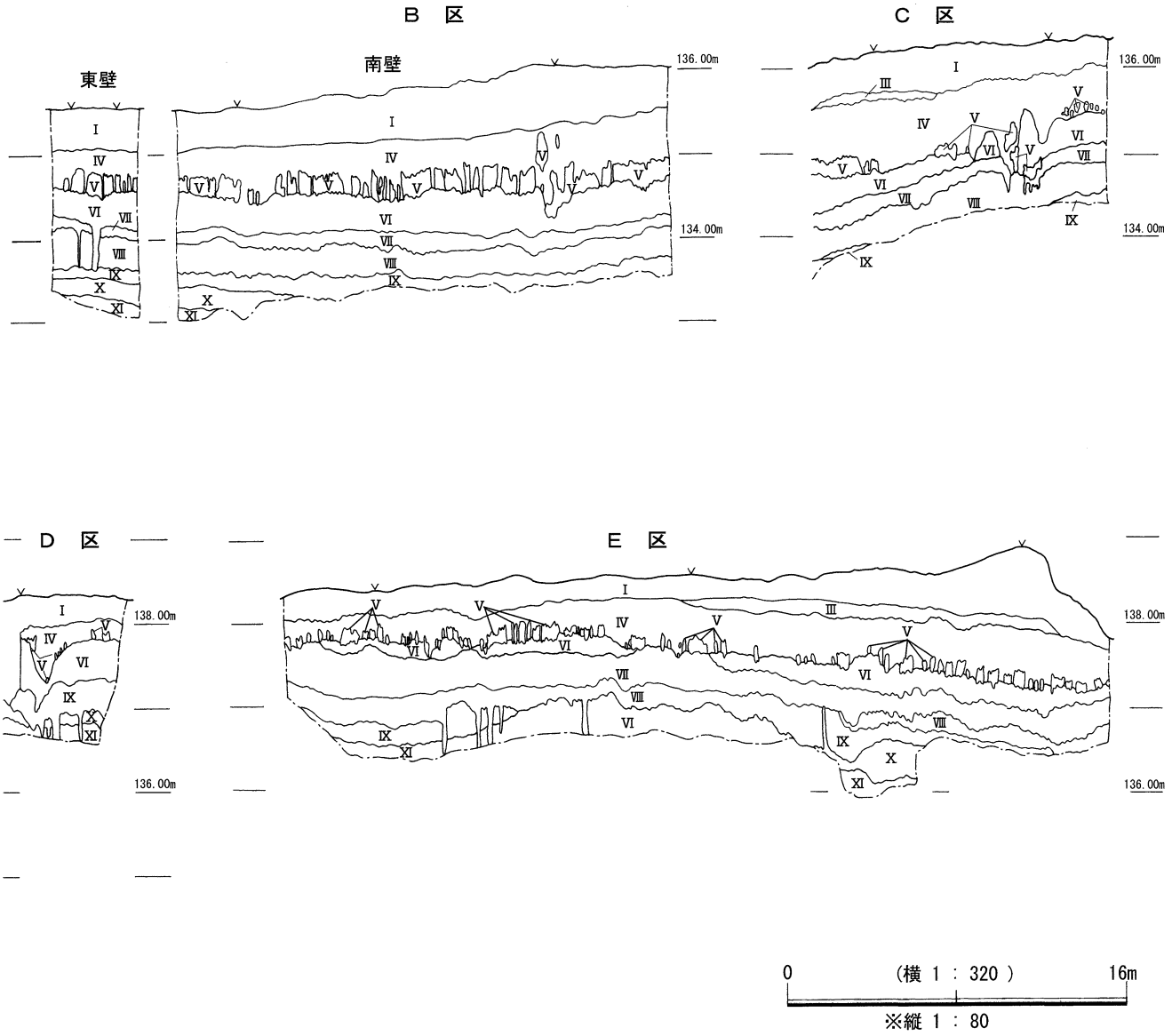


図Ⅱ.04　調査区土層断面（1）

表Ⅱ.05　基本層序

Ⅰ層	灰褐色土	現在の表土、近代から現代にかけての旧道の硬化面が見られる。
Ⅱ層	灰褐色火山灰土	層厚２cm程度で部分的に検出される。桜島起源の大正３年降下の火山灰と考えられる。
Ⅲ層	黒色腐植土	やや粘質のある腐植土層で、古墳時代以降の時期※1に相当する遺物包含層と考えられる。
Ⅳ層	黄褐色土※2	オレンジ色のパミスを多く含む。縄文時代晩期･前期の遺物包含層である。
Ⅴ層	黄橙色火山灰土	鬼界カルデラ起源のアカホヤ降下火山灰層と考えられる。全体的にブロック状に見られる。
Ⅵ層	黒色土	縄文時代早期の遺物包含層である。
Ⅶ層	暗茶褐色土	
Ⅷ層	黄褐色土	黄色の硬質土で、薩摩降下火山灰と考えられるパミスを含む。
Ⅸ層	茶褐色粘質土	
Ⅹ層	黄褐色土	サラサラした質感のシラス層である。
Ⅺ層	黄褐色粘質土	シラス層である。

※1　出土遺物からは確認されていない、調査者の見解による。
※2　有明町既刊行報告書において「アカホヤ二次堆積層」と呼んでいる層である。



図Ⅱ.05　調査区土層断面（2）

第３節　検出面１（縄文時代前期・晩期）の調査成果

検出面１は基本層序第Ⅴ層において遺構精査を実施した分を指す。遺物は、基本層序の第Ⅲ層及び第Ⅳ層より出土している。時期は縄文時代晩期・前期である。

第Ⅴ層上面を遺構検出面に、Ⅲ・Ⅳ層を遺物包含層とする。時期は縄文時代晩期と前期である。

１．Ⅴ層上面の検出遺構

Ⅴ層上面では遺構が検出されていない[※1]。

２．Ⅲ･Ⅳ層の出土遺物

ア）分布状況と出土状況（図Ⅱ.06）[※2]

Ⅲ層の遺物分布は、調査区の東西両端に集中しているが、これは削平による結果であり、Ⅲ層の遺存範囲と重なる。遺物の出土層はⅢ層の下位にあたり、Ⅳ層からⅢ層への漸移層にあたる層位と考えられる。

遺物も同一地点においてⅢ･Ⅳ層に縄文晩期のものが分布することからも、Ⅲ層出土の遺物としたものは、本来はⅣ層に属していた可能性が高い。そのため、ここではⅢ･Ⅳ層出土遺物を一括して報告している。

分布の特徴としては、１～３類のそれぞれ分布の集中範囲が分かれる傾向が見られる。

イ）土器類（図Ⅱ.07～10、表06・07）

Ⅲ・Ⅳ層出土の土器は、おおまかな特徴から１～６類に分けている。分類番号は任意である。個体数は細片のものが多く、把握できなかった。以下、分類別に述べ、個別の詳細は表に述べる。

土器１類（図Ⅱ.07）

１類とした１～16は、やや厚手の器厚に、器面をミガキないしナデ・条痕などで整える。縄文時代晩期の黒川式に比定すると考えられる。

口縁部４・６の外面にはミガキが密に施される。胴部のほとんどがミガキを施し、８・10と９・11が同一個体の可能性がある。９・11の色調は乳白色に近い、にぶい黄橙（10YR7/4）を呈し、他がおもに暗褐色を呈するのと異なる。底部は、12・13の端部が外に張り出す。

土器２類（図Ⅱ.08）

２類とした17～34は、外面に幅の狭い沈線文を施文する。縄文時代前期のおもに曽畑式に比定すると考えられる。

さらに外面施文の特徴からは、羽状が主体17～23、横位と縦位ないし斜位の25～28、横位が主体の29～34に分けられる。

口縁部17～23は､外面に羽状が主体の文様をもっている。口縁17～22は口唇部にキザミをもち、端部が外反する。外面に見られる沈線文の施文原体は､19がヘラ状工具､その他が貝殻と考えられる。原体の貝殻も18・20とそれ以外とでは異なる。21の内面にはやや歪んだ円形の刺突文が２条見られる。22の内面にも、やや不明瞭であるが、斜位の沈線文が見られる。口縁23は内湾した口縁をもち、口唇部の一部に突起部が残存する。文様の施文原体は貝殻と考えられる。また、23は接合した２点の破片の色調が異なっており、それぞれは赤色化・黒色化している。破砕後の環境が異なった結果と考えられる。

口縁部25～胴部28は、横位と縦位ないし斜位の沈線文をもっている。胴部24の沈線文は、ヘラ状工具で施文され、内面に縦位のものが見られる。口縁25と胴部28は同一個体と考えられる。胎土中に多くの混和材を含み、とくに金色雲母が多く見られる。

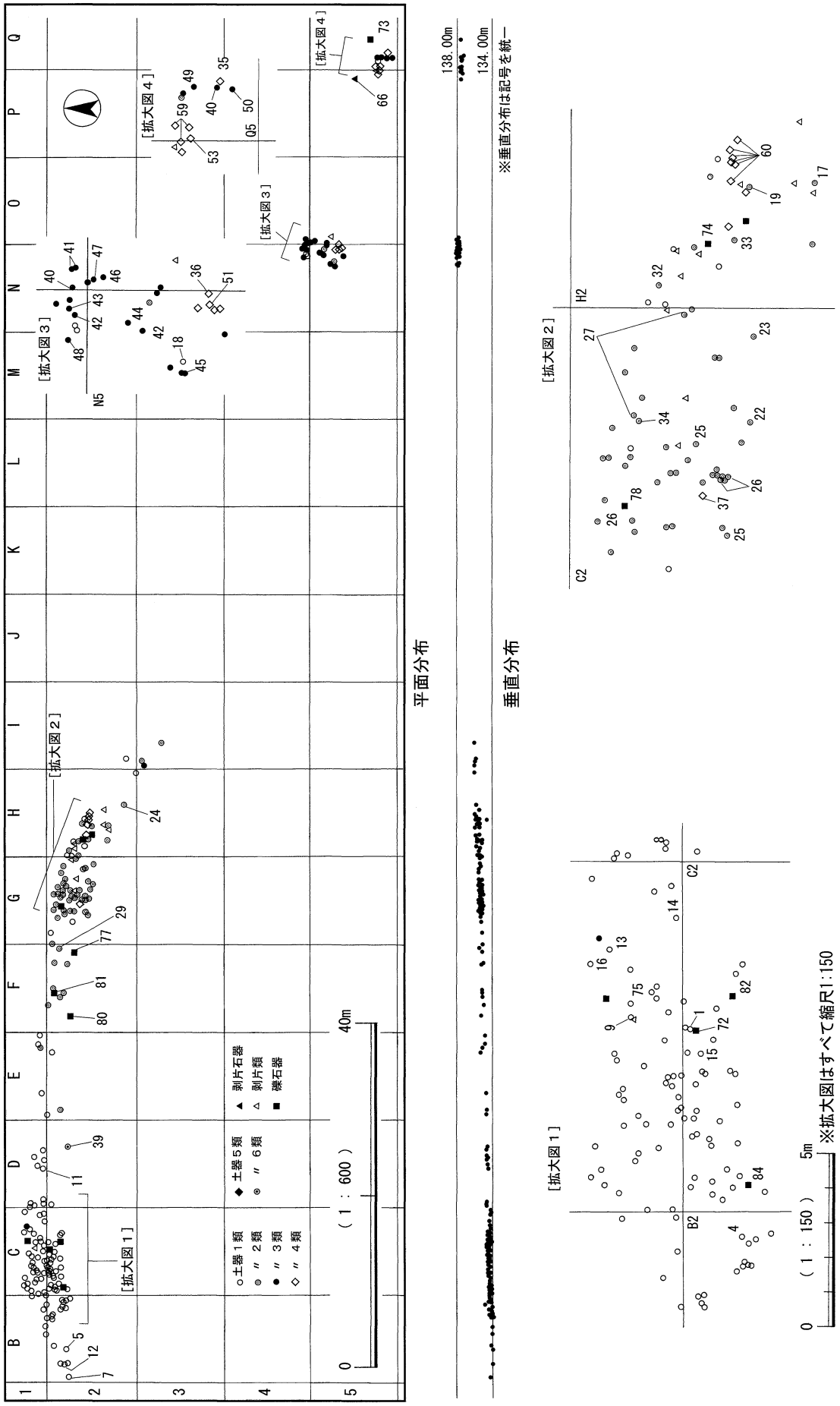
口縁部29～34は外面に横位が主体の文様をもっている。29･30･32は内面にも横位の沈線文をもち、33・34には横位の沈線文に加えて連続した長方形の刺突が見られる。それらに比べて頸部31はやや趣きが異なり、内面をミガキで整える。平栫式であろうか。

土器３類（図Ⅱ.09・図Ⅱ.10）

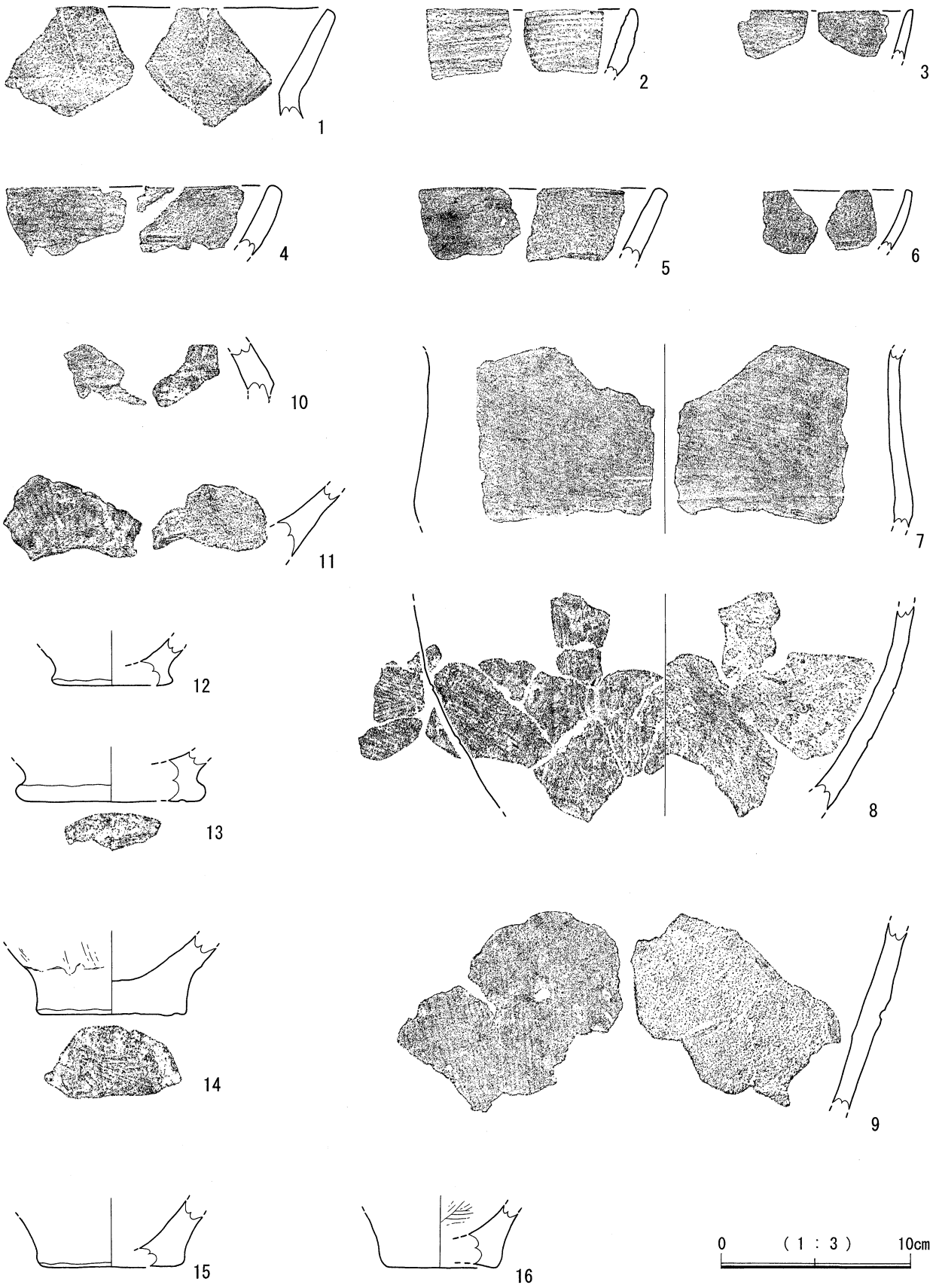
３類40～54・59・60は外面に粗い貝殻条痕を密に施す。型式は轟式と考えられる。40～45と46～48とはそれぞれ同一個体と考えられる。いずれも胎土中にも多量の混和材が含まれ、赤色砂が多いという特徴をもつ。口縁40・41には微隆起線文が見られ、この文様の下半には貝殻背面を押捺したような施文が存在する。胴部49・50は前述の両者とは調整・胎土などが異なる。

51～54は同一個体と考えられ、図面上でほぼ完形に復元できる。器面は内外面に貝殻条痕が施文され、口縁部外面は格子状である。口縁部には突起が貼り付けられる。胎土中の混和材に５㎜大以上の赤色砂が含まれる。

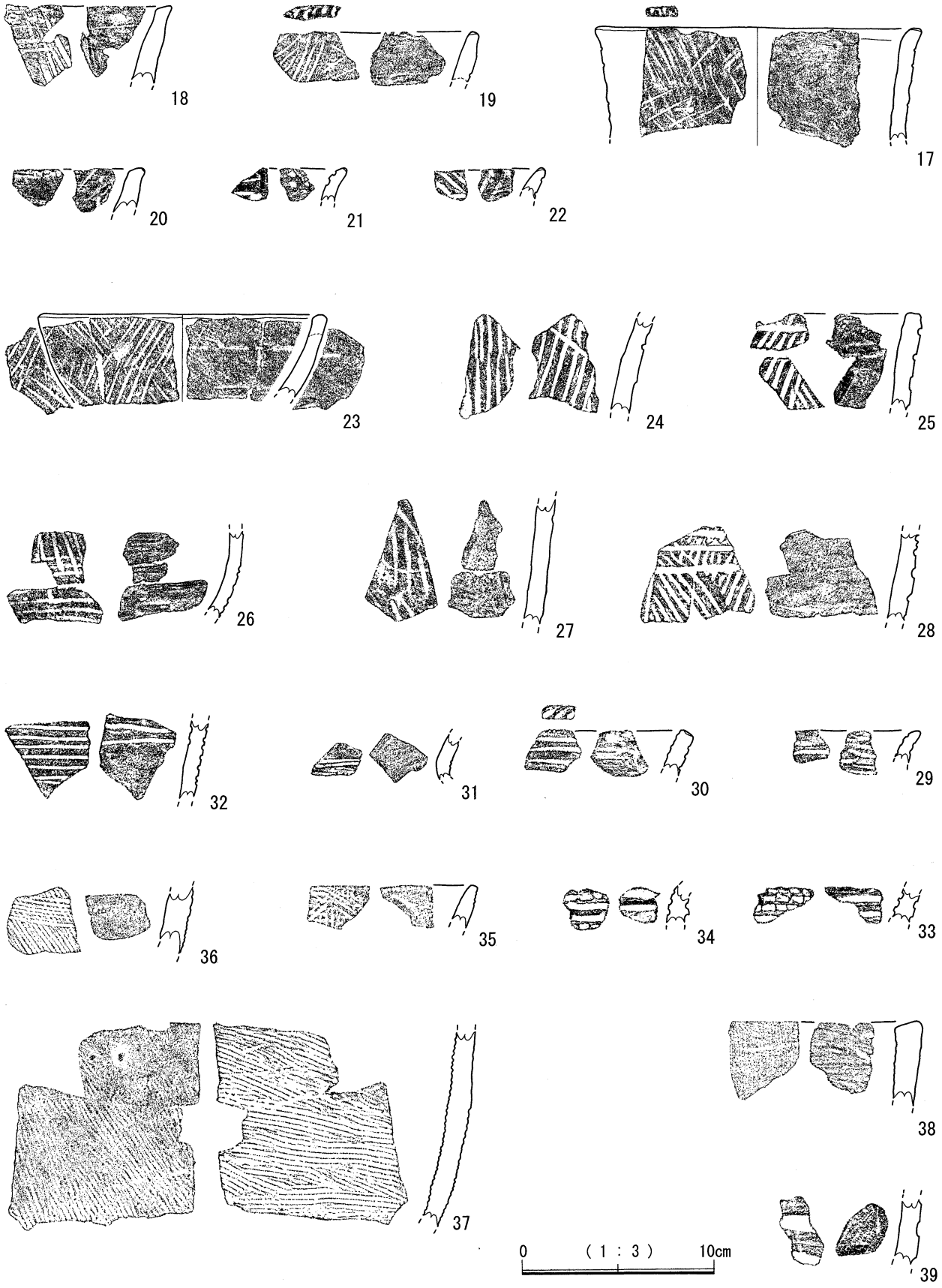
底部59は、破断面と接合の状況から、上下を打ち欠いて再加工した可能性が考えられる。性格は不明である。内面には円形剥離が多く見られ、内面は黒色化、外面は赤色化する。



図Ⅱ.06　Ⅲ・Ⅳ層 出土遺物の分布状況



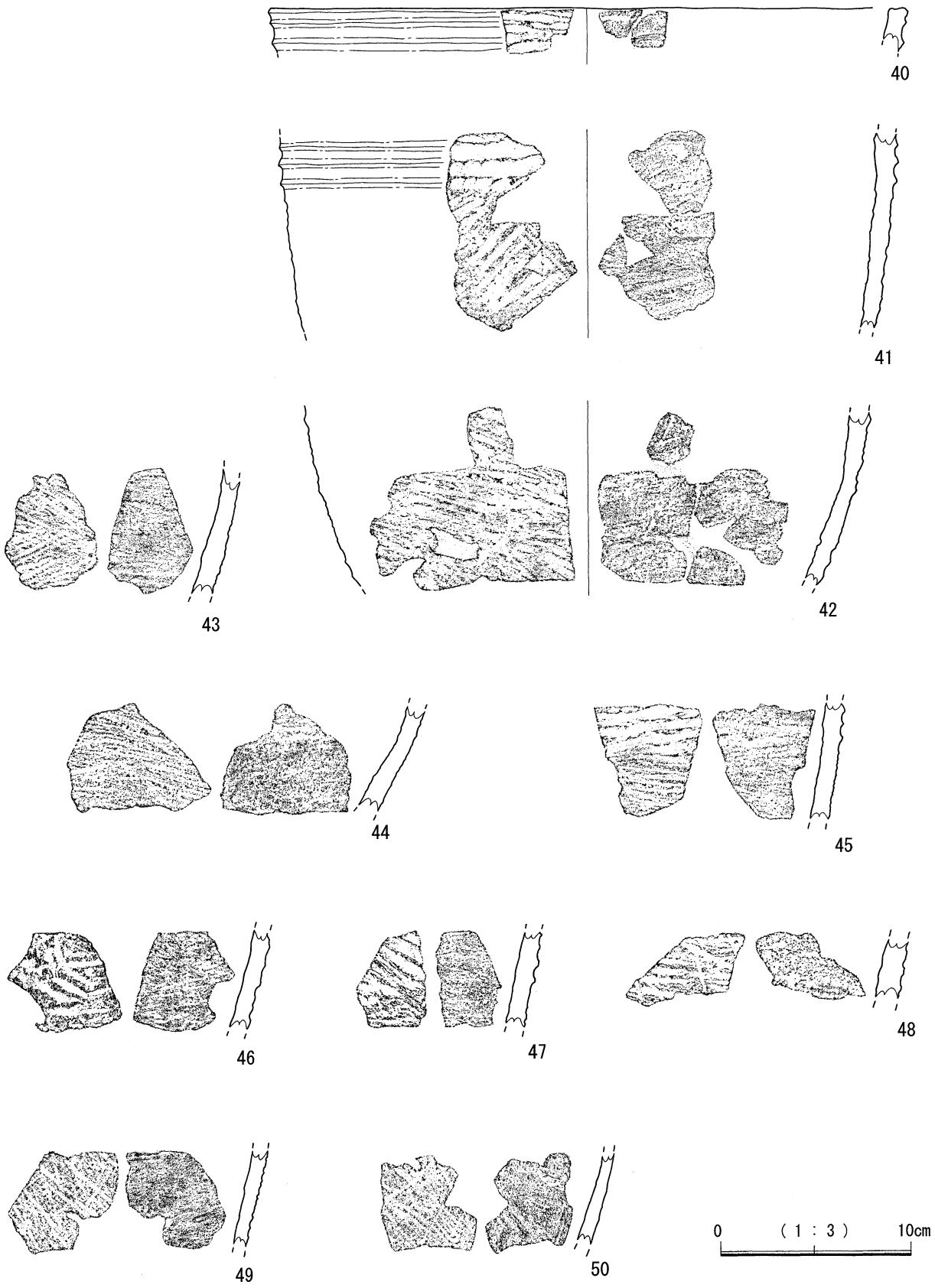
図Ⅱ.07　Ⅲ・Ⅳ層 出土土器（1）



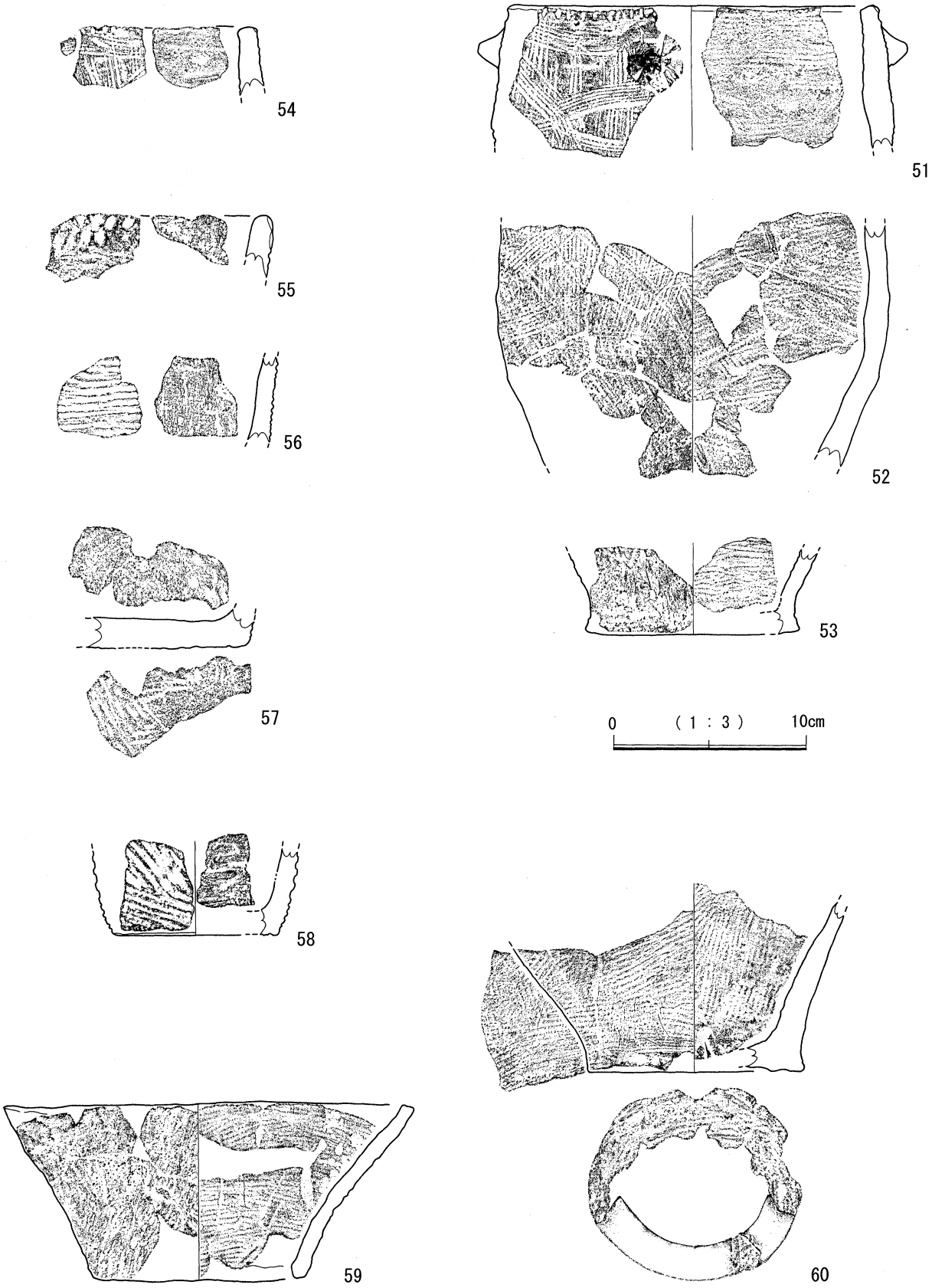
図Ⅱ.08　Ⅲ・Ⅳ層 出土土器（2）

表Ⅱ.06　Ⅲ･Ⅳ層　出土土器の観察表（1）

挿図番号	図番号	遺物番号（取り上げ）	部位	色調 内面	色調 外面	調整・文様 内面	調整・文様 外面	胎土中の混和材 粒度(mm)	種類 石英	長石	雲母	黒色砂	赤色砂	備考
Ⅱ.07	1	C−2, iv, 74	口縁	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	横のナデ	左へのケズリ後、横のナデ	0.5	◎	○	−	△	△	口縁部外面のみが、煤けて炭化物が付着
	2	ii, iii, 6	口縁	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/4	横の貝殻条痕文の後横のナデ	横のナデ	0.5	○	○	◎黒	○	−	内面がやや黒色化し、外面に炭化物がわずかに付着
	3	iii, iv層一括	口縁	明褐 7.5YR5/6		横のミガキ（施文単位幅約２㎜以下）	横のミガキ（施文単位幅約２㎜以下）	0.5	○	○	−	○	○	
	4	B−2, iv, 114	口縁	にぶい褐 7.5YR5/4		横のナデ	横のミガキ（施文単位幅約４㎜）	0.5	◎	○	△金	○	○	焼成後に穿孔ありか？
	5	B−2, iv, 53	口縁	にぶい褐 7.5YR5/4	暗灰黄 2.5Y4/2	横のナデ	横のナデ	0.5	○	○	○金	○	○	外面が黒色化
	6	iii層一括	口縁	にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい赤褐 5YR4/3	横のミガキ（施文単位幅は不明）	横のナデ	0.5	◎	○	△黒	○	○	外面がやや黒色化
	7	B−2, iii, 51	胴	にぶい赤褐 5YR4/3		横のナデ後、密度がやや疎の横のミガキ（施文単位幅約３㎜）	横のナデ後、密度が疎の横のミガキ（施文単位幅約２㎜以下）	0.5	○	◎	△金	○	△	内外面が黒色化し、外面に炭化物がわずかに付着
	8	D−1, iv, 85 iii層一括	胴	褐 7.5YR4/3	赤褐 5YR4/6	左斜め上へのケズリ後、ナデ	おもに上へのケズリ（貝殻条痕か？）後、ナデもしくはミガキ	2	◎	○	△黒	○	△	内面が黒色化し、外面の一部に炭化物が付着
	9	C−1, iv, 103	胴	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄橙 10YR6/4	ナデか？	縦のミガキ（施文単位幅約２～３㎜以上）	0.5	○	○	△金	◎	△	内面下端に炭化物が付着、外面上半はやや黒色化し、炭化物がわずかに付着
	10	iii層一括	胴	褐 7.5YR4/4	赤褐 5YR4/6	横のケズリ	横のナデ	2	◎	○	△黒	○	△	
	11	D−1, iv, 89	胴	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	横のナデ	縦のミガキ（施文単位幅約３㎜以上）	0.5	○	○	△金	◎	△	やや摩滅
	12	B−2, iv, 126	底	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	ナデ	横のナデ	1	○	◎	−	○	△	やや摩滅 内面が黒色化し、炭化物が付着
	13	C−1, iv, 7	底	灰黄 2.5Y6/2	にぶい黄橙 10YR6/4	縦のナデ	横のナデ 底面：圧痕か？	1	○	○	△金	○	○	外面がやや黒色化
	14	C−1, iv, 79	底	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4	縦のナデか？	横のナデ後、上端部をミガキ 底面：工具ナデ	1	○	◎	△金	△	△	内面に炭化物が付着 外面がやや黒色化
	15	C−2, iv, 68	底	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	縦のナデ	横のナデ	2	○	◎	△金	△	○	
	16	C−1, iv, 8	底	黄灰 2.5Y4/1	にぶい黄橙 10YR7/3	丁寧なナデもしくはミガキ	ミガキ 底面：一定方向のナデ	0.5	△	△	−	◎	△	内面が黒色化
Ⅱ.08	17	H−2, iv, 302	口縁	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/4	縦の強いナデもしくはケズリ後、横のナデ	口唇部：縦のキザミ ナデ後、貝殻腹縁による羽状の沈線文	0.5	◎	○	○黒	○	△	外面はやや黒色化し、内面は黒色化
	18	N−5, iv, 246	口縁	暗灰黄 2.5Y5/2	にぶい黄褐 10YR5/4	横のケズリ後、横のナデ	粗いナデ後、貝殻腹縁による羽状の沈線文	1	○	◎	○金	△	△	内面は黒色化し、外面には炭化物が付着
	20	P−5, vi, 389												
	19	H−2, iv, 274	口縁	にぶい褐 7.5YR5/4		横のナデ	やや粗い横のナデ後、羽状の沈線文	1	○	◎	○金	○	−	
	21	iv層一括	口縁	橙 7.5YR6/6		やや歪んだ円形刺突文が２条	羽状の沈線文	0.5	○	○	○金	○	△	
	22	G−2, iv, 313	口縁	にぶい黄褐 10YR5/3		横のナデ	口唇部：縦のキザミ 羽状の沈線文		○	○	−	○	−	内面が黒色化し、外面もやや黒色化
	23	G−2, iv, 317 H−2, vi, 465	口縁	317：内外面が黄褐 2.5Y5/3 465：内外面が橙 7.5YR6/6		斜め（左上がり）のケズリ後、横のナデ	ナデ後、羽状の沈線文	1	○	◎	○金	○	△	接合した２点の破片の色調が異なる
	24	H−2, iv, 266	胴	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	ナデ後、縦位の沈線文	ナデ後、縦位の沈線文と斜位ないし横位の沈線文	1	◎	○	○金	○	△	外面の一部が黒色化、黒斑か？
	25	G−2, iv, 180, 192	口縁	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3	横のナデ	ナデ後、斜位の沈線文後、横位の沈線文	1	○	◎	◎金	△	△	内外面が黒色化
	28	NOなし	胴											
	26	G−2, iv, 162, 173, 175	胴	にぶい黄橙 10YR6/4	橙 5YR6/6	ナデないしミガキ	ナデ後、斜位ないし横位の沈線文	1	○	○	○金	○	△	26の外面は赤色化
	27	G−2, iv, 189, 291												
	29	F−2, iii, 148	口縁	にぶい褐 7.5YR5/4		ナデ後、横位の沈線文	ナデ後、横位の沈線文	1	◎	○	○金	○	△	
	30	12, iii, 18	口縁	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/4	横の貝殻条痕	口唇部：斜めのキザミ ナデ後、横位の沈線文	1	○	○	○金	◎	△	内面が黒色化
	31	iii層一括	胴	灰黄褐 10YR4/2	にぶい褐 7.5YR5/4	ミガキ	ナデ後、横位の沈線文	0.5	○	△	△金	◎	△	内面が黒色化
	32	H−2, iv, 289	胴	にぶい褐 7.5YR5/4		ナデ後、横位の沈線文	ナデ後、横位の沈線文	1	○	◎	○金	○	△	
	33	H−2, iv, 295	（口縁）	にぶい黄褐 10YR4/3		ナデ後、横位に並行する刺突文	ナデ後、横位の沈線文	1	◎	○	○金	○	○	内外面が黒色化
	34	G−2, iv, 190	（口縁）	にぶい黄褐 10YR4/3		ナデ後、横位の沈線文と刺突文	ナデ後、横位の沈線文	1	◎	○	○金	○	○	内外面が黒色化
	35	Q−5, iv, 202	胴	にぶい黄褐 10YR5/4		左へのケズリ	口唇部：横のナデ 格子状？の貝殻条痕	0.5	○	◎	○金	○	○	内外面が黒色化
	36	N−5, iv, 240	胴	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/4	ナデ	斜位の貝殻条痕後、横位の貝殻条痕	0.5	○	◎	○金	○	○	内外面が黒色化
	37	G−2, iv, 170	口縁	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3	横位の貝殻条痕	斜位の貝殻条痕	0.5	○	◎	○金	○	○	内外面が黒色化し、外面に炭化物が付着
	38	6, v, 11	胴	黄褐 2.5Y5/3	にぶい黄褐 10YR5/4	横のミガキ（施文単位幅約４㎜）	口唇部：横のミガキ（施文単位幅約４㎜）縦にハケメに類似した工具ナデを施した後、弱くナデ消す	1	○	◎	○金	○	△	内面がやや黒色化
	39	D−2, iv, 94	胴	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	縦のケズリ？後、横のナデ	横のナデ後、沈線文	0.5	○	◎	○黒	○	△	内外面がやや黒色化



図Ⅱ.09　Ⅲ・Ⅳ層 出土土器（3）



図Ⅱ.10　Ⅲ・Ⅳ層 出土土器（4）

表Ⅱ.07　Ⅲ･Ⅳ層　出土土器の観察表（2）

挿図番号	図番号	遺物番号（取り上げ）	部位	色調 内面	色調 外面	調整・文様 内面	調整・文様 外面	胎土中の混和材 粒度（mm）	石英	長石	雲母	黒色砂	赤色砂	備考
Ⅱ.09	40	O−4, iv, 222	口縁	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4	口縁端部：ケズリ後、横のナデ 口縁部：左斜め下へのケズリ 胴部下半：左へのケズリ	口縁部：貝殻条痕後、下半に貝殻背面？の押捺を施した微隆起線文を数条巡らす 胴部下半：おもにやや左上がりの貝殻条痕	2	○	◎	○金	○	◎	外面が黒色化し、炭化物が付着
	41	O−4, iv, 218. 250 表採	胴（口縁）											
	42	N−4, iv, 226 N−5, iv, 234 P−5, vi, 409	胴											
	43	N−4, iv, 225	胴	にぶい褐 7.5YR5/5	にぶい黄褐 10YR5/5	左へのケズリもしくは、左へのケズリ後、弱いナデ	おもにやや左上がりの貝殻条痕	2	○	◎	○金	○	◎	外面が黒色化し、炭化物が付着
	44	N−5, iv, 233	胴											
	45	N−5, iv, 253	胴											
	46	D−5, iv, 219	胴	にぶい黄褐 10YR5/4	橙 7.5YR6/6	左へのケズリ後、弱いナデか？	貝殻条痕	2	○	◎	○金	○	◎	内外面が黒色化ないし赤色化
	47	O−5, iv, 220	胴											
	48	N−4, iv, 228	胴		にぶい黄褐 10YR5/4									
	49	Q−5, iv, 204	胴	にぶい黄 2.5Y6/3	橙 7.5YR6/6	ケズリ後、ナデ	貝殻条痕	1	○	○	○金	○	○	内外面が黒色化ないし赤色化
	50	Q−5, iv, 201. 203	胴											
Ⅱ.10	51	N−5, iv, 243	口縁	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	横の貝殻条痕後、ナデ	口唇部：横のナデ 口縁端部：横のナデ後、縦位のキザミ 口縁部：格子状の貝殻条痕 胴～底部：貝殻条痕 底面：ケズリ	1	◎	◎	○金	○	○5㎜以上あり	外面に突起部 内面が黒色化し、外面は赤色化
	52	P−5, vi, 399. 400	胴											
	53	P−5, iv, 238一括	底	にぶい黄橙 10YR6/4										
	54	P−5, vi, 401	口縁	にぶい黄褐 10YR5/3										
	55	9T, v	口縁	橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	ナデ？	口縁端部：縦位のキザミが２条 横位の貝殻条痕	1	○	△	○金	◎	○	内面が赤色化
	56	H−2, iv, 301	胴	にぶい黄橙 10YR6/4		上へのケズリもしくは縦の工具ナデ	横位の貝殻条痕	1	○	○	○金	◎	○	外面がやや黒色化
	57	9T, iv, 1?	底	にぶい黄橙 10YR6/4		ナデ	貝殻条痕後、ナデ	3	○	◎	○金	○	○	
	58	H−2, iv, 367	底	橙 7.5YR6/6	橙 5YR6/6	横のケズリ後、横のナデ	斜め（左上がり）の貝殻条痕	1	○	○	○金	○	△	外面が赤色化
	59	P−5, iv, 209. 210. 212. 213. 238一括	底	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	横の貝殻条痕	貝殻条痕後、横のナデ後、一部にミガキ	2	○	◎	○金	○	◎	内面が黒色化し、外面は赤色化 内面には円形剥離が見られる
	60	N−2, iv, 276. 277. 278. 279. 280. 281	底	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい褐 7.5YR5/4	貝殻条痕後、一部にナデ	貝殻条痕	1	○	◎	△黒	△	△	内面が黒色化し、外面は赤色化

底部60は、上端の縁は歪であるが、破断面の状況から打ち欠いた可能性が考えられる。また、底面も打ち欠いた可能性がある。供献用であろうか。

土器４類（図Ⅱ.08）

４類35～37は、外面に貝殻条痕を密に施す。型式は轟式系であろうか。35～37はほぼ類似しており、同一個体の可能性も考えられる。37の内面には横位の貝殻条痕が見られる。

土器５類（図Ⅱ.10）

５類55～58は外面に明瞭な横位の貝殻条痕を密に施す。縄文時代早期の前平式と考えられ、調査地内に見られた地層横転などにより、Ⅵ層の遺物がⅣ層と同じ高さで出土したものと考えられる。

土器６類（図Ⅱ.08）

１～５類以外を６類とした。口縁部38は型式が不明である。内面と口唇部に幅広（４㎜程）のミガキを施し、外面は縦にハケメに類似した工具ナデを施した後に弱くナデ消す。胴部39は幅のある沈線文が施されており、縄文時代中期の阿高式と考えられる。

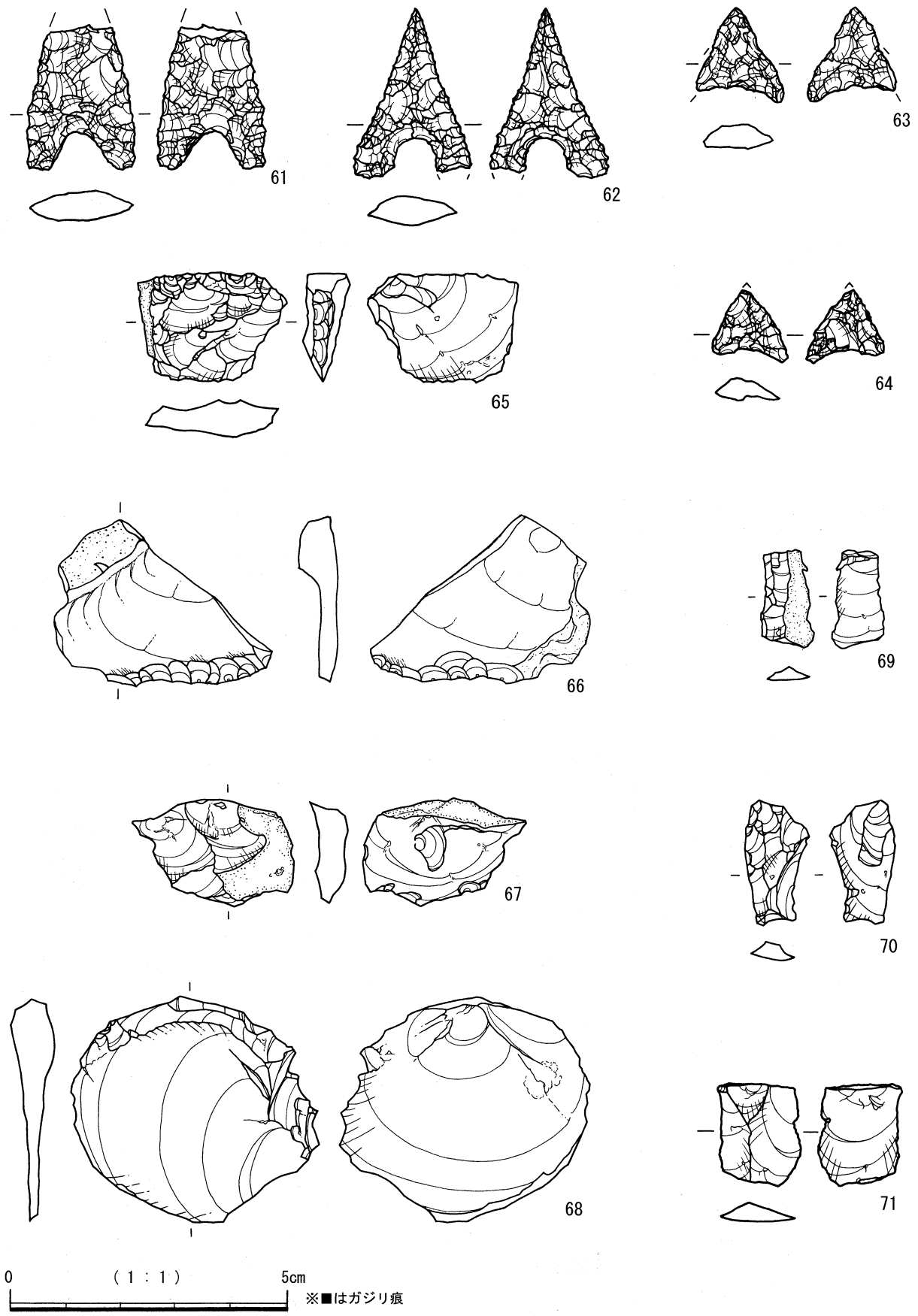
ウ）石器類（図Ⅱ.11・12、表08・09）[※3]

石器は、ほぼⅣ層から出土し、石鏃４点、剥片類57点、磨製石斧２点、磨石６点が出土している。

石材は、石鏃や剥片類のほとんどが黒曜石であり、とくに黒曜石（不明１）[※4]としたものが最も多い。剥片68は隣接する志布志町に所在する前川･安楽川上流域に見られるホルンフェルスを用いている。磨石に見られる円礫は遺跡周辺では台地を降りた本村川流域で採取できる。

剥片類の中には、残核や原石と思われるものがあり、石鏃を製作していた可能性が考えられる。また、再加工品も数点見られる。図化してない取上番号369は、熱処理とは異なる被熱の可能性がある。

磨製石斧72・73は、破損後に加工した可能性が考えられる。



図Ⅱ.11　Ⅳ層 出土石器（1）

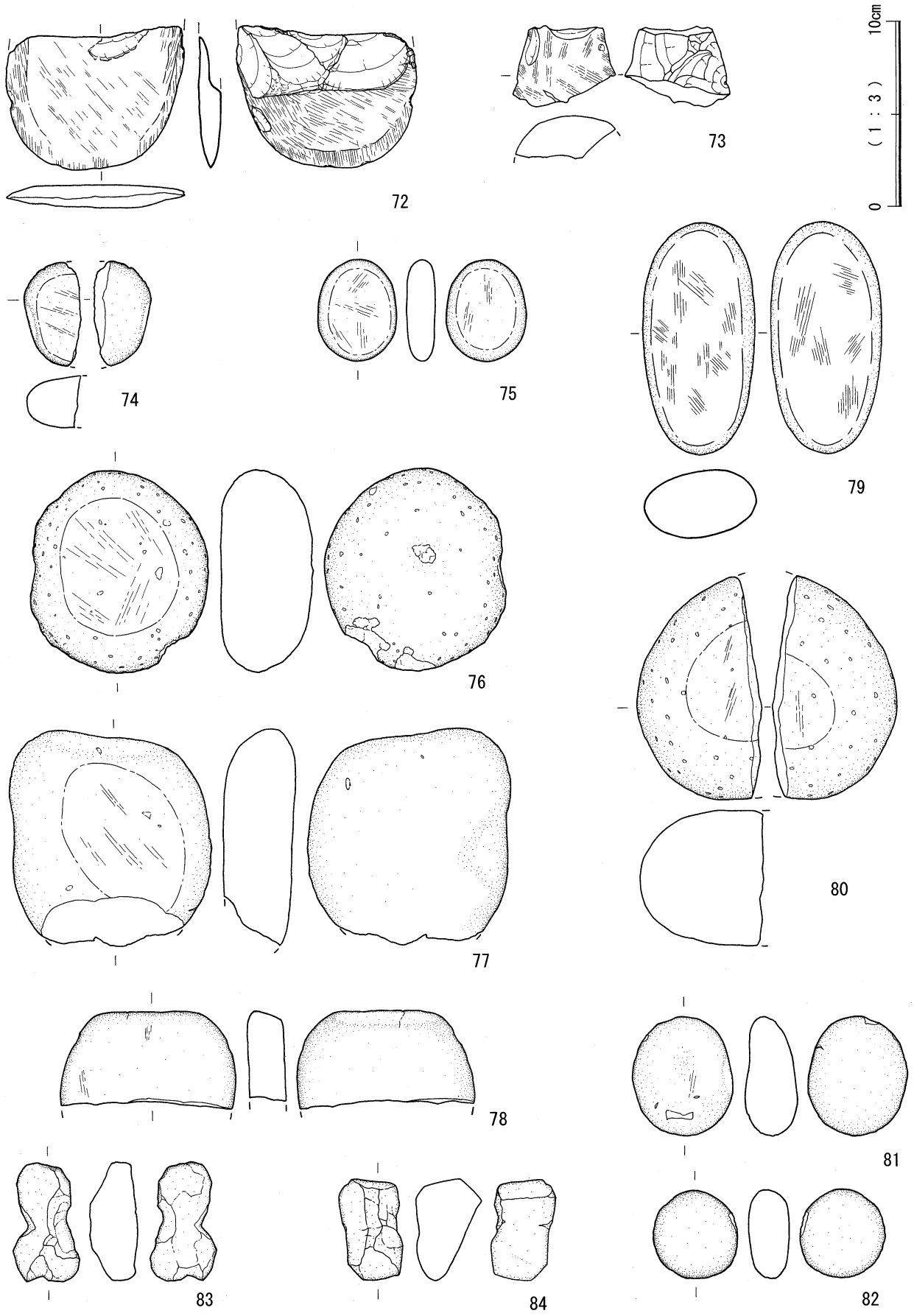
表Ⅱ.08 Ⅲ～Ⅴ層　出土石器の計測表（1）

番号		出土位置		器種	石材	法量（最大値で計測、単位は g と mm）				備考
報告	取上げ	地区	層位			長さ	幅	厚さ	重さ	
61	確認 - 14	11T	Ⅳ	打製石鏃	黒曜石（不明 1）	26.0	19.5	5.5	2.6	先端が欠損
62	309	?	Ⅳ	打製石鏃	チャート	31.0	21.0	5.5	1.9	
63	284	?	Ⅳ	打製石鏃	黒曜石（三船）	17.0	15.5	4.5	0.6	
64	306	?	Ⅳ	打製石鏃	黒曜石（不明 1）	13.0	14.0	4.0	0.4	
65	322	?	Ⅳ	残核	黒曜石（不明 1）	19.0	27.0	7.0	3.6	原礫面あり
66	215	Ｐ５	Ⅳ	剥片（R.F）	硬質頁岩	41.8	26.4	5.0	5.2	
67	330	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	19.0	29.0	7.0	3.0	原礫面あり
68	235	?	Ⅳ	剥片	ホルンフェルス	41.0	45.0	13.0	8.4	
69	確認 - 10	6T	Ⅴ	剥片	黒曜石（長崎淀姫）	17.0	9.0	3.0	0.4	原礫面あり
70	324	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	22.0	12.0	4.0	0.8	
71	307-2	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明）	19.0	15.0	5.0	1.0	
－	307-1	?	Ⅳ	剥片（R.F）	黒曜石（不明）	12.5	7.3	1.7	0.2	
－	150	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	27.5	18.7	13.6	4.0	原礫面が多くあり
－	153	G2	Ⅳ	剥片	黒曜石（長崎淀姫）	34.4	19.6	15.6	10.3	原礫面あり
－	184-1		Ⅳ	残核？	黒曜石（三船）	25.3	24.4	16.1	10.1	原礫面が多くあり
－	184-2		Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	18.0	13.3	5.8	1.2	原礫面あり
－	212	P5	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	5.6	5.2	1.1		
－	267	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	14.2	12.0	3.7	0.5	原礫面あり
－	269	?	Ⅳ	剥片（U.F ？）	黒曜石（不明 1）	22.3	11.2	6.2	1.2	原礫面あり
－	271		Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	15.3	13.5	5.6	1.0	原礫面あり
－	272	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	21.5	15.1	2.7	1.0	原礫面あり
－	273	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	15.2	7.7	1.6	0.2	原礫面あり
－	285-1	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	21.0	18.2	9.5	3.8	原礫面が多くあり。打点あり
－	285-2	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	16.2	13.1	5.3	0.8	原礫面あり。打点あり
－	288	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	18.0	10.6	8.9	1.5	原礫面が多くあり
－	292	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	12.8	12.1	4.3	0.6	原礫面あり
－	296	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	26.2	18.2	7.5	2.4	原礫面が多くあり。打点あり
－	299	?	Ⅳ	石核？	黒曜石（不明 1）	31.5	16.5	11.2	5.4	原礫面が多くあり。打点あり
－	300	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	13.9	12.3	2.1	0.3	原礫面あり
－	305	?	Ⅳ	剥片（R.F）	黒曜石（不明 1）	17.7	9.5	4.5	0.6	原礫面あり
－	308-1	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	26.3	23.1	3.1	1.7	原礫面あり
－	308-2	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	15.6	9.4	7.1	0.7	
－	310	?	Ⅳ	原礫	黒曜石（不明 1）	24.2	15.0	8.1	3.4	原礫面が多くあり
－	318	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	30.3	21.0	4.8	3.6	原礫面が多くあり
－	319	?	Ⅳ	剥片？	黒曜石（不明 1）	19.5	19.1	4.7	1.9	原礫面あり。打点あり
－	325	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（西北九州系？）	27.7	15.1	9.0	2.5	原礫面が多くあり
－	327	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	16.4	10.5	3.8	0.7	原礫面あり
－	341		Ⅳ	石鏃素材？	黒曜石（不明 1）	23.7	14.6	4.9	1.6	原礫面あり。打点あり
－	359		Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	23.1	15.0	5.4	1.1	原礫面が多くあり
－	360		Ⅳ	剥片	黒曜石（三船）	15.5	12.2	1.7	0.3	
－	361		Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	18.7	10.1	3.0	0.5	原礫面あり
－	362		Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	20.9	16.8	11.4	2.9	原礫面が多くあり
－	366		Ⅳ	剥片（R.F）	黒曜石（不明 1）	24.5	13.9	2.2	0.9	原礫面あり
－	368		Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	10.1	6.7	0.8	0.1	
－	369		Ⅳ	剥片	黒曜石（西北九州系）	18.2	6.3	4.2	0.3	原礫面あり、熱処理とは異なる被熱の可能性あり
－	451	?	Ⅲ	剥片	黒曜石（不明 1）	14.1	9.5	3.3	0.4	
－	452		Ⅳ	剥片	黒曜石（三船？）	12.2	8.6	1.8	0.2	
－	472	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	19.4	9.9	8.4	1.1	原礫面あり
－	473	?	Ⅳ	剥片	黒曜石（不明 1）	18.8	14.2	4.7	0.8	
－	208	?	Ⅳ	剥片	安山岩	18.1	14.9	5.8	1.4	原礫面あり
－	229	?	Ⅳ	剥片	黒色安山岩	28.7	16.4	2.8	1.2	
－	239	O5	Ⅳ	剥片	安山岩	29.8	22.8	11.7	7.5	原礫面あり
－	－	－	Ⅴ？	剥片	チャート	32.5	20.8	5.9	3.5	
－	270	?	Ⅳ	剥片	チャート	23.0	8.4	3.8	1.0	
－	320	?	Ⅳ	剥片	チャート	14.4	11.0	3.6	0.6	
－	98	?	Ⅳ	原石？	石英質岩	22.0	18.4	11.5	6.3	
－	130	C1	Ⅳ	剥片	粘板岩	58.3	41.4	6.2	14.6	鉄分が器面に多く付着する

※出土位置の「？」は、出土位置の記録が不明のものを、「番号Ｔ」は確認調査トレンチをしめす

※器種の「U.F」はユーズドフレイクを、「R.F」はリッタッチドフレイクをしめす

※石材の（）内は推定産地をしめし、不明１は現在「霧島山系」と呼ばれ議論されているものを指す



図Ⅱ.12　Ⅳ層 出土石器（2）

磨石 74 ～ 80 はやや不明瞭な磨面を持つものが多い。78・81・82 は磨石の素材であろうか。83・84 は凝灰岩の礫で自然礫である。

※１　調査当時は、基本層序の第Ⅴ層にあたるアカホヤ降下火山灰層上面において、遺構が検出できることが認識されていなかったため、実際は遺構が存在していた可能性がある。なお、その後に行われた牧原遺跡の発掘調査において、アカホヤ降下火山灰層上面においてアカホヤ二次堆積層を覆土･埋土にもつ遺構の存在が確認されている（中水ほか 2003）

※２　分布図は、遺物取り上げ番号 254 ～ 265 及び 383 ～ 412 は標高値がなく、482 ～ 524 は記録図面が不明となっていたため掲載を見合わせている

※３　石材鑑定は、和田るみ子氏のご指導をいただいている。また、入稿前に今回報告分の石器について概観された和田氏は、図化しなかった剥片等にも石鏃素材や原礫など図化の必要なものがあることをご指摘くださった。しかし、諸事情により今回は掲載見合わせている

※４　この黒曜石は「霧島山系」と呼ばれ議論されている一群であり、その産地が確定してないことから産地不明としている

表Ⅱ.09　Ⅲ～Ⅴ層　出土石器の計測表（2）

番号		出土位置		器種	石材	法量（最大値で計測、単位はｇとmm）				備考
報告	取上げ	地区	層位			長さ	幅	厚さ	重さ	
72	104	C2	Ⅳ	磨製石斧	粘板岩	77.0	96.5	12.5	94.10	鉄分が器面に多く付着する
73	236	Q5	Ⅳ	磨製石斧？	硬質頁岩	57.2	42.4	21.4	53.42	
74	363	H2	Ⅳ	磨石？	砂岩	56.0	30.0	29.0	58.90	
75	9	C1	Ⅳ	磨石	砂岩（硬質）	54.0	42.0	15.0	51.80	
76	158	G3	Ⅳ	磨石	安山岩	108.0	94.0	49.0	793.80	側面の凹凸は敲打痕か
77	154	F2	Ⅳ	石皿	砂岩	112.0	106.0	37.0	724.91	
78	165	G2	Ⅳ	石皿	砂岩	48.0	92.0	20.0	177.70	
79	207	Q5	Ⅳ	磨石	砂岩（硬質）	124.0	59.0	36.0	406.80	
80	138	F2	Ⅳ	磨石	花崗岩	119.0	66.0	75.0	750.50	
81	141	F2	Ⅳ	磨石？	砂岩	64.0	53.0	23.0	121.70	
82	105	C2	Ⅳ	磨石？	砂岩	47.0	44.0	22.0	67.60	
83	148	？	？	素材？	凝灰岩	61.0	34.0	25.0	43.30	
84	110	？	？	素材？	凝灰岩	53.0	32.0	35.0	38.90	
176	？	？	Ⅳ	磨製石斧	蛇紋岩？					行方不明

※出土位置の「？」は、出土位置の記録が不明のものをしめす

写真Ⅱ.02　Ⅳ層 出土石器 176（磨製石斧）

第４節　検出面２（縄文時代早期）の調査成果

第Ⅷ層上面を遺構検出面に、第Ⅵ層を遺物包含層とする。時期は縄文時代早期で、前葉の前平式が主体となり、吉田式も一定量出土している。

１．第Ⅷ層上面の検出遺構（図Ⅱ.03・14）

Ⅷ層上面より竪穴状遺構１基・柱穴23基・集石遺構１基を検出している。いずれの遺構も近接しており、とくに竪穴状遺構と柱穴群は分布が重複している。遺構の分布については調査区の幅が約4.0mと狭いため、調査区外に遺構の分布が広がることが考えられる。調査者も「竪穴住居は１基しか検出できなかったが、周囲の地形等を考慮すると事業実施範囲外への広がりが想像される。※1」と同様の可能性を指摘している。

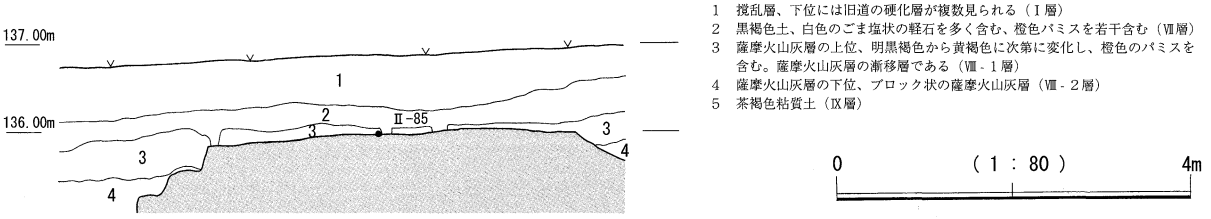
遺構の時期については、竪穴状遺構より縄文時代早期前葉に比定される前平式土器が覆土中より出土している。柱穴群に関しては、調査者が「竪穴住居は、その周囲、埋土の中にピットが多数検出できたが、埋土の状況から同時期のものでなく、それ以降のものと考えられる※2」と述べており、柱穴群の時期は竪穴状土坑より新しい時期を想定している。一方で竪穴状遺構と集石遺構については「２つの遺構は、ごく近くで検出されたので同時期に存在したものと考えられる。※3」と同時期の可能性を指摘している。

以下、各遺構別に詳細を記述する。

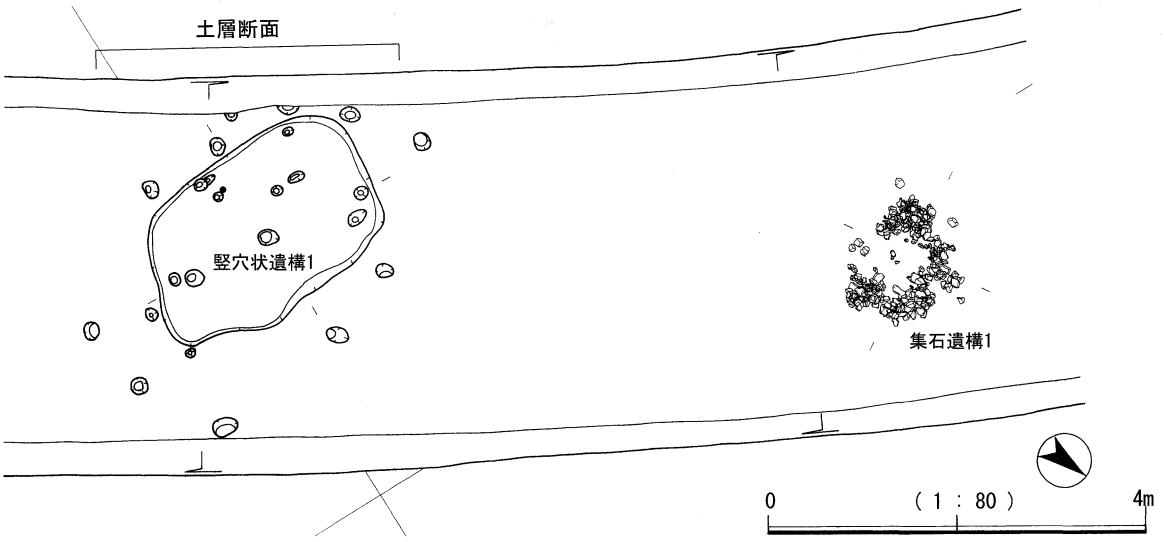
ア）竪穴状遺構（図Ⅱ.16）

竪穴状遺構は１基をグリッドＩ・Ｊ３で検出している。竪穴状遺構１の周囲には柱穴１～11が巡り、少し離れて集石遺構１が存在する。

形態は、平面形が隅丸長方形に近い楕円形を呈しており、断面形は逆台形である。規模は平面2.5m×1.7m、深さ32cmを測る。



図Ⅱ.13　調査区土層断面



図Ⅱ.14　Ⅷ層上面 遺構配置

遺構内からは複数の土器が出土している。土器は胴部85を除くと５cm以下の小破片である。胴部85は高さ16cm×幅12cmのやや形の整った長方形の破片で、検出面において、ほぼ水平に外面を下にして伏せた状態で出土している。土器形式はいずれも前平式で、３～４個体以上の個体数が考えられる。

イ）柱穴（図Ⅱ.17、表Ⅱ.10）

柱穴は23基が検出されている。分布は、柱穴１～23がグリッドＩ・Ｊ３に偏在して、竪穴状遺構１の周辺に集中している。配置状況からは、柱穴１～10・柱穴17～20・柱穴13・15と柱穴22・23に分けられる。柱穴１～10は竪穴状遺構を囲むように楕円形に巡っているが、竪穴状遺構１とは平面配置の軸方向が異なる。柱穴17～20は前述の楕円形柱列のほぼ中央を直線状に並んでおり、延長線上にも楕円形配列の一部である柱穴３・８が並んでいる。柱穴13･15と柱穴22･23は、それぞれの直径が類似しており、対になるように配置されている。

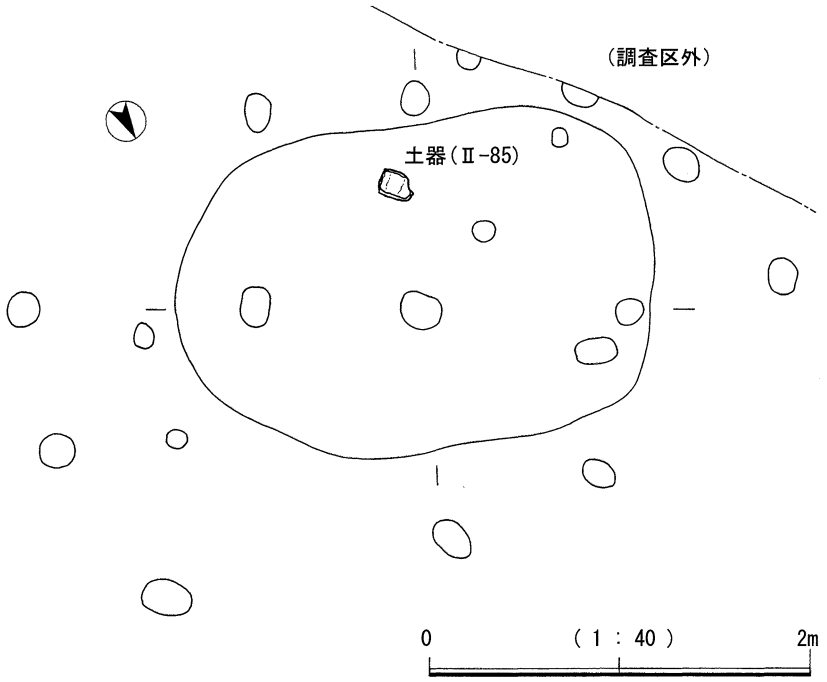
柱穴の特徴としては、覆土がⅦ層に類似している点と断面形が逆三角形と逆台形の２種類ある点と、上場の直径がやや大きめの柱穴１～10・17～20とそれ以外に分けられる点などが挙げられる。なお、調査者は多くの柱穴に対して樹根の可能性を指摘している。各柱穴の詳細については表に述べる。

ウ）集石遺構（図Ⅱ.18）

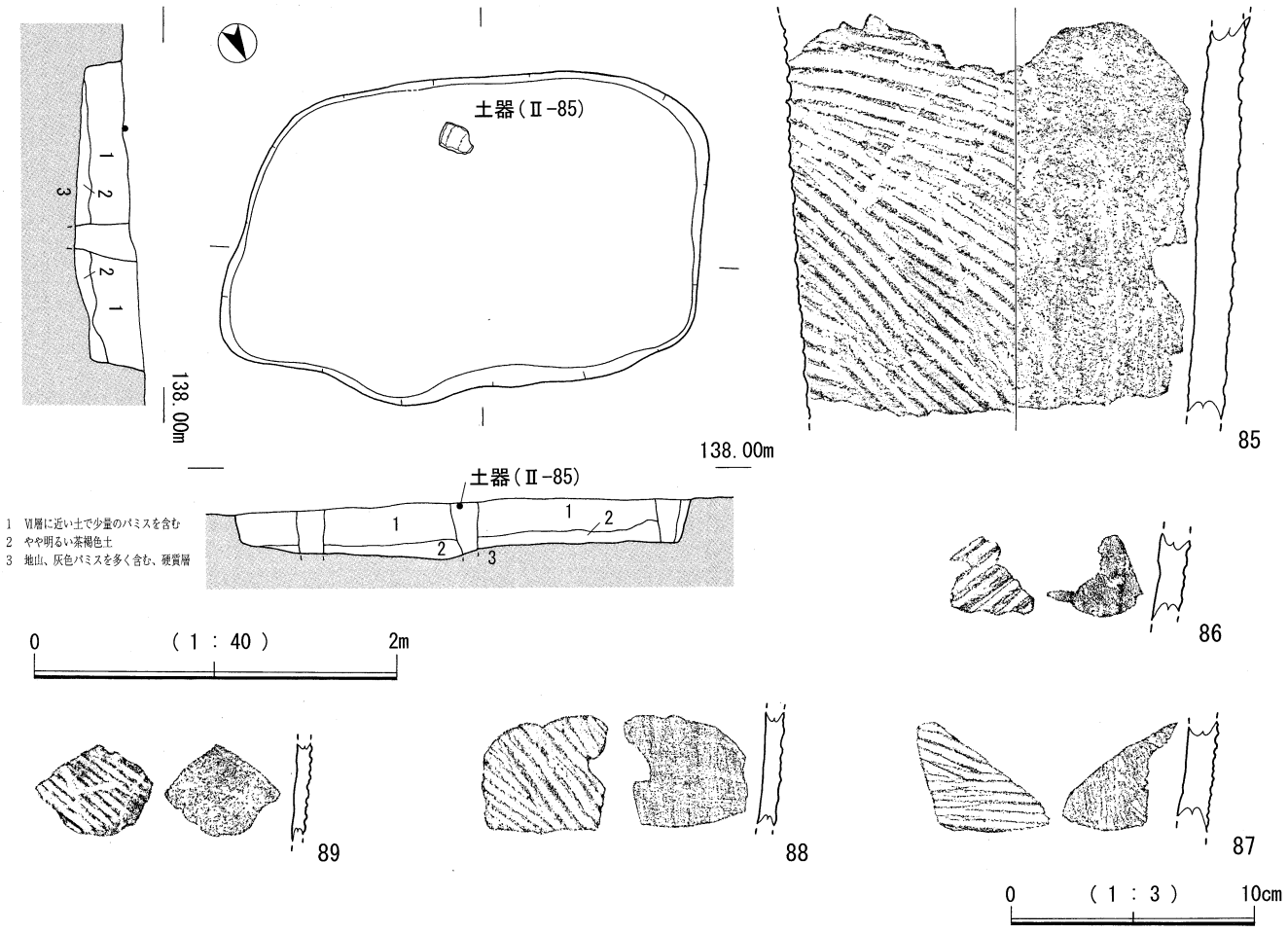
集石遺構は１基をグリッドＪ４のⅥ（薩摩降下火山灰）層上面で検出している。集石遺構１は、礫が馬蹄状に弧を描いて広がり、礫の密度には疎密がある。礫の密度が最も密な範囲は、礫が積み上げられた状態を呈する。礫の垂直分布などから浅い掘り込みをもっていた可能性が考えられる。礫は、角礫で全体的に赤色化しており、脆く、すぐに割れる特徴をもっている。この特徴からは被熱を受けた可能性が考えられる。礫個数は約300個を数える。覆土中には炭化物の粒が含まれる。

出土遺物は、土器90の１点があり、前平式と考えられる。

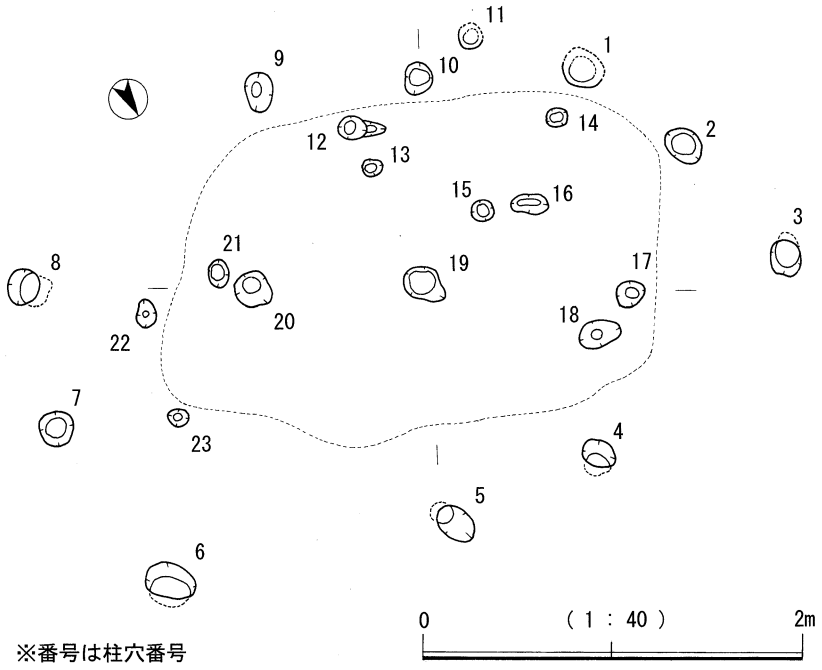
※１～３　調査記録による



図Ⅱ.15　Ⅷ層上面 竪穴状土坑１・柱穴１～23の検出状況



図Ⅱ.16　Ⅷ層上面 竪穴状土坑１と出土土器

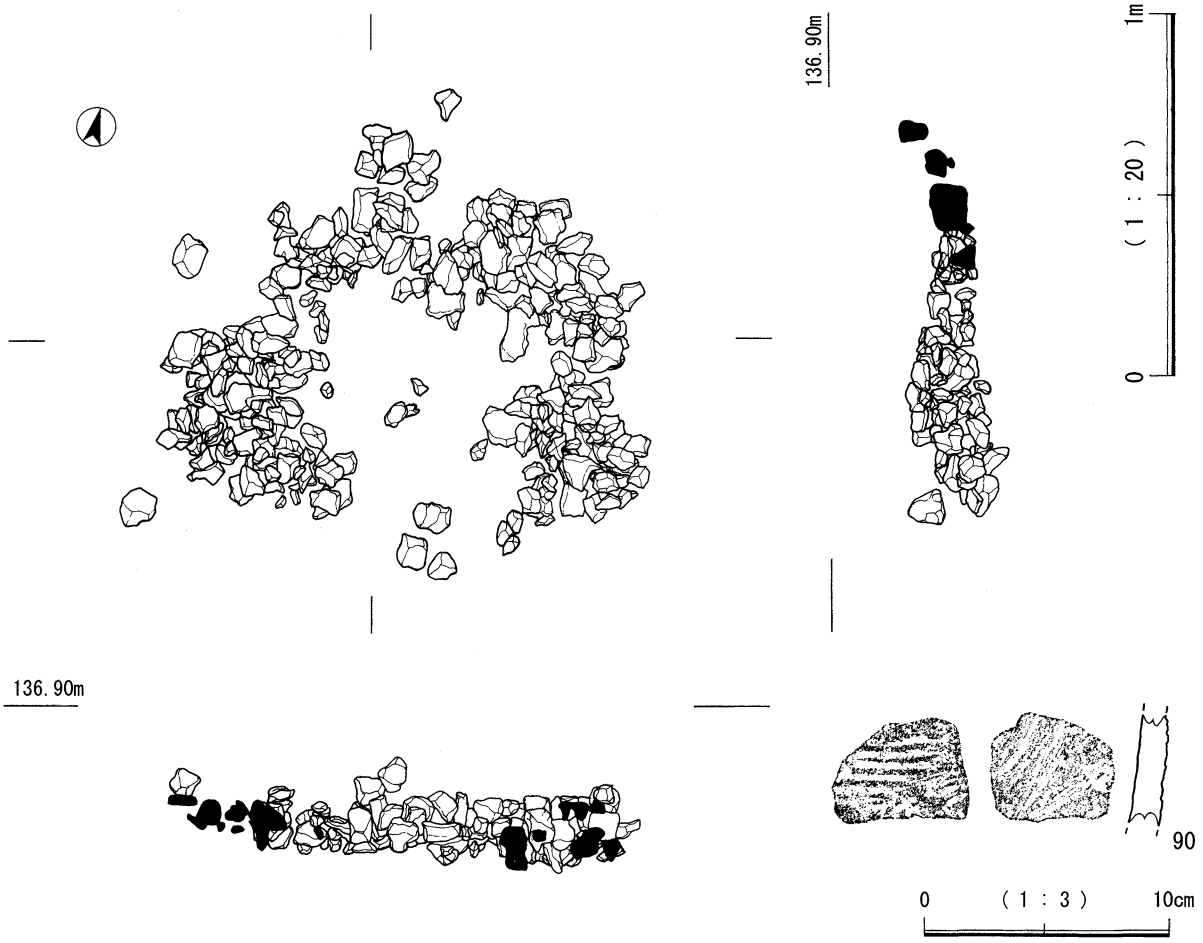


図Ⅱ.17　Ⅷ層上面 柱穴１～23

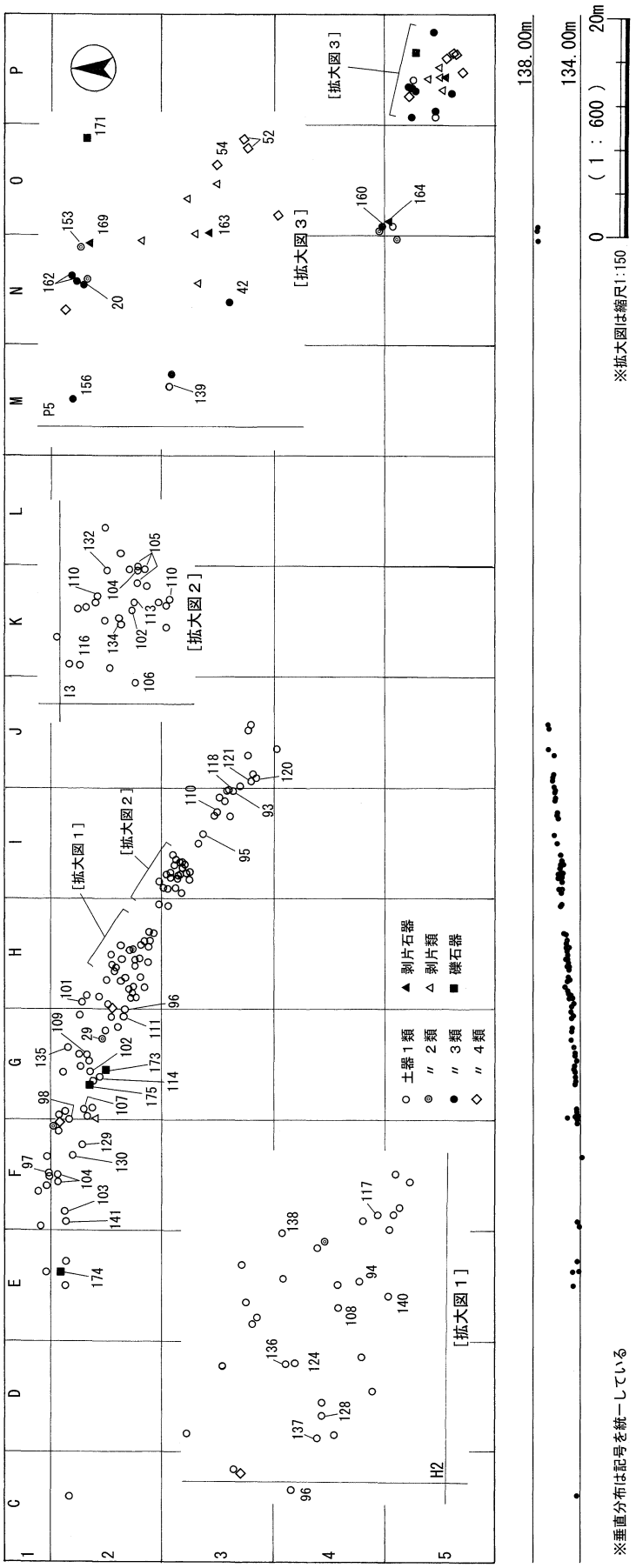
写真Ⅱ.03　柱穴１土層断面

表Ⅱ.10　柱穴１～23の詳細

柱穴番号	詳細
柱穴１	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を多く含み、橙色の小粒の軽石を若干含む。深さ70㎝。断面形は逆三角形。樹根か？
柱穴２	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。黄色のパミスを含む
柱穴３	暗褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む
柱穴４	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。深さ34㎝。断面形は逆台形
柱穴５	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。断面形は逆三角形。樹根か？
柱穴６	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。断面形は逆台形
柱穴７	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。黄色パミスを含む。深さ45㎝。断面形は逆台形
柱穴８	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。橙色の小粒の軽石を含む。深さ53㎝。断面形は逆台形
柱穴９	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。橙色パミスを含む。深さ58㎝。断面形は逆三角形。樹根か？
柱穴10	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。橙色パミスを含む。断面形は逆台形
柱穴11	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を多く含む。橙色の小粒の軽石を若干含む。深さ20㎝。断面形は逆三角形
柱穴12	記録なし
柱穴13	記録なし
柱穴14	記録なし
柱穴15	記録なし
柱穴16	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を多く含む。橙色の小粒の軽石を若干含む。埋土は軟らかく締りがない。樹根か？
柱穴17	記録なし
柱穴18	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む。深さ28㎝。断面形は逆台形
柱穴19	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含む
柱穴20	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を含み、橙色パミスを含む。深さ29㎝。断面形は逆三角形
柱穴21	記録なし
柱穴22	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を多く含む。橙色の小粒の軽石を若干含む。深さ70㎝。断面形は逆三角形。樹根か？
柱穴23	黒褐色土、白色のごま塩状の軽石を多く含む。橙色の小粒の軽石を若干含む。深さ70㎝。断面形は逆三角形。樹根か？



図Ⅱ.18　Ⅷ層上面 集石遺構と出土土器



図Ⅱ.19　Ⅵ層 出土遺物の分布状況

２．第Ⅵ層の出土遺物

ア）分布状況と出土状況（図Ⅱ.19）

Ⅵ層の遺物分布は、調査区の東西両端に集中しているが、Ⅳ層と同様に、削平によりグリッドJ4～N4が消滅している。

土器の分布は、出土量の最も多い土器１類の前平式が調査区全体に分布している。遺構のあるグリッドI8～J9にかけては包含層が一部削平されるが分布する。土器２類･３類はとくに集中する範囲が見られないが、調査区東端のグリッドO4～P5に多く出土している。

石器の分布は、調査区東端のグリッドP5に比較的に出土が集中する。

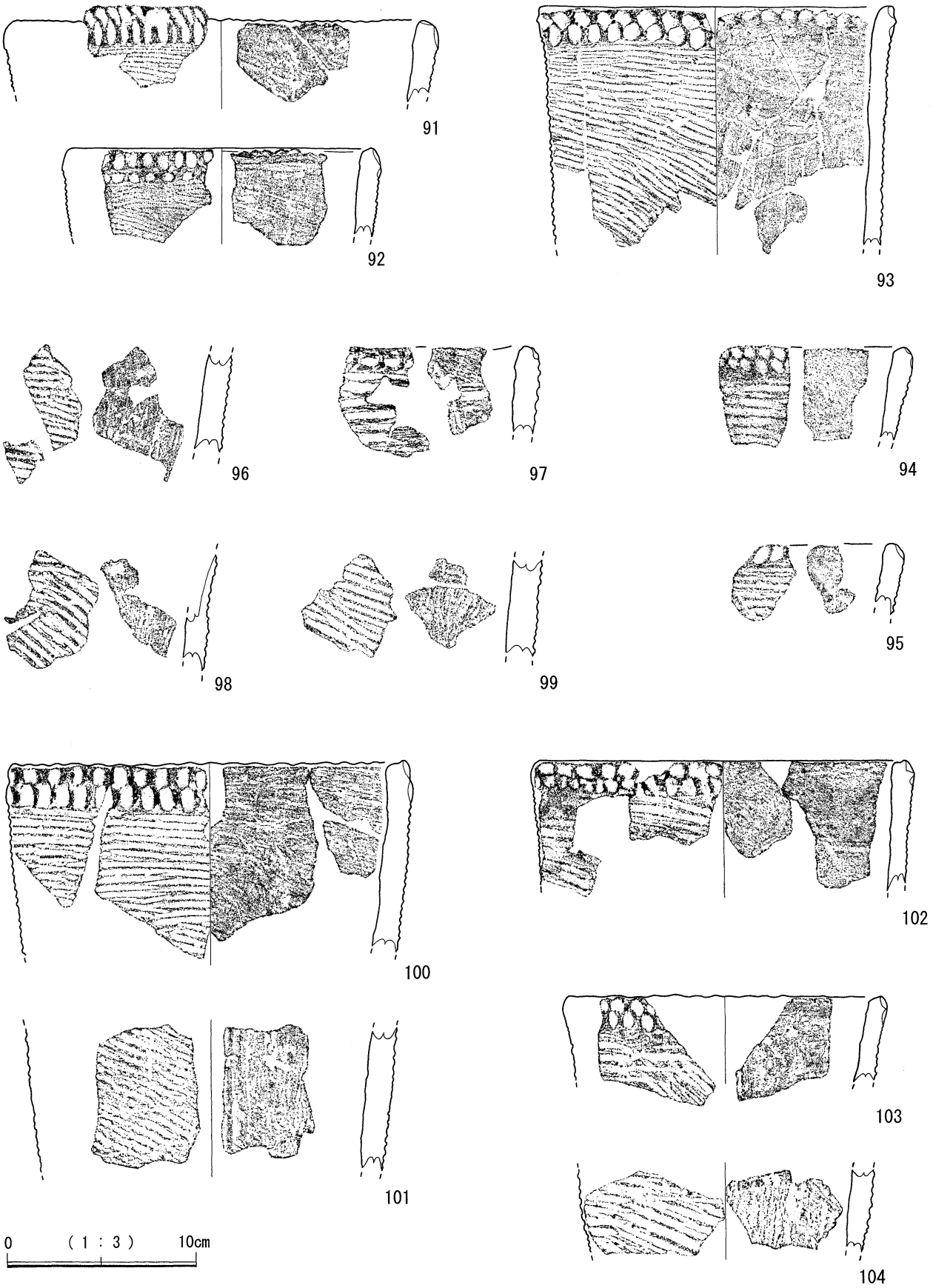
イ）土器類

Ⅵ層出土の土器は、おおまかな特徴から１～３類に分けている。分類番号は任意である。以下、分類別に述べ、個別の詳細は表に述べる。

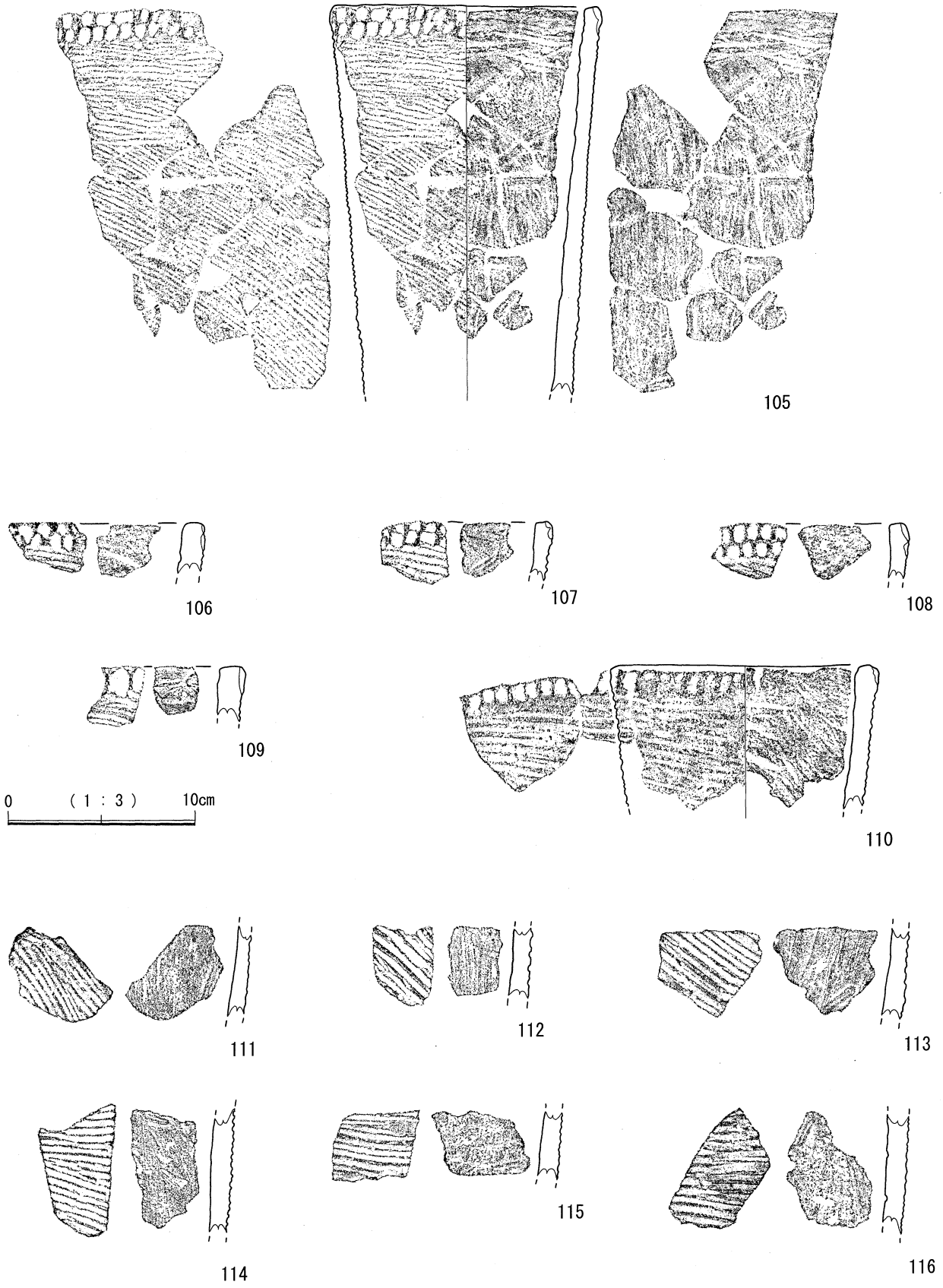
土器１類（図Ⅱ.20～23）

１類91～141は、胴部外面に横位もしくは斜位の粗い貝殻条痕文を密に施し、内面をケズリで整える。土器型式は前平式と考えられる。

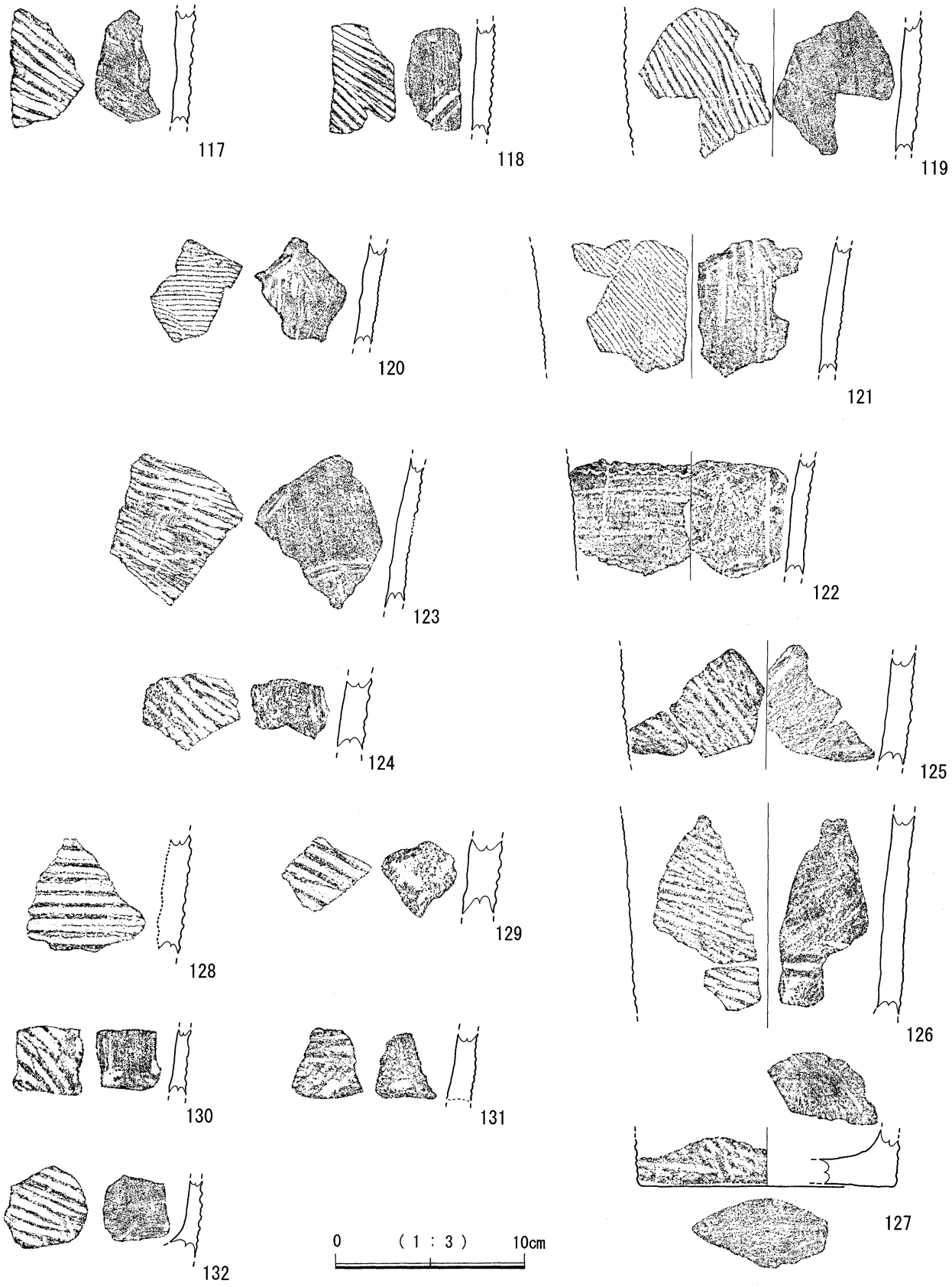
おもな口縁部のキザミは縦長の楕円形を呈すが、施文具の先端が尖り幅のあるものを用いたか、もしくはヘラ状の施文具を刺突して先端を固定したまま左右に動かして施文したものと考えられる。一方、ヘラ状の工具を口縁部97・102・107・108のキザミは他と異なり、施文具先端が四角のもので刺突したか、ヘラ状もしくは貝殻の施文具を刺突後にやや横に引いた可能性が考えられる。他方、口縁部92は２条のキザミの下の１条のキザミは円形の刺突である。口縁部110のキザミは貝殻腹縁を斜めに刺突する。



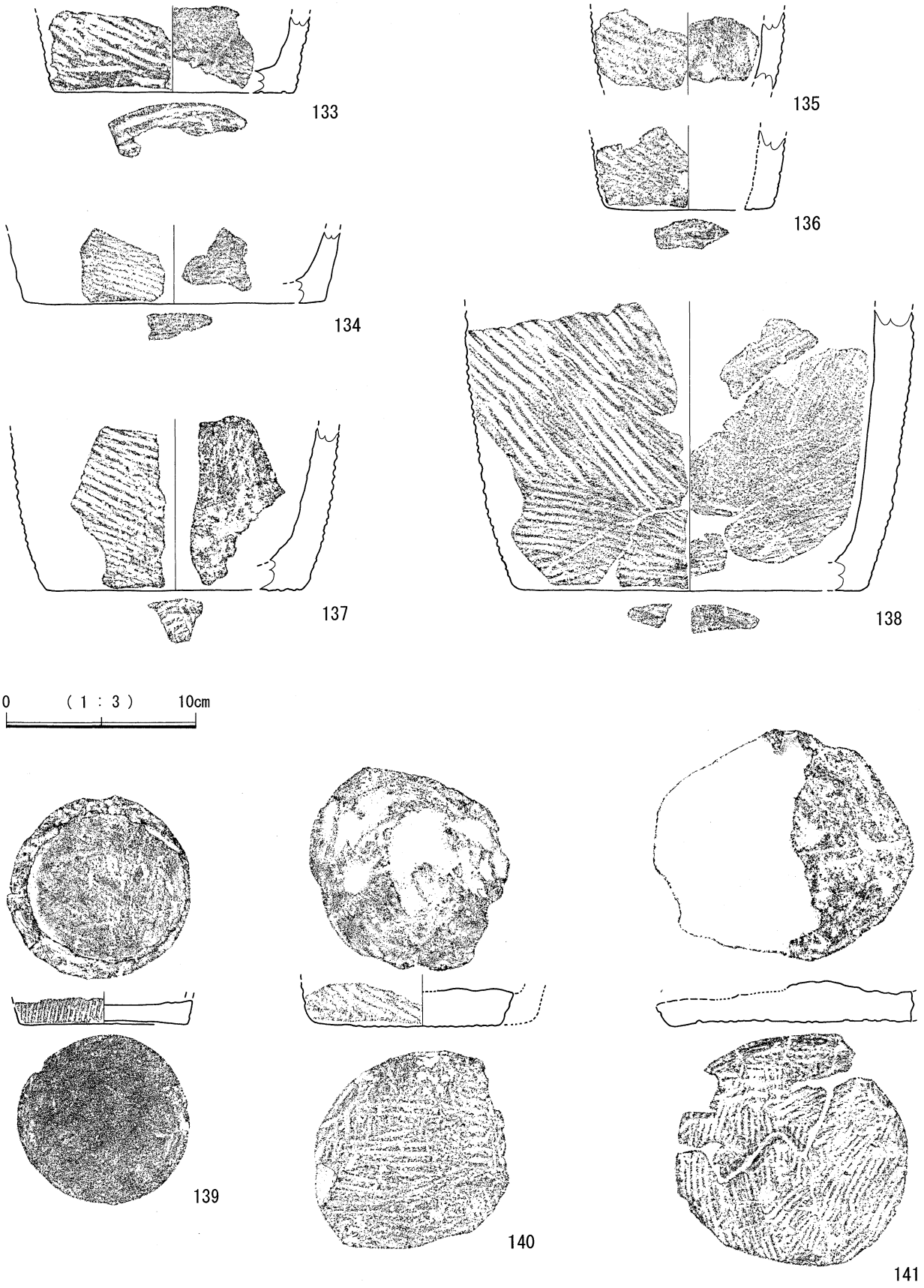
図Ⅱ.20　Ⅵ層 出土土器（1）



図Ⅱ.21　Ⅵ層 出土土器（2）



図Ⅱ.22　Ⅵ層 出土土器（３）



図Ⅱ.23　Ⅵ層 出土土器（4）

胴部は、すべて貝殻条痕を施しており、複数個体のものが出土している。施文原体である貝殻もいくつかの種類が見られる。胴部122は上端に横位の貝殻腹縁の刺突が巡る。

底部は、底面の調整が貝殻条痕・ケズリ・ナデと施文原体の違いがある。

なお、土器胎土中の混和材については、次の数点は他のものと異なる。口縁部93・94・101・106・胴部115・116・124は、胎土中に５㎜大を超える赤色砂粒を含む。胴部128・底部129は１㎜大の長石を多量に含む。

土製円盤

底部139～141は、ほぼ底面のみが遺こり、破断面は打ち欠きもしくは摩滅の後が見られる。土製円盤であろうか？土器型式は、139が吉田式、140・141が前平式と考えられる。

土器２類（図Ⅱ.24）

２類142～153は、内面をケズリ後にミガキを施す。外面は縦位の貝殻腹縁の刺突文や縦の逆三角形の浮文を施す。土器型式は吉田式と考えられる。推定される個体数は最大７個体と考えられる。

胴部142～150は、外面に横の貝殻条痕後、縦位の貝殻腹縁の刺突文と逆三角形の浮文を施す。一方、151～155は外面に密な縦位の貝殻腹縁の刺突文のみを施す。

口縁部144～148は小型で、推定される口径は10㎝前後と考えられる。口縁部145～胴部148は同一個体と考えられ、口縁部から底部まで見られる。

底部148・151・152は、最下端を縦位のキザミを施す。

土器３類（図Ⅱ.25）

１・２類以外のもの156～162を３類としている。

胴部156は、外面に密な押引文を施す。型式は吉田式であろうか。なお、胎土中に５㎜大と粒度が大きい赤色砂を含む。

胴部157は、密度が疎の貝殻腹縁を刺突する。型式は下剥峰式であろうか。出土は１点のみである。胴部158・159は、縦に並んだ刺突文を連続して密に刺突する。同じく下剥峰式であろうか。なお、158は胎土中に５㎜大と粒度が大きい赤色砂を含む。他に３点が出土している。

胴部160の外面文様は、斜めの短沈線文を繰り返し、その上から横位の沈線文を複数条巡らす。胎土は他と異なり乳白色を呈する。平栫式であろうか。１点のみ出土している。

胴部161・162は、器面の内外面に貝殻条痕を施し、胎土中の混和材は大きく粗く、量も多い。含まれる赤色砂は５㎜大と粒度が大きい。右京西式と考えられる。他に２点が出土している。

ウ）石器類（図Ⅱ.26・27）

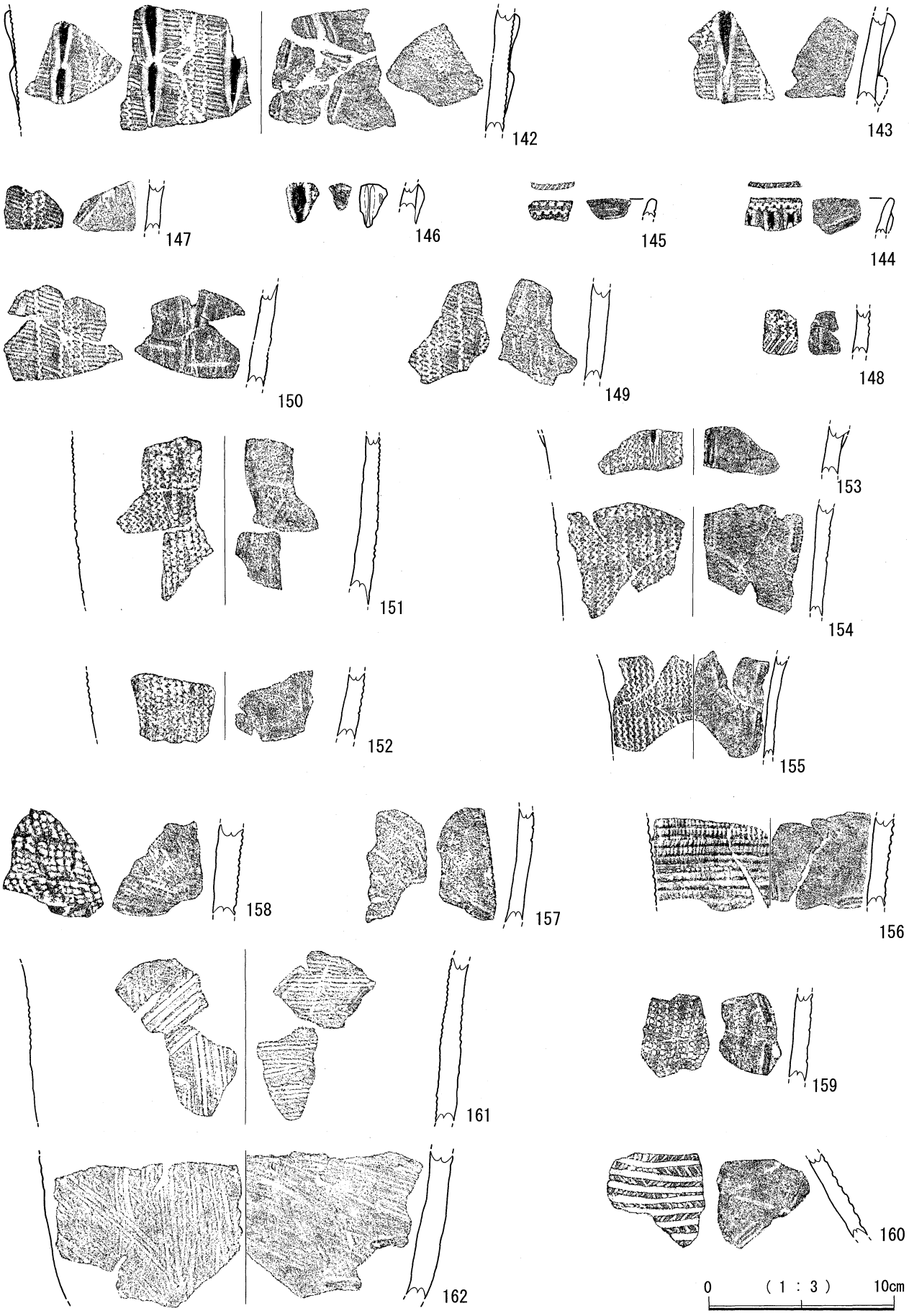
Ⅵ層出土の石器は、石鏃３点、石鏃未製品１点、剥片類８点、スクレイパー１点、磨石２点、石皿３点が出土している。

石材は、Ⅳ層と同様に、全体的に最も多いのが黒曜石である。産地別には黒曜石（不明１）※1としたものが多いが、他にも複数の産地のものが見られる。また、チャート・メノウもあり、製品では黒曜石（不明１）とした石材製のものは存在しない。

剥片類の中には、残核と思われるものがあり、何らかの石器製作が行われていた可能性が考えられる。

磨石は不明瞭な磨面を持つものが多い。170は磨石の素材であろうか。173・174は小型の石皿であろうか。

※１　この黒曜石は「霧島山系」と呼ばれ議論されている一群であり、その産地が確定してないことから産地不明としている。



図Ⅱ.24　Ⅵ層 出土土器（５）

表Ⅱ.11　Ⅵ層　出土土器の観察表（1）

挿図番号	図番号	遺物番号（取り上げ）	部位	色調 内面	色調 外面	調整・文様 内面	調整・文様 外面	胎土中の混和材 粒度mm	種類 石英	長石	雲母	黒色砂	赤色砂	備考
Ⅱ.16	85	vi, 住居一括	胴	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR5/3	おもに上への非常に粗いケズリ	斜めの貝殻条痕文（左斜め上り）	3	◎	○	○金	○	○	外面がまだらにやや煤ける
	86	NOなし	胴	にぶい橙 7.5YR6/4		強いナデ	斜めの貝殻条痕文（右斜め上り）	0.5	○	○	－	◎	△	
	87	vi, 住居一括	胴	橙 5YR6/6		上へのケズリ後、上下のナデ	斜めと横の貝殻条痕文	1	○	○	－	◎	－	
	88	NOなし	胴	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	上下のケズリ後、上下のナデに横のナデ	斜めの貝殻条痕文（左斜め上り）	0.5	○	○	－	◎	－	内面がやや黒色化
	89	NOなし	胴	にぶい黄橙 10YR6/3	浅黄橙 10YR8/4	ナデ	斜めの貝殻条痕文（左斜め上り）	0.5	○	○	－	◎	－	内面が黒色化
Ⅱ.18	90	集石内	胴	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	斜めのケズリ（右斜め上）後、強いナデ	横の貝殻条痕文	0.5	○	○	○黒	△	△	内面が黒色化し、円形の剥離外面も摩滅
Ⅱ.20	91	M－4, vi, 490	口縁	橙 5YR6/6		口縁端部：横のナデ 胴：左上へのケズリ	口唇部：縦位のキザミ 口縁端部：縦位のキザミ 胴：横位の貝殻条痕	0.5	○	○	○金	◎	△	内外面が赤色化、内面に円形剥離が多く見られる
	92	NOなし	口縁	にぶい黄橙 10YR6/4		左へのケズリ後、弱い横のナデ	口唇部：横のナデ 口縁端部：縦位のキザミと円形刺突文 胴：横の貝殻条痕	1	◎	◎	○金	○	○	外面がやや黒色化
	93	J－3, vi, 532	口縁	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	口唇部：横のナデ後、等間隔の指頭圧痕 口縁部：左上へのケズリ 胴：上へのケズリ	口縁端部：縦位のキザミが２条 胴：横の貝殻条痕	0.5	○	○	○金	○	○	外面が黒色化
	94	H－2, vi, 438	口縁	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	口唇部：横のナデ 口縁端部：横のナデ 口縁部：上へのケズリ	口縁端部：口唇部との角に縦位のキザミと並行してもう１条同様のキザミ 口縁部：横の貝殻条痕	3	○	○	○金	○	◎	器面が摩滅（ローリングか？）
	95	I－3, vi, 538	口縁	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	口唇部：横のナデ 口縁部：左へのケズリ	口縁端部：口唇部との角に縦位のキザミ 口縁部：横の貝殻条痕	1	○	○	○金	◎	○	内面がやや黒色化
	96	H－2, vi, 460	胴	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	口唇部・口縁端部：左へのケズリ 口縁部～胴：上へのケズリ	口縁端部：口唇部との角に横位のキザミ 口縁部～胴：横の貝殻条痕	1	○	○	○金	○	◎	内面がやや黒色化、外面が黒色化
	97	F－1, vi, 263	口縁											
	98	G－2, vi, 336. 337	胴											
	99	J－4, vi, 521	胴											
	100	9T, v, 一括 9T, v, 7 NOなし	口縁	橙 7.5YR6/6		口縁端部：左へのケズリ 口縁部～胴：左斜め上へのケズリ	口唇部：横のナデ 口縁端部：縦位のキザミを２条 胴：横の貝殻条痕	0.5	○	○	○金	◎	○	胴部 101 は内面下半が黒色化し、外面は多くに円形剥離が密にある
	101	H－2, vi, 466	胴											
	102	G－2, vi, 348 I－3, vi, 567	口縁	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部：左へのケズリ	口唇部：横のナデ 口縁端部：縦位のキザミを２条 胴：横の貝殻条痕	1	○	◎	○金	◎	○	外面が黒色化
	103	F－2, vi, 254	口縁	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁端部：左へのケズリ 口縁部～胴：上へのケズリ	口唇部：横のナデ 口縁端部：縦位のキザミを２条 胴：横の貝殻条痕	2	○	◎	○金	○	○	外面がやや黒色化
	104	F－2, vi, 256. 264	胴	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4									
Ⅱ.21	105	I－3, vi, 545. 546. 547	口縁～底	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁端部：左へのケズリ 口縁部：横の貝殻条痕 胴～底：上へのケズリ	口唇部：横のナデ 口縁端部：縦位のキザミを２条 胴上半：横の貝殻条痕 胴下半～底：左斜め上がりの貝殻条痕	1	○	◎	○黒	○	△	外面上半は黒色化、下半は赤色化して円形剥離が見られる
	106	I－3, vi, 554	口縁	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	横のケズリ	口唇部：横のナデ 口縁端部：縦位のキザミを２条 口縁部：横の貝殻条痕	1	○	◎	○金	○	◎	外面が黒色化
	107	G－2, vi, 339	口縁	にぶい黄橙 10YR6/4		横のナデ	口唇部：横のナデ 口縁端部：縦位のキザミを２条 口縁部：横の貝殻条痕	05	△	◎	△金	△	△	内外面が黒色化
	108	H－2, vi, 437	口縁	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4	横のナデ	口唇部：横のナデ 口縁端部：縦位のキザミを２条 口縁部：横の貝殻条痕	0.5	○	◎	○金	○	△	内外面がやや赤色化
	109	G－2, vi, 351	口縁	橙 7.5YR6/6	にぶい黄褐 10YR5/4	横の粗いナデ	口唇部：横のナデ 口縁端部：縦位のキザミ 口縁部：横の貝殻条痕	0.5	○	◎	○金	○	△	内面がやや赤色化
	110	I－3, vi, 536. 549. 572 NOなし	口縁	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁端部：左へのケズリ 口縁部：左斜め上へのケズリ	口唇部：横のナデ 口縁端部：縦位のキザミ 口縁部：横の貝殻条痕	1	○	○	○黒	○	△	内外面が黒色化
	111	H－2, vi, 461	胴	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	上へのケズリ	左斜め上りの貝殻条痕	0.5	○	○	△黒	△	－	内面がやや赤色化、 外面が黒色化し、炭化物が付着
	112	93	胴	黒褐 10YR3/2	にぶい褐 7.5YR5/4	上へのケズリ	左斜め上りの貝殻条痕	0.5	○	○	△黒	△	△	内面が黒色化 外面が赤色化し、円形剥離も見られる
	113	I－3, vi, 566	胴	にぶい黄橙 10YR6/3	橙 7.5YR7/6	上へのケズリ後、工具ナデ	左斜め上りの貝殻条痕	0.5	○	◎	△黒	△	－	内面がやや黒色化
	114	G－2, vi, 345	胴	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	上へのケズリ後、工具ナデ	横の貝殻条痕	0.5	○	○	△黒	◎	△	外面が黒色化
	115	M－4, vi, 491	胴	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	上へのケズリ後、ナデ	横の貝殻条痕	0.5	○	○	△黒	◎	△	内面の一部が黒色化
	116	I－3, vi, 560	胴	橙 7.5YR6/6		上へのケズリ	横の貝殻条痕	1	○	◎	△金	◎	○	内外面がやや赤色化
Ⅱ.22	117	H－2, vi, 419	胴	橙 5YR6/6		上へのケズリ 117 は左斜め上へのケズリ、底部に近いのであろうか	左斜め上がりの貝殻条痕	0.5	○	◎	○金	○	△	内外面がやや黒色化
	118	I－3, vi, 533 J－3, vi, 532	胴											
	119	NOなし	胴											
	120	J－3, vi, 571	胴	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい褐 7.5YR5/4	上へのケズリ	左斜め上がりの貝殻条痕	1	○	◎	○黒	◎	△	内外面がやや黒色化
	121	J－3, vi, 530	胴	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4									
	122	L－4, vi, 495	胴	にぶい黄 2.5Y6/3		上へのケズリ 上端付近が右斜め上がりのケズリ	貝殻条痕後に、ナデ 上端部付近に横位の貝殻復縁の刺突文が１条	0.5	◎	○	◎黒	○	－	内外面が黒色化
	123	J－4, vi, 522	胴	橙 7.5YR6/6		上へのケズリ	左斜め上がりの貝殻条痕	0.5	○	○	△黒	○	△	外面が黒色化
	124	H－2, vi, 447	胴											

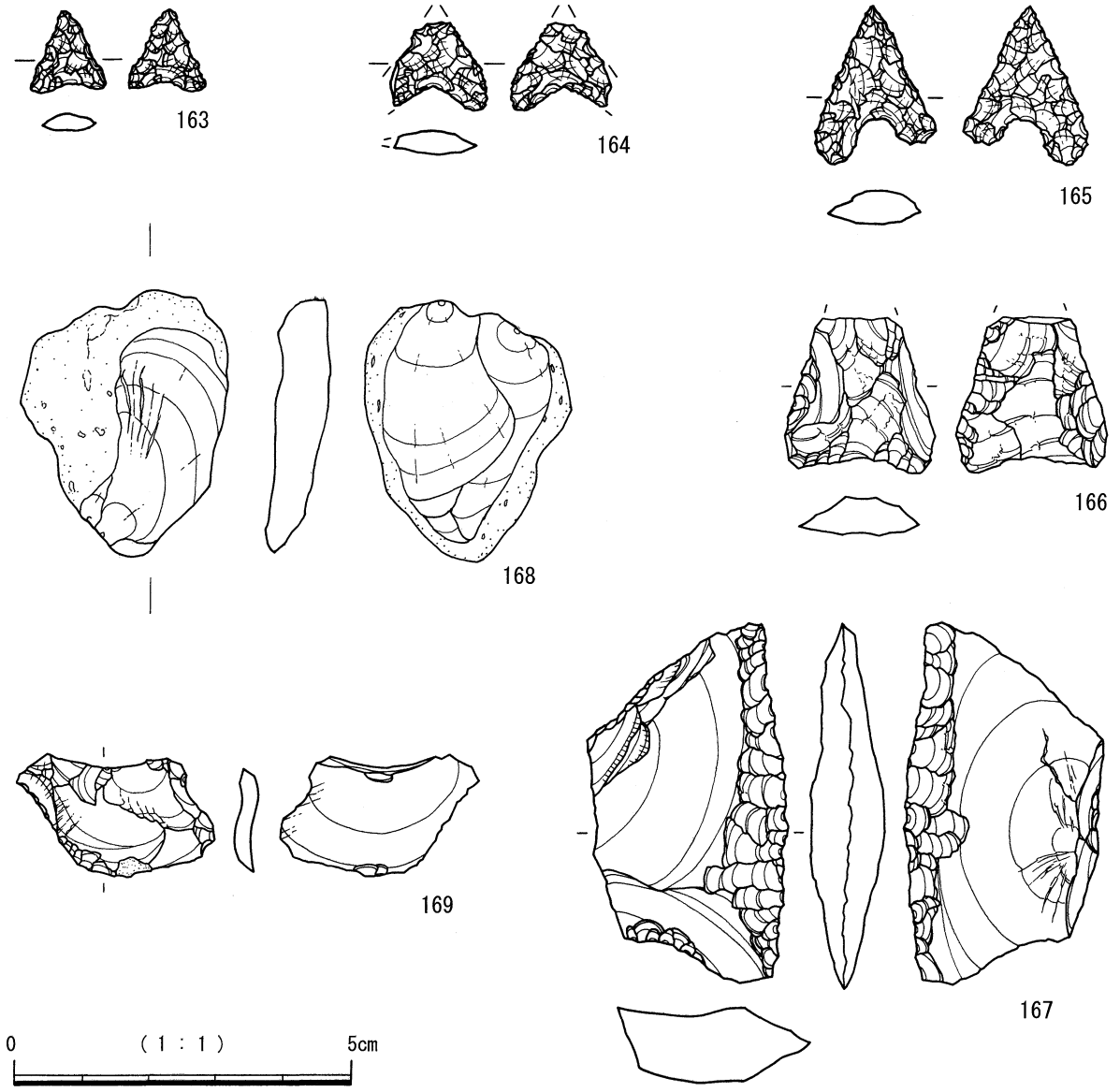
表Ⅱ.12　Ⅵ層　出土土器の観察表（2）

挿図番号	図番号	遺物番号（取り上げ）	部位	色調 内面	色調 外面	調整・文様 内面	調整・文様 外面	胎土中の混和材 粒度㎜	石英	長石	雲母	黒色砂	赤色砂	備考
Ⅱ 22	125	I-3, vi, 546. 568	胴	橙 7.5YR6/6		上へのケズリ 底面：ケズリ後、弱いナデ	左斜め上がりの貝殻条痕 底面：一定方向のケズリ	0.5	○	○	△ 黒	◎	△	外面の一部がわずかに黒色化
	126	I-3, vi, 546.	胴											
	127	I-3, vi, 546.	底											
	128	H-2, vi, 444	胴	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	上へのケズリ	胴：左斜め上がりの貝殻条痕 底：横の貝殻条痕	1	○	◎	○ 金	△	△	
	129	F-2, vi, 258	底											
	130	F-2, vi, 377	胴	灰黄 2.5Y6/2	にぶい黄橙 10YR7/4	胴：上へのケズリ後、工具ナデ 底：横ナデ	左斜め上がりもしくは横の貝殻条痕	0.5	○	○	○ 黒	○	△	内面が黒色化 外面が赤色化し、円形剥離も見られる
	131	L-4, vi, 497	胴	黒褐 10YR3/2										
	132	I-3, vi, 543	底	にぶい黄橙 10YR7/4										
Ⅱ 23	133	9T, v	底	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	横のナデ	左上がりの貝殻条痕 底面：縁に沿った貝殻条痕	0.5	○	○	△ 黒	△	△	内面がやや黒色化 外面が赤色化し、円形剥離が見られる
	134	I-3, vi, 573	底	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/4	ナデ	左上がりの貝殻条痕 底面：縁に沿ったナデ	0.5	○	◎	○ 黒	○	△	内外面がやや黒色化
	135	G-2, vi, 354	胴	にぶい黄褐 10YR5/3	橙 5YR6/6	上へのケズリ	左上がりの貝殻条痕 底面：縁に沿ったナデ	1	○	◎	○ 黒	○	△	内面が黒色化 外面が赤色化し、円形剥離も見られる
	136	H-2, vi, 448	底	にぶい黄橙 10YR6/3										
	137	H-2, vi, 446	底	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	左斜め上がりの貝殻条痕 底面：貝殻条痕	上へのケズリ	2	○	◎	○ 黒	○	△	内面がやや黒色化 外面が赤色化し、円形剥離が見られる
	138	H-2, vi, 426	胴 底	にぶい黄橙 10YR7/4		右上がりのケズリ後、弱いナデ	左斜め上がりの貝殻条痕 底面：ナデ	1	○	○	○ 黒	○	△	内外面がわずかに赤色化
	139	P-5, vi, 412	底	橙 2.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	縦位の浅いキザミ 底面：一定方向のミガキ	ケズリ後、ナデ	0.5	○	○	○ 金	○	−	内面が赤色化
	140	H-2, vi, 439	底	にぶい黄橙 10YR7/4		粗いナデ	左上がりの貝殻条痕 底面：一定方向の貝殻条痕	1	○	◎	○ 金	○	△	
	141	F-2, vi, 371	底	にぶい黄橙 10YR6/4		粗いナデ	底面：一定方向の貝殻条痕	0.5	○	◎	△ 金	○	△	
Ⅱ 24	142	vi層採集 11T, 13	胴	明赤褐 5YR5/6	橙 7.5YR6/6	左へのケズリ後、密に横のミガキ	横の貝殻条痕後、縦位の貝殻腹縁の刺突文と逆三角形の浮文	1	◎	○	○ 黒	○	−	内面が赤色化
	143	K-4, vi, 510	胴											
	144	L-4, vi, 494	口縁	にぶい黄橙 10YR6/4		横のナデ	口唇部：斜位のキザミ 口縁端部：横位の貝殻復縁の刺突文と逆三角形の浮文	0.5	○	○	○ 金	◎	−	
	145	K-4, vi, 508	口縁	にぶい赤褐 5YR5/4		口縁：密に横のミガキ 胴～底：上へのケズリ後、疎なミガキ	口唇部：斜位のキザミ 口縁端部：横位の貝殻復縁の刺突文 胴：横の貝殻条痕後、縦位の貝殻腹縁の刺突文と逆三角形の浮文 底：斜位のキザミ	0.5	○	○	○ 金	◎	−	内外面が赤色化
	146	11T, 12	胴	明赤褐 5YR5/6	橙 7.5YR6/6									
	147	K-4, vi, 515	胴	明赤褐 5YR5/6										
	148	K-4, vi, 513	底											
	149	L-4, vi, 498	胴	明赤褐 5YR5/6		上へのケズリ後、疎なミガキ	横の貝殻条痕後、縦位の貝殻腹縁の刺突文	1	◎	○	○ 黒	○	−	内外面が赤色化
	150	L-4, vi, 517 M-5, vi, 485	胴											
	151	L-4, vi, 499. 500	底	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	上へのケズリ後、疎なミガキ	胴：密に縦位の貝殻腹縁の刺突文 底：縦位のキザミ	0.5	○	○	○ 黒	◎	−	内面がやや黒色化 外面は赤色化し、円形剥離が多く見られる
	152	L-4, vi, 505	底	にぶい褐 7.5YR5/4	橙 5YR6/6									
	153	P-5, vi, 394	胴	明赤褐 5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4	上半：上へのケズリ後、密な横のミガキ 下半：上へのケズリ後、やや密な縦のミガキ	上半：密に縦位の貝殻腹縁の刺突文後、逆三角形の浮文 下半：密に貝殻腹縁の刺突文	0.5	○	○	○ 黒	○	−	内面が赤色化 外面はやや黒色化
	154	K-4, vi, 507. 523	胴		にぶい赤褐 5YR5/4									
	155	K-4, vi, 508	胴	にぶい褐 7.5YR5/4	明赤褐 5YR5/6	上へのケズリ後、やや密な縦のミガキ	密に貝殻腹縁の刺突文	0.5	○	○	○ 黒	○	−	内面が赤色化 外面はやや黒色化
Ⅱ 25	156	P-5, vi, 385	胴	にぶい褐 7.5YR5/4	明赤褐 5YR5/6	非常に丁寧なナデ	横位の押引文	0.5		○	○ 黒	○	△	外面が赤色化し、円形剥離が見られる
	157	L-4, vi, 524	胴	暗灰黄 2.5Y5/2	にぶい黄橙 10YR6/4	上へのケズリ後、ナデ？	ナデ後、貝殻腹縁の刺突	1	◎	○	○ 金	△	△	内面が黒色化
	158	L-4, vi, 499	胴	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/4	左と左上へのケズリ	縦に並んだ刺突文を密に連続して刺突	5	◎	○	△ 金	△	△	内面がやや黒色化 外面が黒色化
	159	M-4, vi, 489	胴	赤褐 5YR4/6	明赤褐 5YR5/6	上へのケズリ	縦に並んだ刺突文を密に連続して刺突	1	◎	○	△ 金	△	△	内外面が赤色化
	160	O-4, vi, 217	胴	浅黄 2.5Y7/3	淡黄 2.5Y8/4	ナデ	ナデ後、斜めの短沈線文を繰り返し、その上から横位の沈線文を複数条巡らす	0.5	○	○	○ 金	◎	○	内面の一部がやや黒色化
	161	M-5, vi, 486	胴	にぶい褐 7.5YR5/4	橙 7.5YR6/6	おもに横位の貝殻条痕	おもに縦位の貝殻条痕	2	◎	◎	○ 黒	○	○	内外面に、わずかに黒色化の痕
	162	P-5, vi, 391. 392	胴	にぶい黄褐 10YR5/3	橙 5YR6/6	おもに横位の貝殻条痕後、ナデ？	おもに横位の貝殻条痕後、ナデ？	2	◎	◎	○ 金	△	○	内面が黒色化

第５節　まとめにかえて

本報告は、初めに示したとおり、調査と報告を異なる人物が担当して行っている。そのため整理作業及び報告書作成の担当者として気が付いた点を記したい。

調査では、おもに縄文時代早期前葉（前平式）の遺構が検出されている。遺構は竪穴状遺構※1、柱列、集石遺構であり、隣接している。竪穴状遺構と柱列は配置関係から、両遺構が互いに存在を意識して築かれている可能性が高い。この両遺構は調査者が、覆土が異なることから違う時期の遺構としている。しかし、写真を見る限り柱穴は遺物包含（Ⅵ）層付近の層土に類似するのに対して、竪穴状遺構は薩摩降下火山灰（Ⅷ）層をベースにⅦ層土の影響を受けている様に見られる。このことから両者が



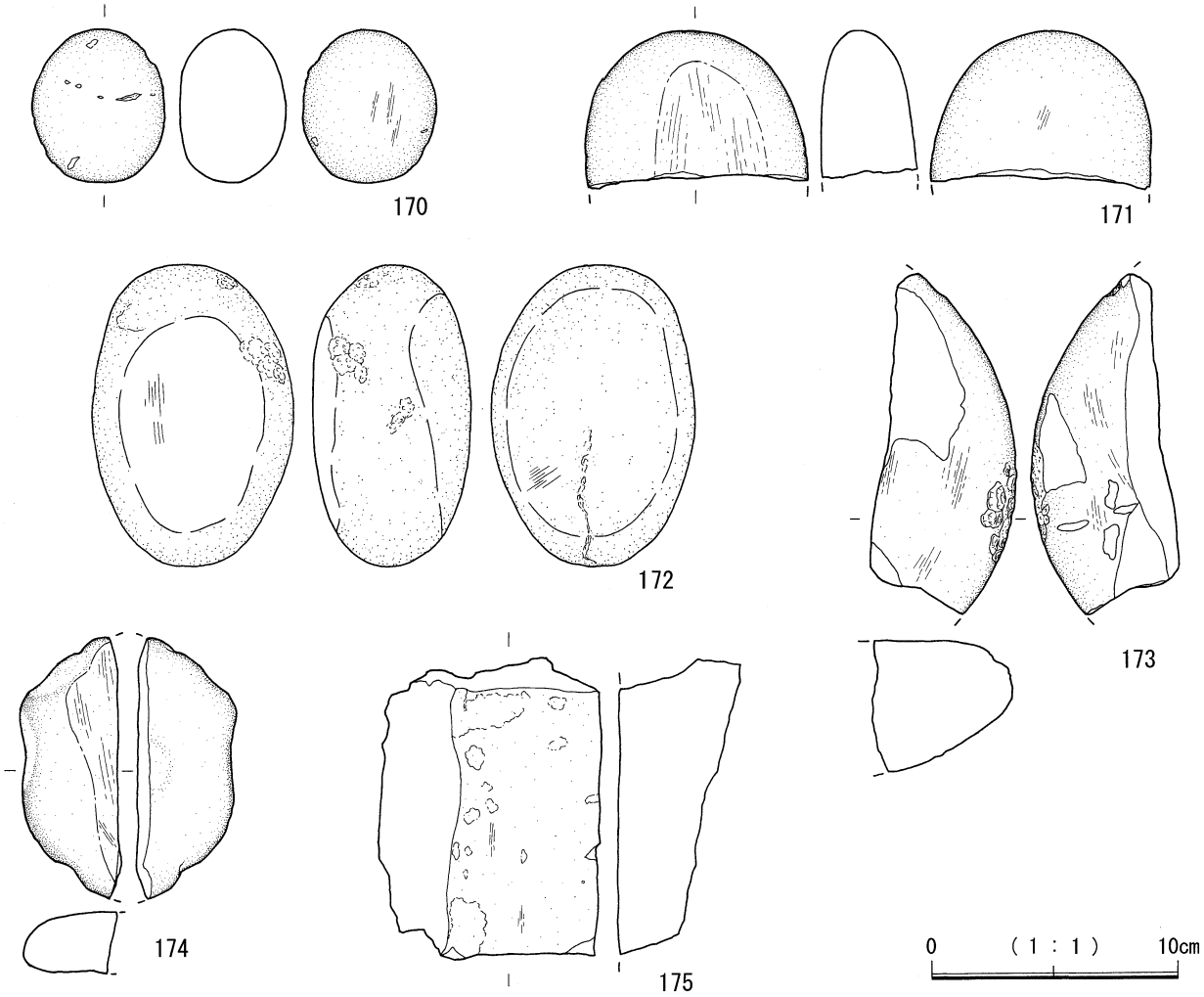
図Ⅱ.25　Ⅵ層 出土石器（１）

異なる土層であるのは筆者も同意見であるが、その違いが時期差ではなく、竪穴状遺構の覆土は土器Ⅱ.85の出土した高さを床面とした浅い掘り込みの竪穴住居や平地式住居の床面もしくは床下の痕跡の可能性があると考える。そうすると重複する様に配置している円形に並んだ柱列が上屋のための施設となり、両者を合わせてひとつの竪穴住居になる可能性が考えられる。今後、類例と調査時例での検証が必要と考えられる。

※１　概要報告をおこなった黒川忠広氏は「前平式土器期の竪穴状遺構は、川辺町鷹爪野遺跡でも検出されており、宮崎県日南市や串間市においても確認されている。」と述べており（出口ほか 2003）、同様の遺構の検出例が他地域においても確認されていることを挙げている

【参考】

黒川晃・倉元良文・下園昌三　1995 『北別府遺跡・丸岡遺跡』県単独農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書　有明町教育委員会
中水忍・栗原文夫　1998 『丸岡遺跡県単独農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書』 有明町教育委員会
出口順一朗・黒川忠広　2003 「丸岡遺跡」『屋部当遺跡・楠原遺跡』有明町埋蔵文化財報告書 (4)p13-19　有明町教育委員会



図Ⅱ.26　Ⅵ層 出土石器（2）

表Ⅱ.13　Ⅵ層　出土石器の計測表

番号		出土位置		器種	石材	法量（最大値で計測、単位はｇとmm）				備考
報告	取上げ	地区	層位			長さ	幅	厚さ	重さ	
163	406		Ⅵ	打製石鏃	黒曜石（三船）	12.5	11.0	2.5	0.1	
164	384		Ⅵ	打製石鏃	黒曜石（西北九州系）	13.0	14.5	3.5	0.5	先端・脚が欠損
165	400	P5	Ⅵ	打製石鏃	チャート	24.0	18.0	5.0	1.2	
166	採取－２	－	Ⅵ	打製石鏃（未製品）	チャート	23.0	22.0	6.0	3.2	
167	採取－１	－	Ⅵ	スクレイパー	黒曜石（姫島）	54.0	30.0	12.0	15.0	
168	216	?	Ⅵ	残核？	黒曜石（針尾）	38.6	29.8	8.4	11.0	多く原礫面があり
169	395		Ⅵ	剥片（R.F）	メノウ	18.0	29.0	4.0	1.4	
－	403		Ⅵ	剥片	黒曜石（不明１）	9.8	6.2	2.9	0.1	原礫面あり
－	404		Ⅵ	剥片	黒曜石（不明１）	8.3	6.8	2.0	0.1	
－	405		Ⅵ	剥片	黒曜石（桑ノ木津留？）	13.8	9.2	3.2	0.4	原礫面あり
－	410		Ⅵ	剥片	黒曜石（不明１）	9.2	3.5	1.2	0.0	
－	396		Ⅵ	剥片	黒曜石（不明１）	22.2	16.4	4.6	1.3	原礫面あり
－	表採	－	Ⅵ	剥片	チャート	32.9	13.3	4.4	1.9	
170	－	－	Ⅵ	素材？	砂岩	63	54	44	204.8	
171	397	P5	Ⅵ	磨石	砂岩	60	89	39	307.4	
172	492	L4	Ⅵ	磨石（素材？）	砂岩	123	84	65	974.7	
173	346	G2	Ⅵ	石皿	凝灰岩	128	56	54	426.7	
174	375	E2	Ⅵ	石皿	砂岩	107	38	26	160.4	
175	343	G2	Ⅵ	石皿	砂岩＋礫岩	120	90	43	638.6	

※出土位置の「？」は、出土位置の記録が不明のものをしめす
※器種の「U.F」はユーズドフレイクを、「R.F」はリッタッチドフレイクをしめす
※石材の（）内は推定産地をしめし、不明１は現在「霧島山系」と呼ばれ議論されているものを指す
※170～175の詳細な出土位置は不明である

第Ⅲ章　仕明遺跡（第４次）

はじめに

平成16年度・平成17年度に、有明町役場建設課が大字蓬原地内の町道宇都鼻志陽１号線の現道拡幅工事に伴い、周知の埋蔵文化財包蔵地である仕明遺跡（69 － 66）の範囲内において土木工事を行うことになり、これに対して試掘調査などを実施した成果を報告する。遺跡の詳細については、既刊の報告書を参照されたい。

第１節　調査経過

平成16年度　立会調査

工事が実施された範囲は、仕明遺跡内の北東側にあたり、大久保集落近くにあたる。現況は現道と埋設トラフ（側溝）に畑地であった。工事は歩道整備と雨水用トラフの埋設工事であり、地表面から約130～140㎝の深さまで掘削を行っている。

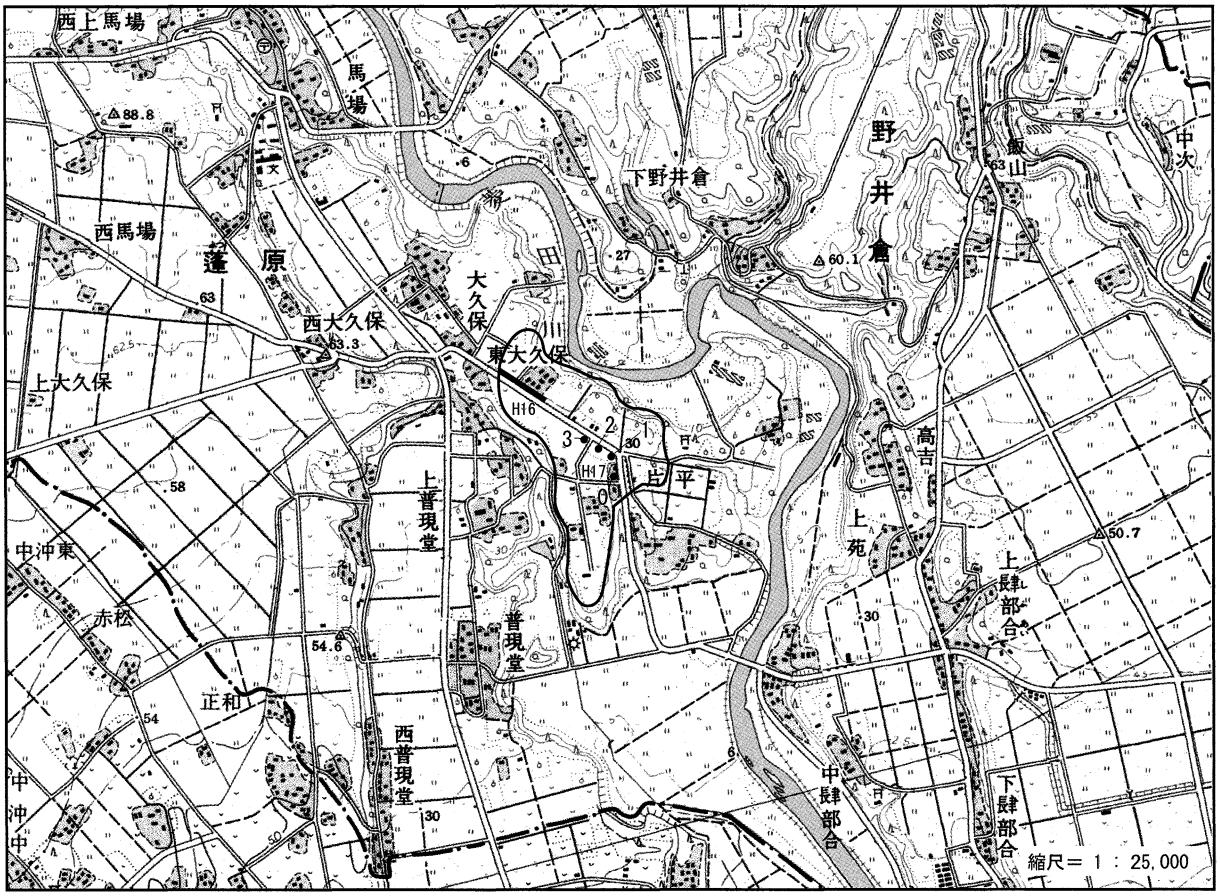
試掘の結果、遺構・遺物は検出されなかったが、工事箇所が仕明遺跡第１次の調査区に近いことから工事立会を行うこととした。立会調査は９月９日から27日までの間に随時実施している。

立会調査では、第１～３次調査において古墳時代以降の包含層とされた層は、耕地整備等の撹拌により削平されており、遺物の出土はない。遺構も池田降下軽石包含層上面及びアカホヤ降下火山灰層上面において検出に努めたが確認されていない。薩摩火山灰層上面においては柱穴１基が検出されている※1。

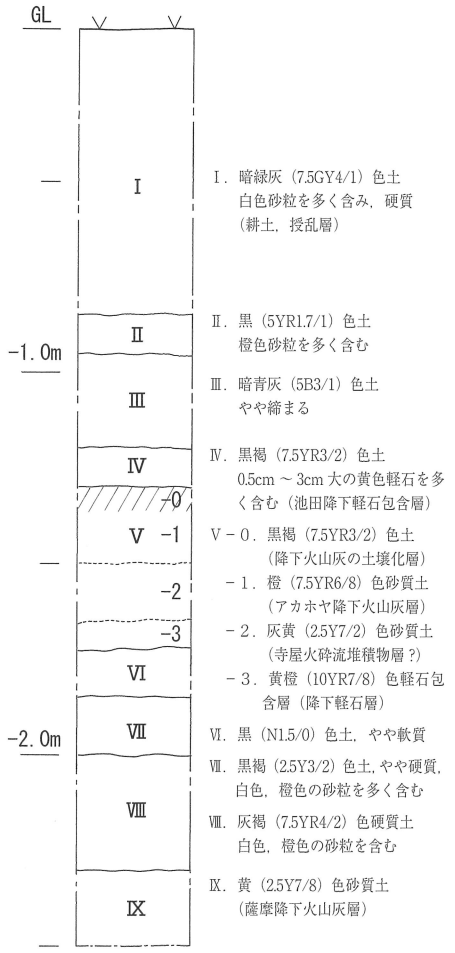
以上の成果から、立会範囲はいずれの時期においても遺構・遺物が希薄な可能性が高い。範囲が河岸段丘のやや舌状に延びた段丘面の中央部にあたることから、段丘縁辺部に比べると生活域などからやや離れた位置となっていた可能性も考えられる。

平成17年度　試掘調査

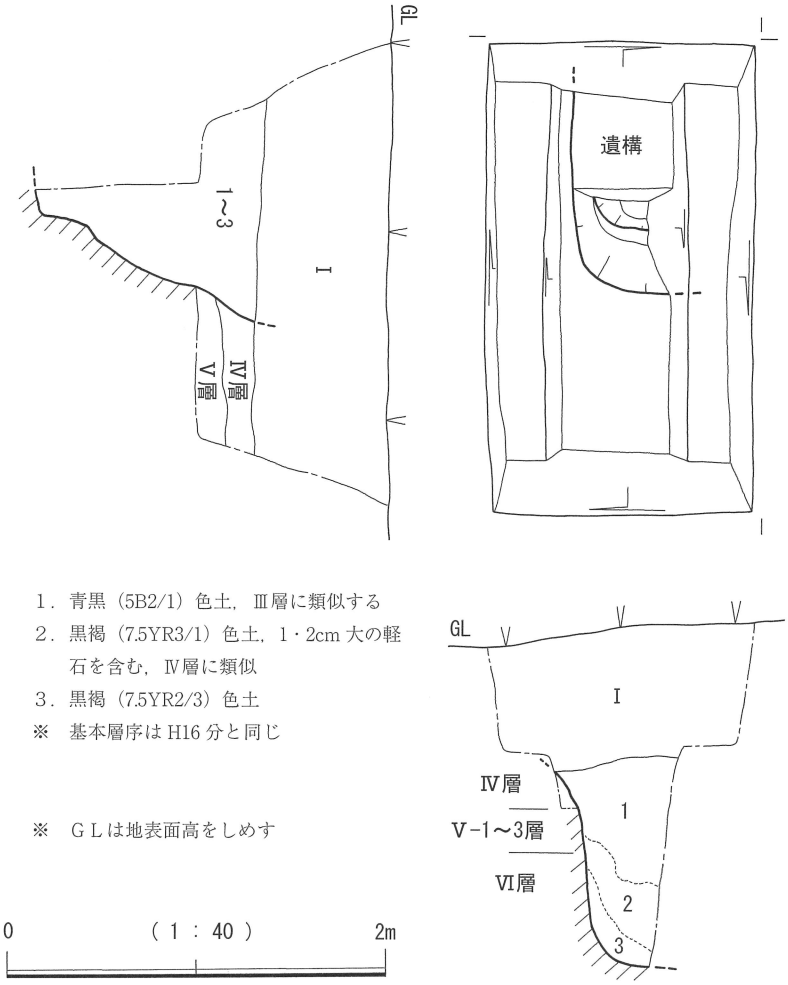
仕明遺跡南側で工事が実施され、位置は片平集落付近にあたる。現況は現道と埋設トラフ（側溝）



図Ⅲ.01　仕明遺跡の位置

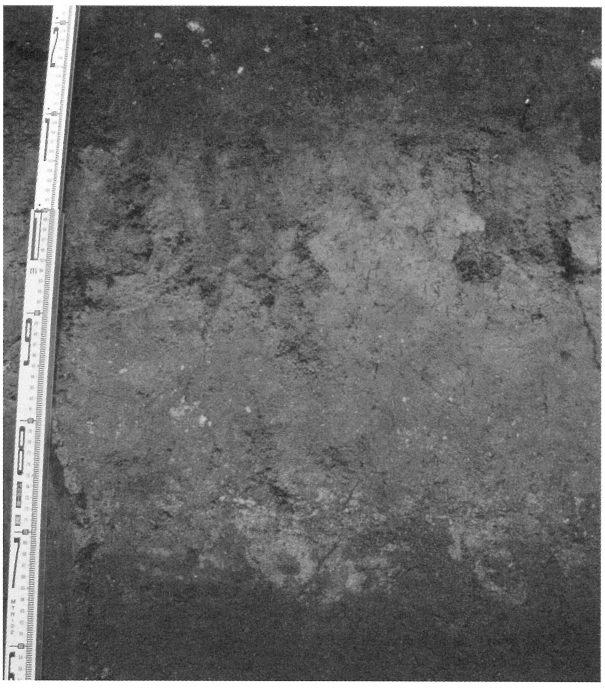


図Ⅲ.02　仕明４次（2004）　基本層序



図Ⅲ.03　仕明４次（2005）　３トレンチ 遺構検出状況

写真Ⅲ.01　調査地（2004）の近景



写真Ⅲ.02　アカホヤ層堆積状況（2004）

に畑地であった。工事は現道を拡幅して歩道整備を行うことを目的としている。

試掘調査は３ヶ所にトレンチを設定し掘り下げている。また、それとは別に拡幅に伴う住宅の法面工事範囲において工事立会いを実施している。

結果、３トレンチにおいて土坑を検出している。土坑は地表面から80 cm掘り下げたアカホヤ降下火山灰層上面において検出している。形態は平面形が隅丸方形に近い楕円形で、断面形はやや段をもった逆台形を呈すると考えられる。平面形はトレンチ外に大きく広がっており、検出した範囲で幅54 cm以上×長さ108 cm以上×深さ110 cmを測る。遺物は出土していない。形状・規模から落とし穴もしくは地下式横穴墓の竪坑の可能性も考えられるが性格は不明である。

他のトレンチ及び立会調査範囲では、遺構・遺物は確認されていない。

トレンチ１～３の範囲は、歩道整備範囲であることから浅い掘削で工事施工が行われ、遺構を守る保護層が確保できることから、そのまま埋め戻して現地保存としている。

まとめにかえて

以上の成果に、第１～３次調査成果を合わせると、H17-３トレンチ-土坑は、古墳時代の地下式横穴墓の竪坑※2か縄文時代前期頃のおとし穴状遺構の可能性が考えられる。

遺跡内の土地利用状況については、遺跡北西部は遺構密度が希薄で、中央部から東部に中心が広がる可能性が考えられる。そしてH17-トレンチ３付近は古墳時代に墓域もしくは縄文時代前期に狩場であった可能性がある。

※１　断ち割り等を行っていないため、確実とはいいがたい

※２　調査中はおとし穴状遺構と考えていたが、試掘終了後に大崎町教育委員会 内村憲和氏に調査中の地下式横穴墓を見学させていただき、内村氏の調査経験をお聞きする機会を得たところ、おとし穴と断定する要素がなく、形態が地下式横穴墓の縦穴部にも類似する可能性があるとの結論に到達している。試掘とはいえども拡張するべきであったと猛省する。

参考文献

出口順一朗・中水忍・堂込秀人・横手浩二郎・東徹志　2005 『仕明遺跡（１～３次）』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）有明町教育委員会

①H17　0トレンチ
②H17　3トレンチ　近景
③H17　3トレンチ　遺構　半裁状況

写真Ⅲ.03　調査状況（2005）

第Ⅳ章　既刊報告書の追録

はじめに

有明町では、2002（平成14）年刊行の『長田遺跡』から本書に至るまで、約４年間で10集の埋蔵文化財発掘調査報告書が刊行されてきた。これは本町の財政規模を考えると対応能力を超えた膨大な量であり、結果として十分な作業が行えないまま報告書刊行を迎えてきている。そこで、ここでは刊行後の収蔵整理などにおいて、新たに掲載の必要が生じた分について追録として報告する。

第１節　仕明遺跡（出土遺物の報告）

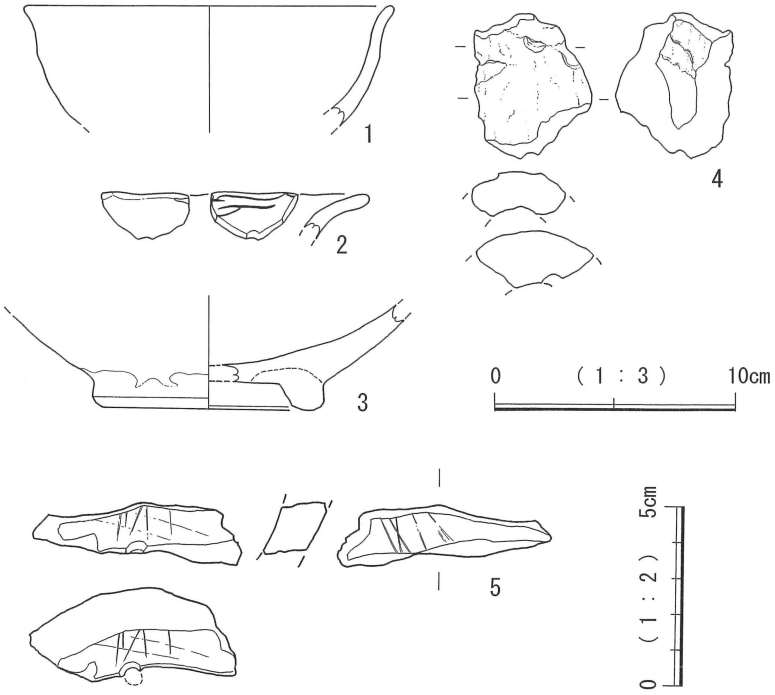
仕明遺跡（69 － 66）は、蓬原校区の東大久保集落から片平集落にかけて存在しており、その範囲は広い。時期も幅広く、古墳時代の集落跡を中心に、旧石器時代後期から古代・中世・近世までの遺構・遺物が発見されている。このことから、この地域が長期にわたって生活域であったことが考えられ、とくに竪穴住居は古墳時代・古代のものが、掘立柱建物は中世・近世のものが存在する。

青磁１・２と白磁３は、輸入陶磁器と考えられる。出土位置は北区北端から東区である。

羽口４は羽口先端部であり、外面にガラス化した鉱滓が付着する。出土位置は東区東側付近の確認トレンチ内である。時期は不明であるが、仕明遺跡では古墳時代の竪穴住居内より、鉄製の馬具・刀子など出土し、竪穴住居３では鉱滓も出土していることから、古墳時代のものである可能性も考えられる。

石製品５は滑石製石鍋の二次加工品と考えられ、穿孔を穿った痕が見られる。出土位置は掘立柱建物の集中する北区南半である。

参考文献
出口順一朗・中水忍・堂込秀人・横手浩二郎・東徹志　2005　『仕明遺跡（１～３次）』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）有明町教育委員会



図Ⅳ.01　仕明遺跡 出土遺物

写真Ⅳ.01　鉄分付着の軽石製品

第２節　長田遺跡（鉄製刀子の分析）

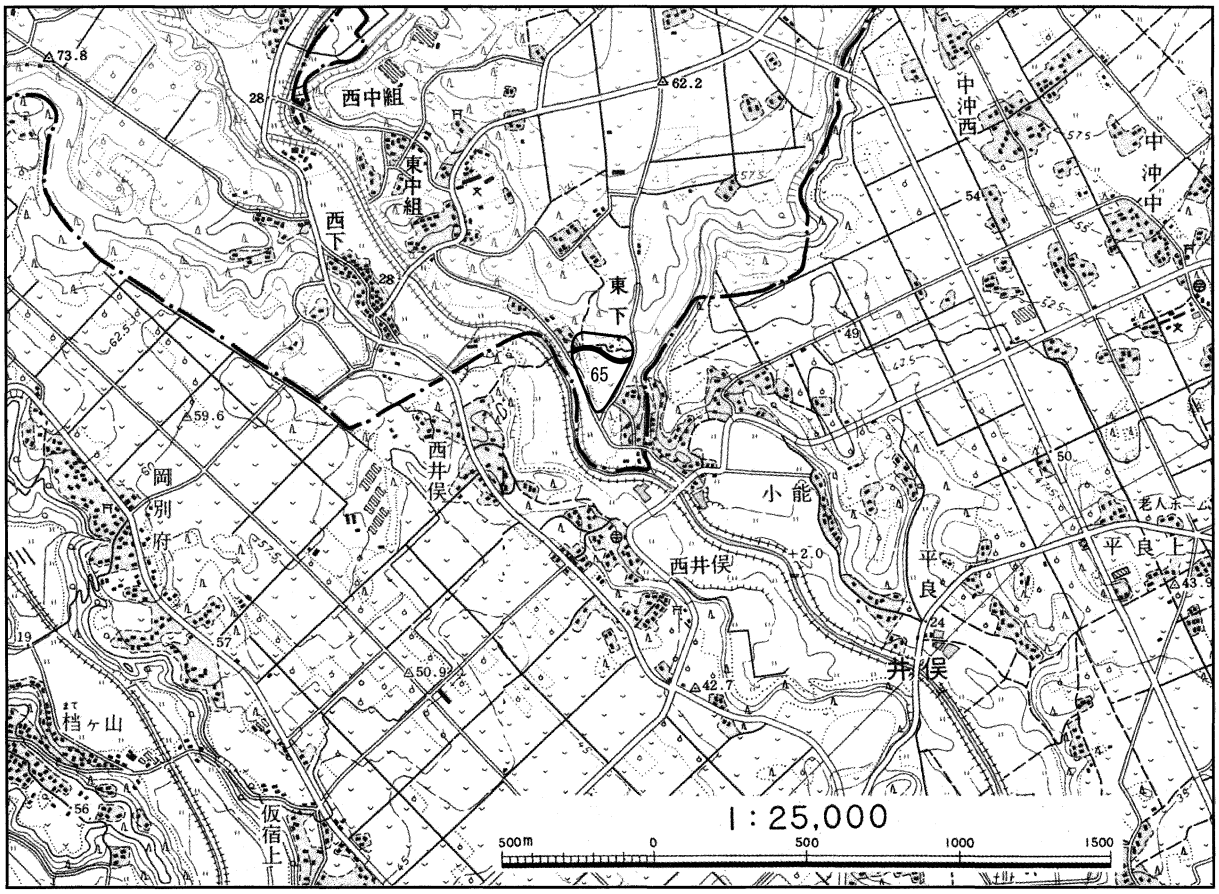
長田遺跡（69 － 65）は、原田校区の東下集落付近にあり、周囲は古墳が存在し、古墳時代・弥生時代の遺物が多く出土している地域である。平成 11 年度に発掘調査を行い、平成 14 年度に報告書を刊行後、鉄器の保存処理・分析を委託する機会を得たので、その成果について報告する。鉄器の保存処理・分析は、財団法人元興寺文化財研究所に委託しており、処理・分析を井上美知子が、遺物観察と実測・トレースを橋本英将が行っている。

１．長田遺跡出土刀子について

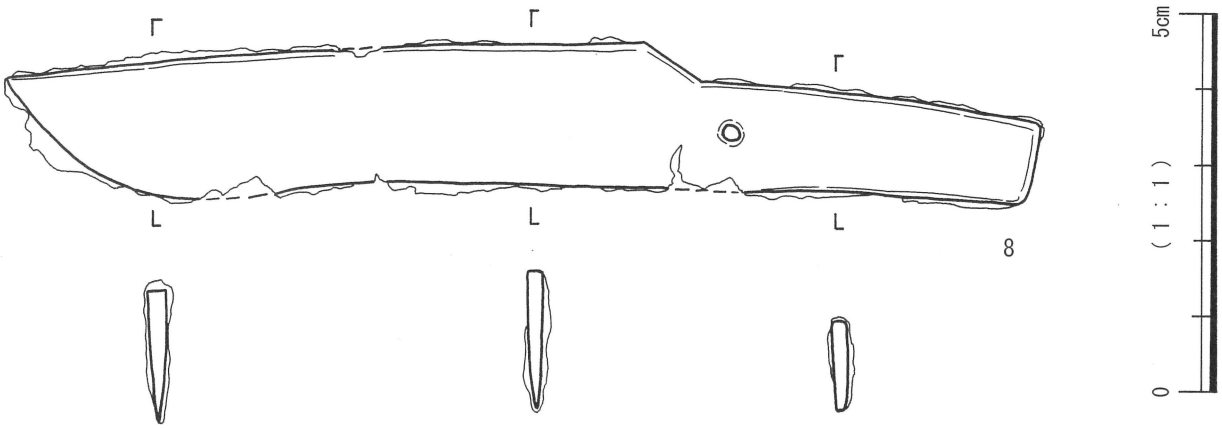
取上げ番号・出土位置については、調査を担当した出口順一朗氏に確認したところ、２号竪穴住居の出土遺物の鉄製品 33 として報告書掲載したものである。当時は鑓鉋もしくは刀子として報告している。法量は長さ 13.6 cm×幅 1.9 cm×厚さ 0.2 cm、重さ 15.2 g を測る。（東）

刀子は全体的に内反り気味である。一部欠損があるが、刃部と茎部のラインから刃側の関は無かったものと考えられる。背後にのみ関をもつ刀子は古墳時代後期以降に一般的に見られるタイプである。目釘穴はＸ線撮影の観察結果より位置が不自然であることから、注意を要する。刀身の一部には有機物痕跡があり、鞘の一部である可能性が考えられる。（橋本）

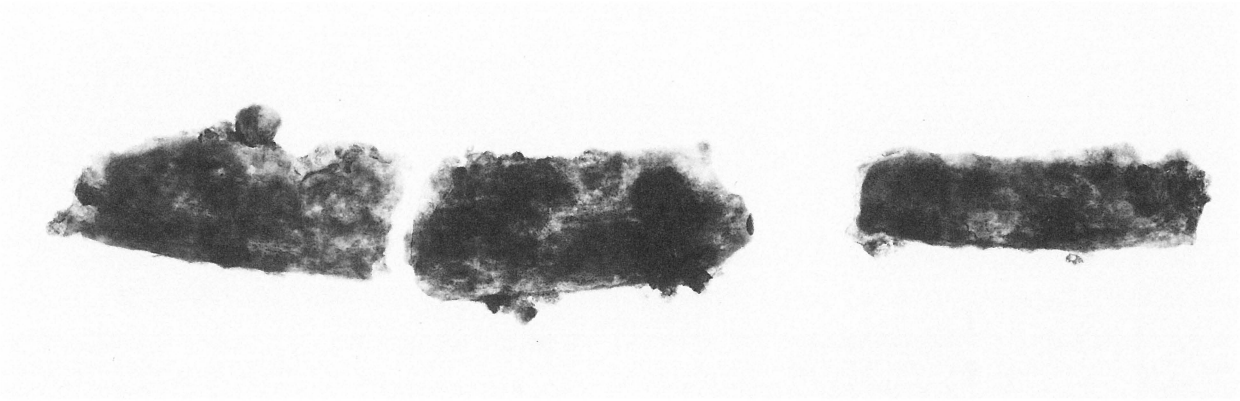
参考文献　出口順一朗･堂込秀人　2003 『長田遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（２）　有明町教育委員会



図Ⅳ.02　長田遺跡の位置



図Ⅳ.03　長田遺跡　出土刀子



写真Ⅳ.02　長田遺跡 出土刀子のレントゲン写真

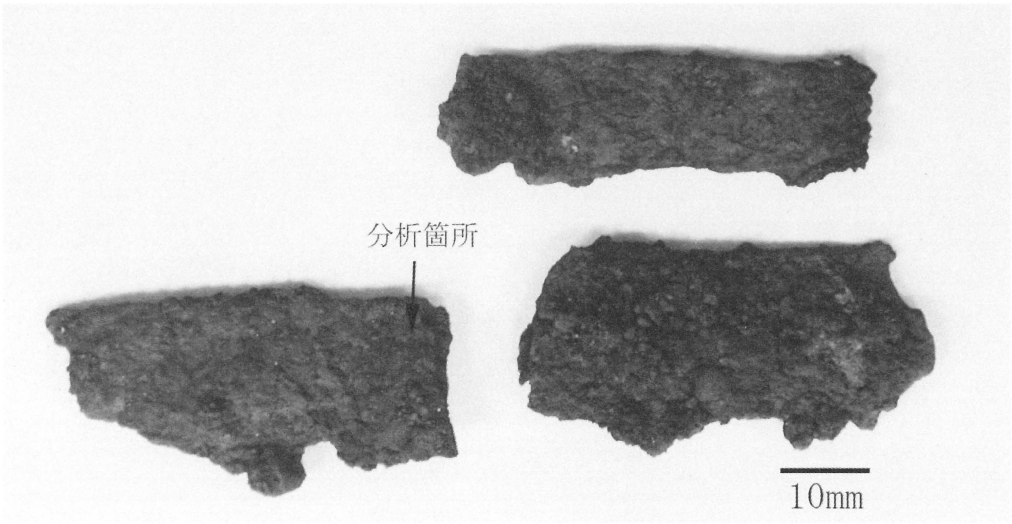
1．長田遺跡出土刀子の分析について

財団法人　元興寺文化財研究所

長田遺跡出土刀子の分析について、以下のとおり報告します。

調査対象

№2刀子の表面（写真2）



写真Ⅳ.03　刀子の分析箇所

内容

ケイ光X線分析（以下、XRF）装置で、比較的サビの少ない箇所の元素分析を行った。

使用機器及び測定条件

エネルギー分散型ケイ光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ㈱製 SEA5230）

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。

モリブデン管球使用、大気条件下、コリメータ 1.8mm、管電圧 45kV

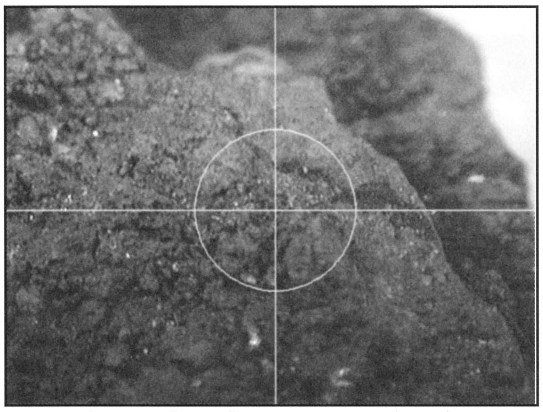
結果

XRF の結果、№2刀子の表面では主な元素として鉄（Fe）を検出した（図2）。

［測定条件］

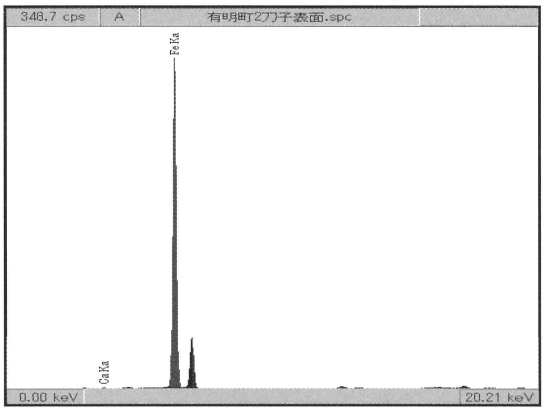
測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	216
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ 1.8mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	16
コメント	03189 有明町№2刀子表面

［試料像］



視野：［X Y］6.60　4.95（mm）

［スペクトル］



［結果］

Z	元素	元素名	ライン	A（cps）	ＲＯＩ（keV）
20	Ca	カルシウム	Kα	3.934	3.54－3.84
26	Fe	鉄	Kα	2587.759	6.23－6.57

図Ⅳ.04　刀子表面の XRF スペクトル

第３節　楠原遺跡（出土石器の報告）

楠原遺跡（69 － 116）は、蓬原校区の西中野集落付近にある。町指定である蓬原城・金丸城は遺跡の存在する台地の延長上に存在している。平成９年度に発掘され、平成 14 年度に屋部当遺跡の調査成果と共に報告されている。今回は未掲載であった出土鉱滓・石器について報告する。

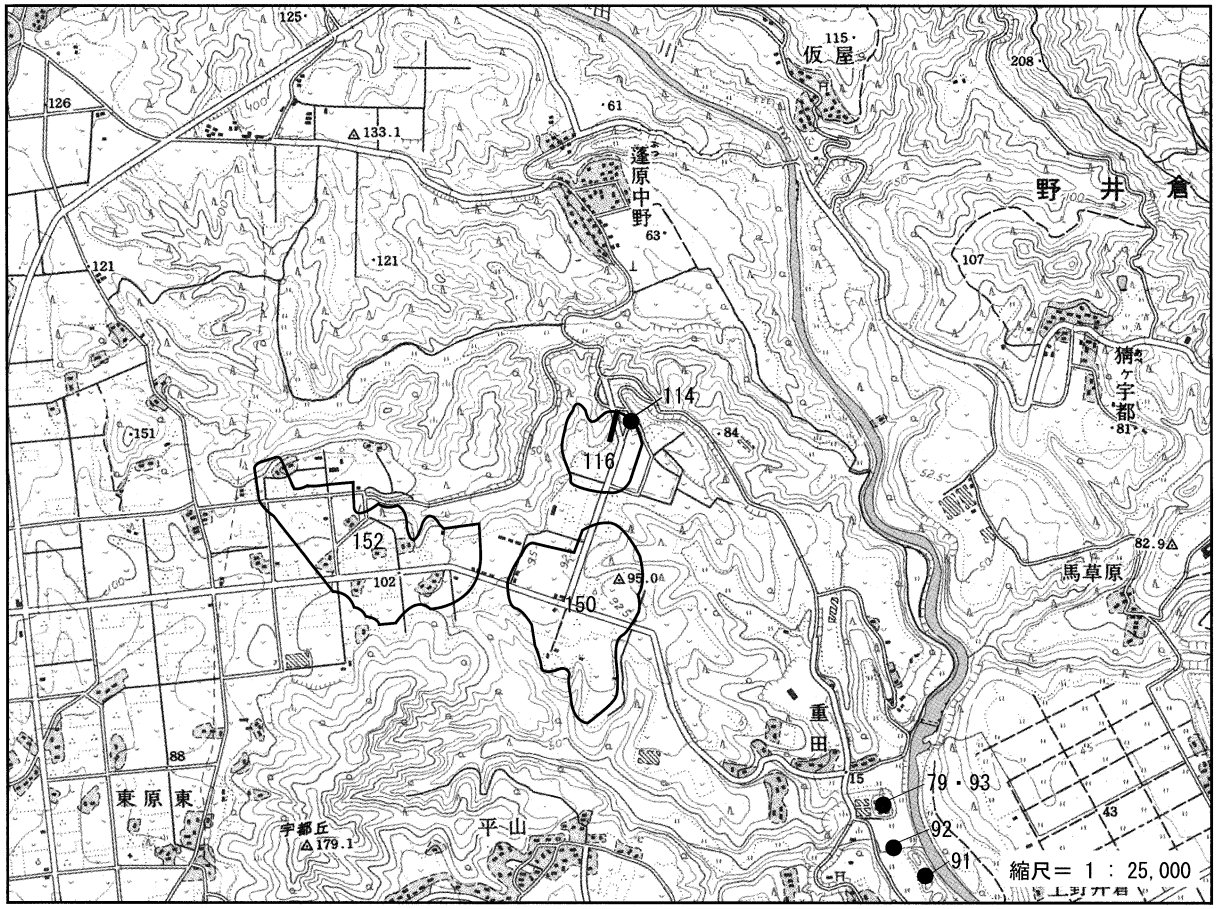
詳しい分布の傾向などは報告書に譲るが、出土位置は図にて示している。出土層はおもにⅤ層であり、縄文時代後期から古墳時代の遺物の包含層と報告されている。

鉱滓は５点あり、３点は径３～５cm大と小さい。鉱滓９・10 は重量が他に比べて重く、錆と考えられる赤色化がみられることから鉄滓と考えられる。磁力にも反応が見られる※1。鉱滓９の法量は長さ 10.3 cm×幅 8.0 cm×厚さ 7.1 cm、重さ 725.3 g を計る。鉱滓 10 の法量は長さ 13.2 cm×幅 9.6 cm×厚さ 3.1 cm、重さ 409.2 g を計る。

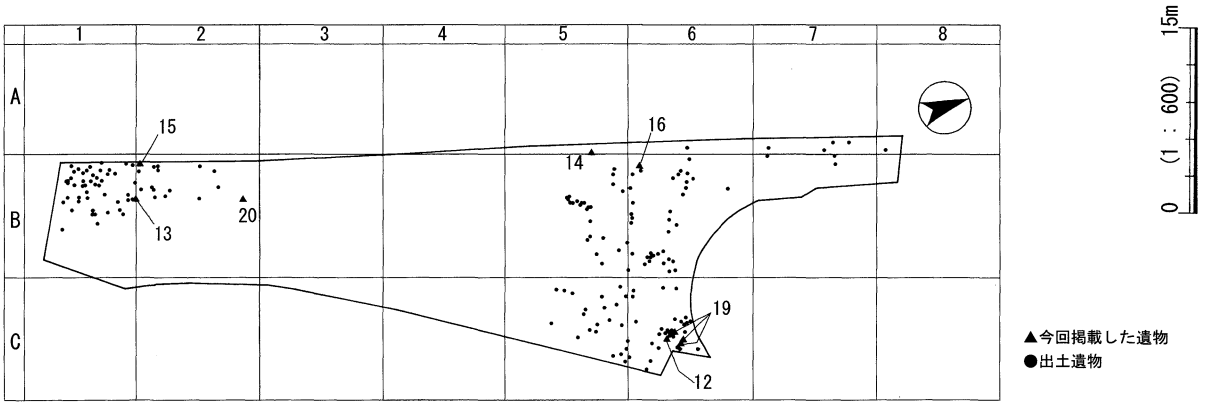
石器は打製石庖丁１点、石鏃１点、打製石斧２点、磨製石斧３点、石皿２点、その他１点の 10 点を数える。打製石庖丁 12 は、対になる紐掛部を打ち欠いて作り、刃部の反対側には刃潰しを行っている。石器 13 は磨製石斧などの破損剥片を研磨して刃部と考えられる形状に整える。刃部には使用痕が見られる。

※１　学校用教材用磁石で実施している

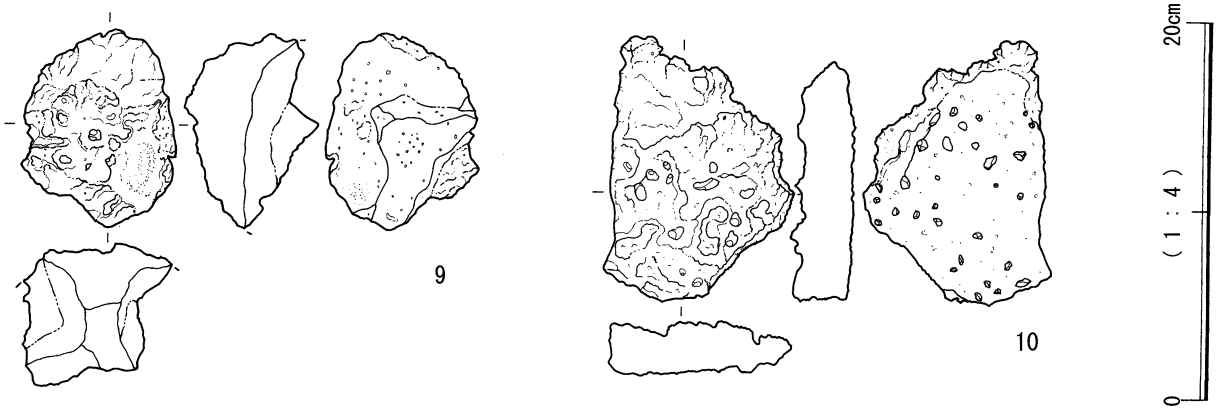
参考文献
出口順一朗･黒川忠広　2003 『屋別当遺跡、楠原遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）　有明町教育委員会



図Ⅳ.05　楠原遺跡の位置



図Ⅳ.06　楠原遺跡　遺物分布

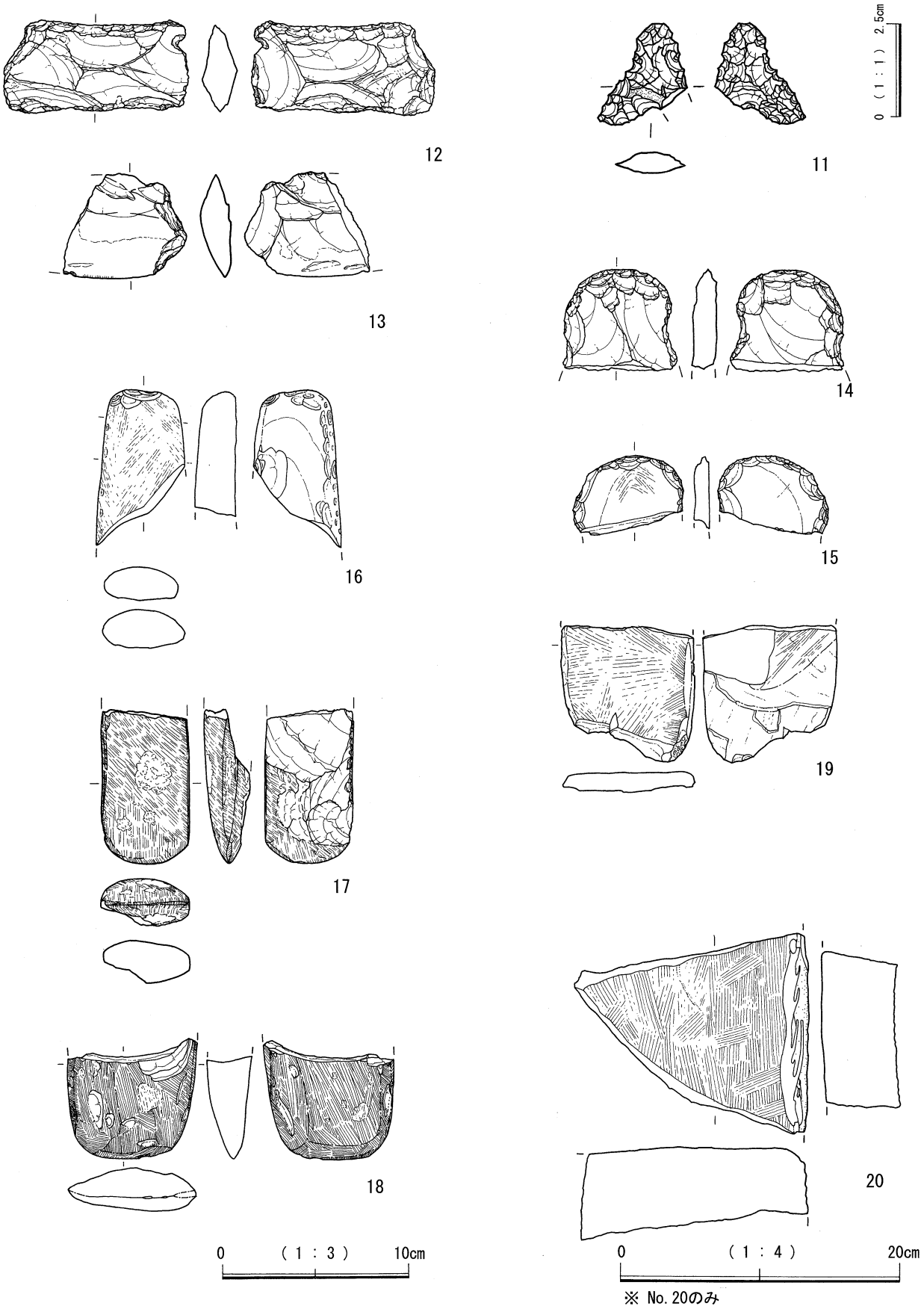


図Ⅳ.07　楠原遺跡　出土鉱滓

表Ⅳ.01　楠原遺跡 出土石器の計測表

番号		出土位置		器種	石材	法量（最大値で計測、単位はｇと㎜）				備考
報告	取上げ	地区	層位			長さ	幅	厚さ	重さ	
11	6	6T	V	打製石鏃	白色チャート	1.9	1.1	0.6	0.6	
12	103		表層	打製石包丁？	粘板岩	5.0	9.9	1.8	101.4	
13	51	B	Ⅳ	打製石斧？	安山岩？	5.7	6.6	1.7	69.9	
14	166	P5	V	打製石斧	頁岩	5.5	6.0	1.6	57.2	
15	46	B2	V	打製石斧	頁岩	3.3	5.8	0.8	31.3	
16	172	B6	V	磨製石斧	安山岩？	7.3	4.4	2.1	106.9	
17			V	磨製石斧	硬質頁岩	8.3	4.7	2.5	114.8	
18	一括	AB3		磨製石斧	硬質頁岩	5.4	6.8	2.3	108.0	
19	116.117.197	C6	V	石皿	硬質砂岩	6.9	7.0	1.0	71.4	
20	65	B2	V	石皿	硬質砂岩	14.3	16.6	6.0	1744.4	

※出土位置の「？」は、出土位置の記録が不明のものをしめす



図Ⅳ.08　楠原遺跡　出土石器

第Ⅴ章　町収蔵品の報告※1

第１節　高牧城跡遺跡

倉庫Ｂに封筒袋に入れた状態で保管されていた。封筒には「高牧城跡」と表書きがあった。収蔵に至る経緯は不明であるが、有明町誌の文中写真に類似のものが一部見られる。

高牧城跡遺跡（69 － 81）は周知の遺跡の範囲にあたる。菱田川支流の大鳥川流域にあり、立地は独立した舌状の台地で、周囲より高くなる。遺跡名は中世や近代の西南戦争時に城・砦があったという伝承に由来し、現在も一部に堀跡が残ると言われる。隣接して縄文時代早期の包含層のみが遺存する高牧Ａ遺跡（69 － 10）が存在する。

表採遺物

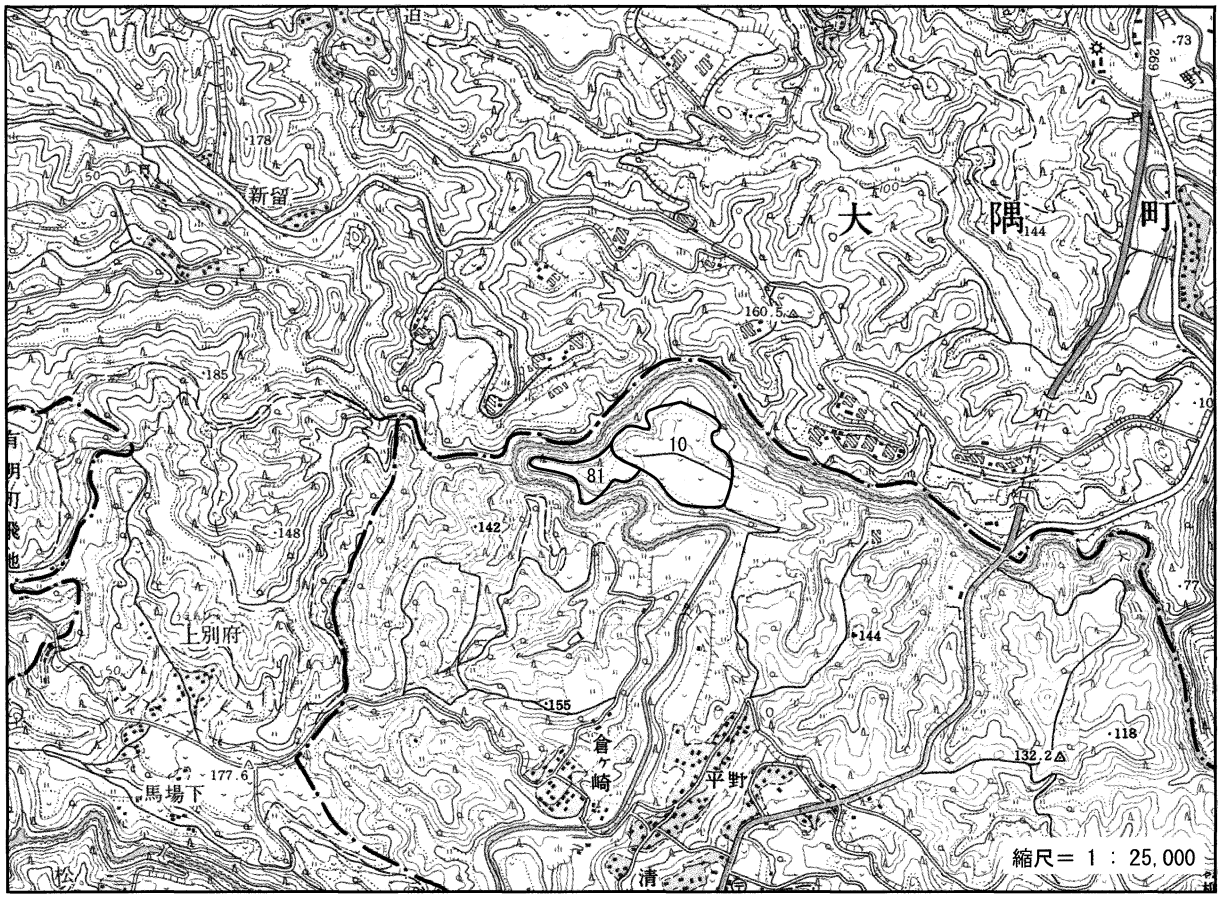
遺物は土器類 23 点、石器類２点がある。時期は土器の特徴からおもに縄文時代後期と考えられる。

土器１～ 12 は、口縁端部や口唇部にキザミ・刺突文をもち、外面を貝殻条痕後にナデを施して整える。文様は幅広の太い沈線文が並行したり、幾何学的に描かれたりする。形式は、綾式と呼ばれるものに含まれると考えられるが、口縁部４・７などは不明である。

口縁部４には、口唇部から口縁部にかけて横位のキザミをもった縦長の浮文が、２つ並行して貼り付けられる。胴部 10・11 は太い沈線文の間に貝殻腹縁の刺突文が施される。胴部 12 は短沈線文が同一方向に連続して施文される。

口縁部 13 は、口唇部と口縁端部に指を施文原体にしたキザミが施される。外面は強い横の指ナデにより、境が突帯状を呈する。形式は不明である。

口縁部 14 ～胴部 16 は、口縁部外面に断面形が三角状に肥厚させた文様帯をもち、その上下に貝殻腹縁の刺突文などが施される。形式は、市来式と呼ばれるものに含まれると考えられる。底部 18・胴部 19 は胎土が酷似しており、同一個体の可能性が考えられる。また、胎土が比較的 14 ～ 16 に類似する。



図Ⅴ.01　高牧城跡遺跡の位置

表Ⅴ.01　高牧城跡遺跡　表採土器の観察表

挿図番号	図番号	遺物番号	部位	色調 内面	色調 外面	調整・文様 内面	調整・文様 外面	胎土中の混和材（mm） 粒度	石英	長石	雲母	黒色砂	赤色砂	備考
Ⅴ.02	1	3	口縁	にぶい赤褐 5YR5/4		口縁端部：横の貝殻条痕後に横のナデ、指頭圧痕が残る 口縁部：横の貝殻条痕後、横のナデ	口縁端部：縦位のキザミ 口縁部：貝殻条痕後に横のナデ、太い沈線文を多条	0.5	○	○	△金	○	△	内外面の一部が黒色化
	2	4	口縁	にぶい赤褐 5YR5/4		口縁端部と口唇部の境に貝殻刺突による斜位のキザミ 口縁部：横のナデ	口縁端部と口唇部の境に斜位のキザミ 口縁部：貝殻条痕後に横のナデ、太い沈線文を数条	0.5	◎	◎	△金	○	△	外面が黒色化
	3	2	口縁	明赤褐 5YR5/6		口縁部：横の貝殻条痕後、横のナデ	口唇部：縦位のキザミ 口縁端部：縦位のキザミが２条 口縁部：横の貝殻条痕後に横のナデ、太い沈線文を３条	1	○	○	△金	○	○	
	4	1	口縁	にぶい赤褐 5YR5/4		口縁端部：横のナデ 口縁部：横の貝殻条痕後、横のナデ	口縁部：横の貝殻条痕後に横のナデ、太い沈線文を数条	1	△	○	△金	△	△	口唇部から口縁部にかけて、横位のキザミをもった縦の浮文をもつ
	5	11	胴	暗灰黄 2.5Y5/2	にぶい赤褐 5YR5/4	横の貝殻条痕後、横のナデ	横のナデ後、太い沈線文を多条	2	○	◎	◎金	△	△	内面が黒色化
	6	13	胴	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR5/4	横の貝殻条痕	横の貝殻条痕後に横のナデ、太い沈線文を数条	2	○	◎	◎金	△	△	
	7	9	口縁	にぶい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR6/6	横のナデ	口唇部：横のナデ後、三角形の刺突 口縁部：縦の貝殻条痕後、弱いナデ	0.5	○	○	△金	△	△	外面が極わずかに黒色化
	8	17	胴	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	横の貝殻条痕	横のナデ後、太い沈線を多条施文した後、横のナデ	0.5	△	○	△金	△	△	内面がわずかに黒色化
	9	12	胴	にぶい黄橙 10YR6/4	橙 5YR6/6	横の貝殻条痕後、横のナデ	横のナデ後、太い沈線を多条施文した後、横のナデ	2	○	◎	◎金	△	△	
	10	19	胴	にぶい褐 7.5YR5/4	灰褐 7.5YR4/2	横の貝殻条痕後、横のナデ	横のナデ後、横位ないし斜位の貝殻腹縁の刺突をした後、やや太い沈線を多条施文	0.5	△	△	△金	△	△	内面がやや黒色化、外面が黒色化
	11	18	胴	橙 5YR6/6		横の貝殻条痕後、横のナデ	横のナデ後、縦位の貝殻腹縁の刺突をした後、やや太い沈線で区画する	0.5	○	△	△金	△	△	
	12	16	胴	橙 7.5YR7/6		横の貝殻条痕後、横のナデ	横のナデ後、太く短い沈線文	0.5	○	◎	○金	○	○	外面が黒色化
Ⅴ.03	13	5	口縁	橙 7.5YR6/6		横のナデ、指頭圧痕が残る	口唇部と口縁端部：指を施文原体にキザミ 口縁部：強い横の指ナデにより、境が突帯状を呈する	0.5	△	◎	△黒	◎	－	外面がやや黒色化
	14	7	口縁	褐 7.5YR4/3	にぶい褐 7.5YR5/4	口縁端部：横の貝殻条痕後、横のナデ 口縁部：横の貝殻条痕	口縁端部：横のナデ 口縁部：横の貝殻条痕後、横のナデ。低く幅のある突帯の上下に斜位の貝殻腹縁の刺突文	0.5	△	△	△黒	△	△	内外面が黒色化
	15	6	口縁	にぶい褐 7.5YR5/4		口縁端部：横の貝殻条痕後、横のナデ 口縁部：横の貝殻条痕	横の貝殻条痕後、突帯の上に縦位のキザミを刺突	1	○	◎	◎黒	◎	○	内外面がやや黒色化
	16	20	口縁	にぶい赤褐 5YR5/4		横の貝殻条痕後、横のナデ	縦に貝殻条痕 突帯の上下に斜位の貝殻腹縁の刺突	1	○	◎	○金	○	○	外面がやや黒色化
	17	8	口縁	にぶい橙 7.5YR6/4		横のナデ	口唇部：斜位のキザミ 口縁部：横のナデ後、斜位の貝殻腹縁の刺突	2	◎	◎	○金	△	△	
	18	10	底	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	不明	底部：貝殻条痕 底面：網代網の圧痕	0.5	○	◎	○金	△	△	
	19	14	胴	橙 7.5YR6/6		横の貝殻条痕後、横のナデ	横の貝殻条痕後、一部に横のナデ	0.5	○	◎	○金	△	△	
	20	15	胴	橙 7.5YR6/6	黄灰 2.5Y4/1	丁寧な横のナデ	組織痕の圧痕	1	○	○	△金	○	△	内面が黒色化
	21	22	胴	にぶい橙 5YR6/3	灰褐 5YR4/2	同心円状の当具痕	格子目状のタタキ目	1	△	○	△黒	○	△	内外面がやや赤色化
	22	21	胴	にぶい黄橙 10YR7/3		上へのケズリ後、ナデ	縦の貝殻条痕	0.5	○	○	△黒	○	△	外面がわずかに黒色化
	23	23	胴	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	上端：横の貝殻条痕ないしハケメ その他：縦の貝殻条痕ないしハケメ	ナデか？	4	◎	◎	○金	○	○	内外面が非常に摩滅

口縁部17は、外反する口縁に、口唇部に斜位のキザミを、外面に斜位の貝殻腹縁を施される。形式は縄文時代早期前葉の石坂式と考えられる。

胴部20は外面に組織痕と呼ばれる圧痕が見られ、内面は黒色化し丁寧に磨かれる。縄文時代晩期のものであろうか。

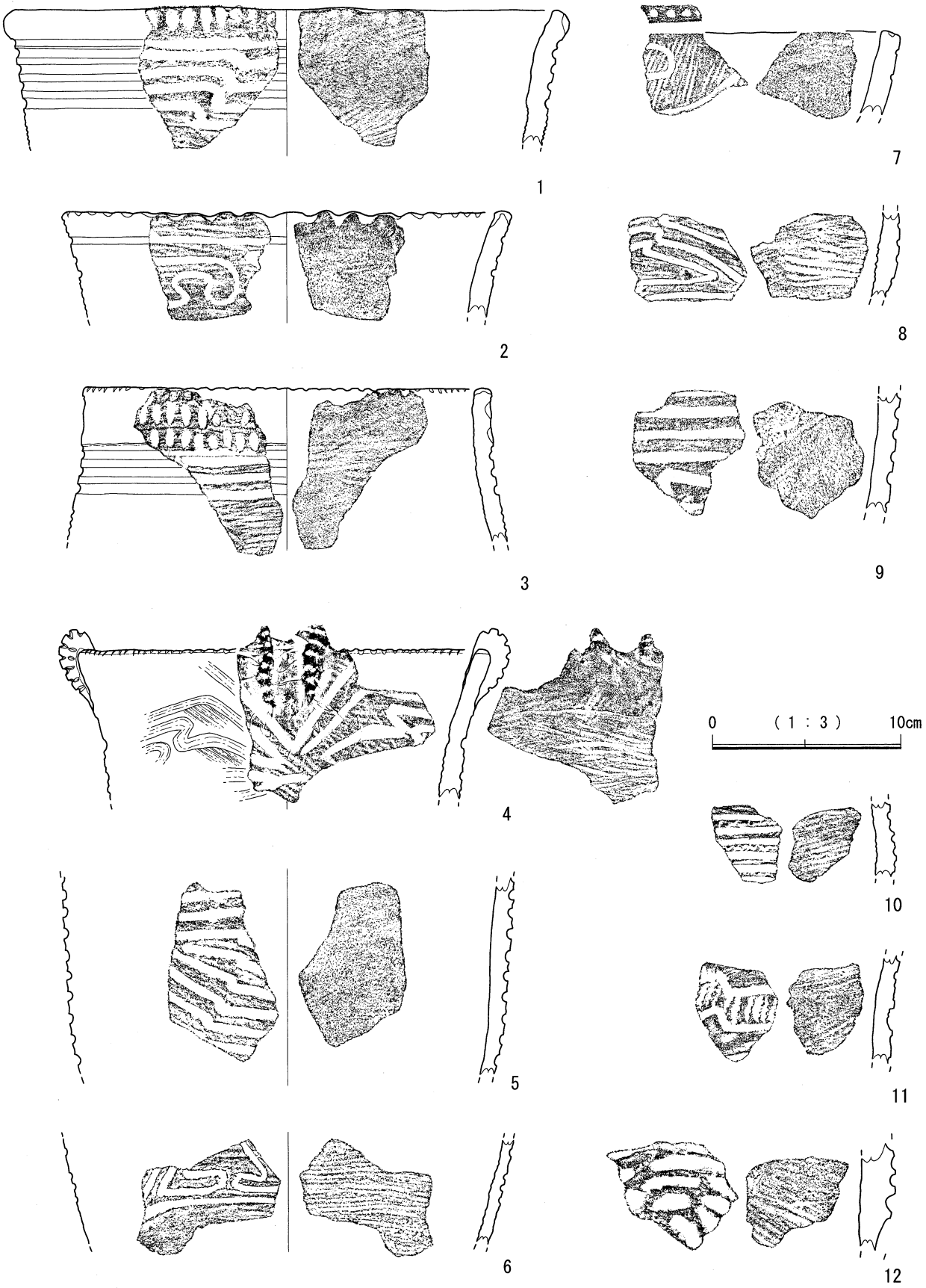
胴部21は、内面に同心円状の当具痕と外面に格子目状のタタキ目とをもつ、中世須恵器もしくは陶器であろうか。胴部22は器壁が厚手で粗製である。時期・形式ともに不明である。

胴部23の器面は非常に摩滅しており、河川などでローリングを受けたと考えられる。形式は不明であるが、古墳時代の中津式頃の器形に近いと思われる。

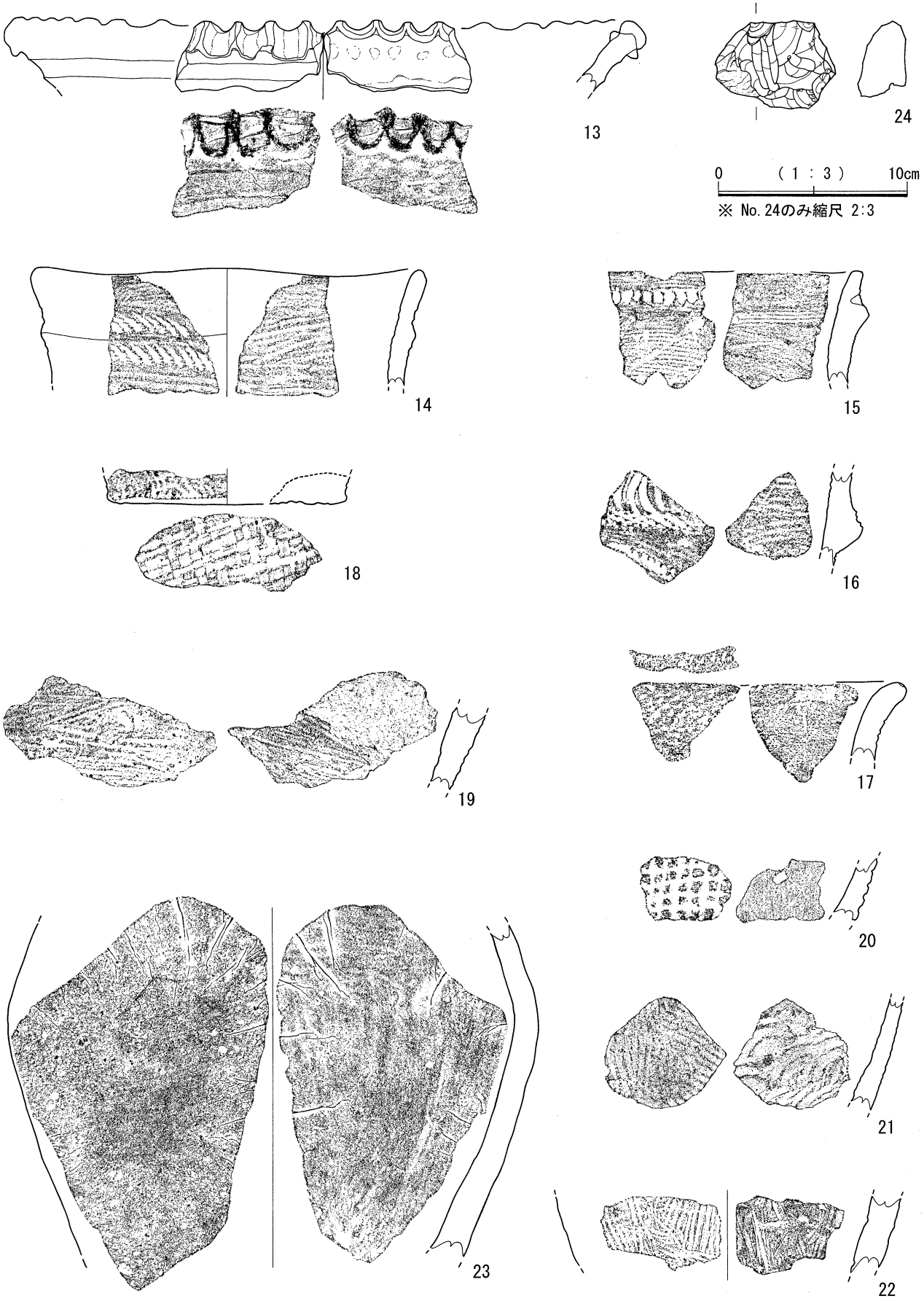
石器24は残核であろうか、打点と原礫面が見られる。石材は不純物の多い竜ヶ水産の黒曜石である。法量は長さ2.3cm × 3.2 cm× 1.3 cm、重さ8.4gを測る。

※1　ここで紹介する遺物は、今年度に行われた収蔵資料の整理作業に伴い確認された資料である。遺物は役場裏の２棟の倉庫に分けて保管されており、担当者交代の過程で保管状況が不明となっていた。倉庫はおもにごみ分別場・資材置き場に利用されている倉庫Ａ（仮称）とおもに公用車車庫に利用している倉庫Ｂ（仮称）である。倉庫Ａでは一階隅に複数のダンボール箱に入れて保管してあり、白蟻により箱・名札が食い荒らされた状態であった。そのため遺物の詳細が不明であるが、わずかに残った名札には「山ノ口」とあり、その他にも遺物に直接記入したものなどが見られた。これらは状況からおもに伊崎田の山ノ口遺跡の遺物と思われる。倉庫Ａ内の「埋蔵文化財倉庫（発掘調査用の資材置場）」内において「いせんぼ遺跡」の資料を確認している。倉庫Ｂでは中二階のスペースに複数のダンボール箱に保管されており、虫食いなどは一部を除き見られなかった。遺物の名札などには「高牧城跡」「水頭」などの記入が見られた。

山ノ口遺跡については、鹿児島県教育委員会が過去に実施した分布調査時に、耕地改良事業中の現場より、採取された記録があり、その一部が町に収蔵されていたことが確認されている。鹿児島県立埋蔵文化財センターには、上記以外にパンケース約25箱分が収蔵されている。



図Ⅴ.02　高牧城跡遺跡　表採遺物（1）



図Ⅴ.03　高牧城跡遺跡　表採遺物（2）

第２節　いせんぼ遺跡

伊崎田校区黒葛集落の川添純弘氏より寄贈された遺物である[※1]。川添氏によれば、遺物は茶木作付けのため畑地を整地中に、アカホヤ降下火山灰層より上の黒色土層中より出土したと言うことである。現況は茶畑となっている。[※2]

いせんぼ遺跡（69 － 16）は、菱田川の上流域にあり、標高約 174 mの台地縁辺部に立地する。旧地形は不明である[※3]。周囲はシラス台地の侵食が激しく開析した谷が多く見られ、北側の谷には湧水を利用した水田が広がる。台地面には凹凸が多く見られる。

表採遺物

遺物は鉱滓類 10 点、土器類 31 点、石器類 48 点がある。時期は土器の特徴からおもに縄文時代後期と考えられる。鉱滓については時期が不明である。

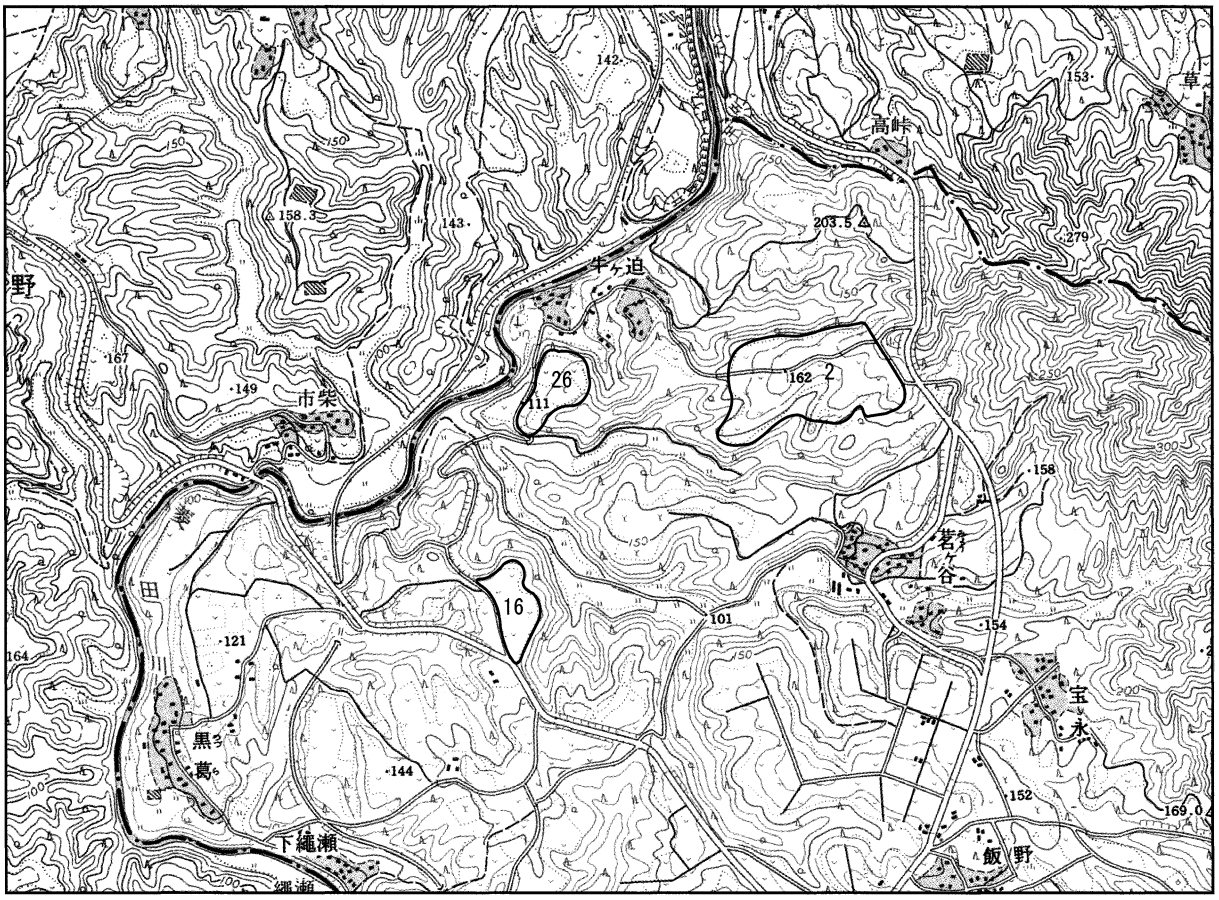
鉱滓は、いずれにも赤色化した部分がある。とくに図化した 25・26 と註記番号２・３の計４点は磁石に反応があり、鉄滓と考えられる。25 は椀形滓で、上面に流動した痕が見られる。26 は裏面に細長い繊維の痕跡が見られる。

土器 27 ～ 31 は、外面を貝殻条痕後にナデを施して整え、幅広の太い沈線文を並行させる。形式は綾式に含まれると考えられる。口縁部 27･胴部 29 は､太い沈線文の間に貝殻腹縁の刺突文が施される。

土製品 32 は、土器片を再加工した土製円盤と考えられ、縁を打ち欠いて円形に整える。

口縁部 33 は、口縁部がほぼ直角に外に折れ、上を向いた口縁端部に２条の沈線文と円形刺突の列が施される。口縁部 34 は内外面にミガキを施し、口唇部に縄文を施文する。33・34 の形式は不明であるが、縄文時代後期の範囲内と思われる。

底部 35 ～ 39 には、底面が網代網の圧痕の 35・37、貝殻条痕の 39 などがある。口縁部 40 は内外面を貝殻条痕で整え、口縁部が波状の器形を呈する。形式は不明である。口縁部 41 は、内外面に密のミガキを施し、器面が黒色化する。



図Ⅴ.04　いせんぼ遺跡・堂ノ上地点の位置

石器は磨製石斧１点、打製石斧１点、打欠石錘１点、凹石１点、磨･敲石類26点、石皿16点がある。注目する点としては、磨･敲石・石皿の間にセット関係が存在する可能性がある点が挙げられる。それは磨･敲石に、磨面が平らで断面形の角がやや尖る49～51と、磨面の縁がさらに磨面を形成して断面形がやや丸みを帯びる47・52・62・67とがあり、前者が石皿の浅い凹みしかもたない82・83・85に、後者がそれ以外の深い凹みをもつものに対応する可能性が考えられる。

いせんぼ遺跡と高牧城跡遺跡の特徴

いせんぼ遺跡・高牧城跡遺跡は、共に縄文時代後期を主体とした遺跡であるが、町域の北部域とその隣接地域にあたる範囲に所在している。これを踏まえて、縄文時代を通じての町内遺跡の分布動態を見ると、早期は町域全体に分布するのに対して、前期から晩期までは北部域に集中し、晩期終末（弥生時代早期）になると平坦なシラス台地と河川下流域の多い町南部域に多くなる傾向が分かる。この理由としては当時の環境などが大きく起因しているのであろうが、当町域で見た場合に、早期末のアカホヤ降下火山灰に伴う火砕流分布との関係が注目される。つまり、この火砕流が確認されたのは、町南部域の牧遺跡（69－105）※4であり、その分布は串間市や志布志町安楽の河岸段丘上※5でも確認されており、志布志湾岸に集中している可能性が高いのである。そうであれば、町北部域は、志布志湾から比較的遠く、地形も山間部の様相を呈しているため、火砕流の進路が妨げられた可能性が考えられる。火砕流の到達範囲が前期以降の遺跡分布に影響を与えた可能性がある。今後、当町を含め、火砕流到達限界地域での確認がまたれる。

※１　牧原遺跡（東ほか2003）の調査中に川添氏と話す機会があり、出土状況などについてご教授いただいた。その時、磨石･敲石数点を追加寄贈していただいている。寄贈遺物は、当初、所在不明であったが、捜索の結果、倉庫Ａの通称「埋蔵文化財倉庫」奥に、プラッチック製の箱４箱に入れた状態で収蔵してあるのを確認した。この時に名札などは見られなかったが、以前の文化財担当者の証言と遺物の内容が一致したことからいせんぼ遺跡の遺物と判断している

※２　追加寄贈の遺物の一部を既刊行の報告書（東ほか2003）にて紹介している

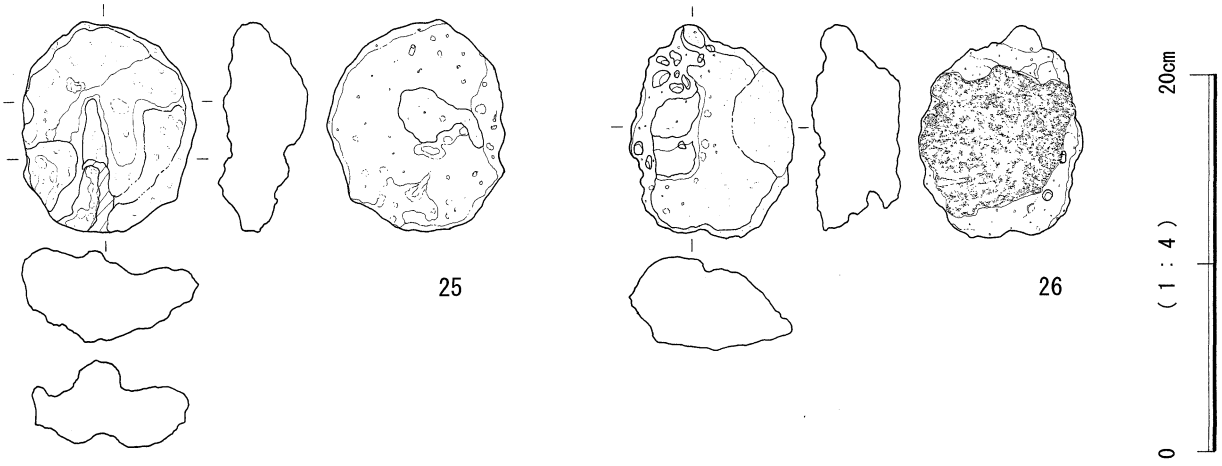
※３　周辺はすでに農業構造改善による耕地整備済みであり、旧地形は失われている

※４　出口ほか2005『牧遺跡第１・２次』有明町教育委員会を参照

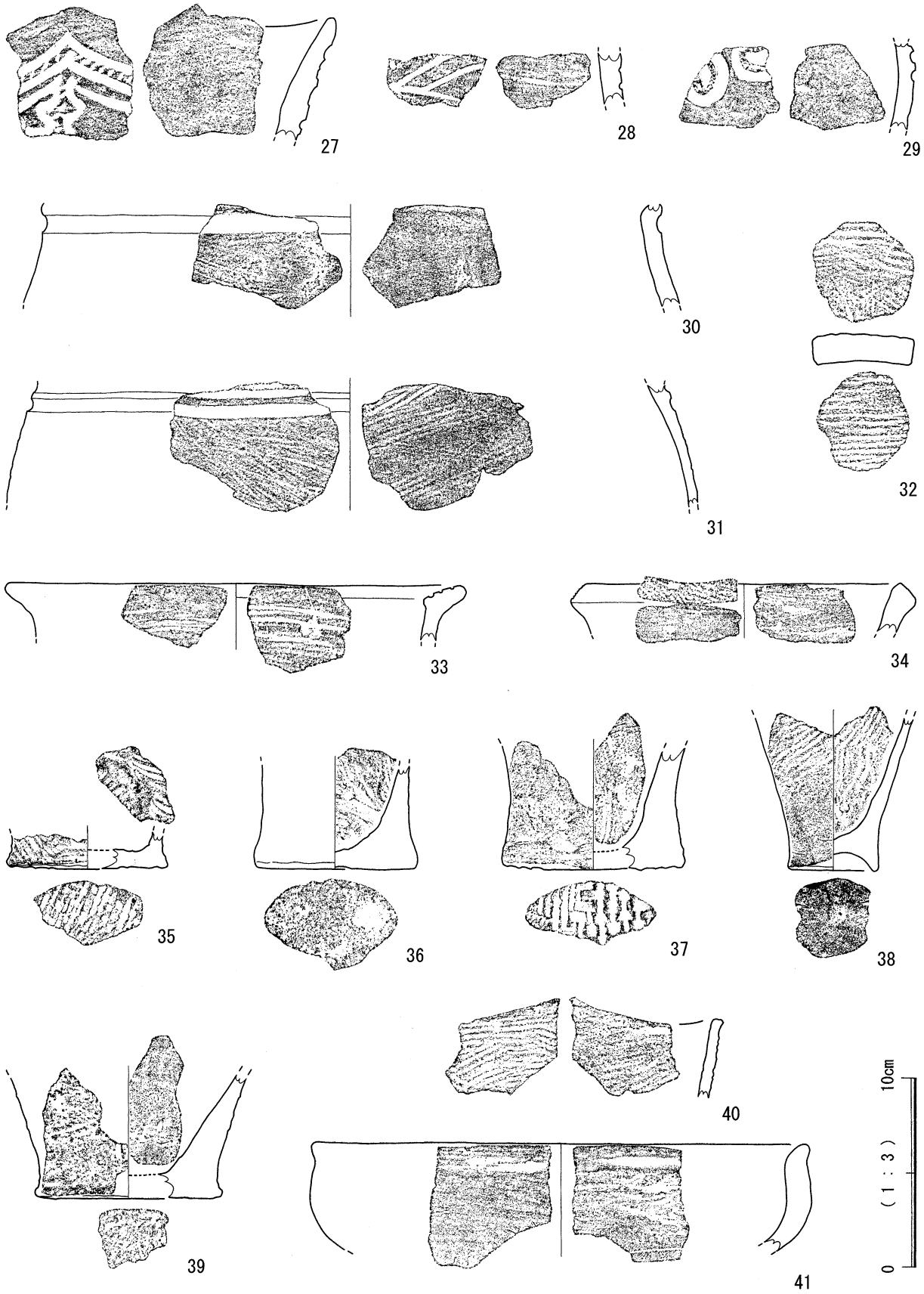
※５　志布志町安楽の旧鉄道道路脇の土木業者の廃土置場（河岸段丘の末端近く）にて、筆者が肉眼観察にて確認している。

表Ⅴ.02　いせんぼ遺跡　鉱滓の計測表

挿図番号	図番号	遺物番号	法量（最大値で計測、単位はmmとｇ）				備考
			長さ	幅	厚さ	重さ	
Ⅱ.05	25		10.9	9.2	4.3	707.27	椀形滓。表面に流動した痕跡
	26		10.9	8.3	4.6	577.28	椀形滓？裏面に細長い繊維の圧痕あり
	－	仮１	8.9	7.2	6.6	470.82	流動した痕跡あり
	－	仮２	7.6	5.9	5.2	248.72	破断面あり、１cm大の炭化物を含む
	－	仮３	6.6	5.3	3.2	162.44	
	－	仮４	5.8	5.0	3.7	92.04	
	－	仮５	5.2	4.9	3.0	82.90	
	－	仮６	4.8	3.8	3.3	58.61	破断面あり
	－	仮７	4.6	3.9	3.4	67.43	
	－	仮８	4.0	3.4	2.9	38.78	



図Ⅴ.05　いせんぼ遺跡　表採遺物（１）



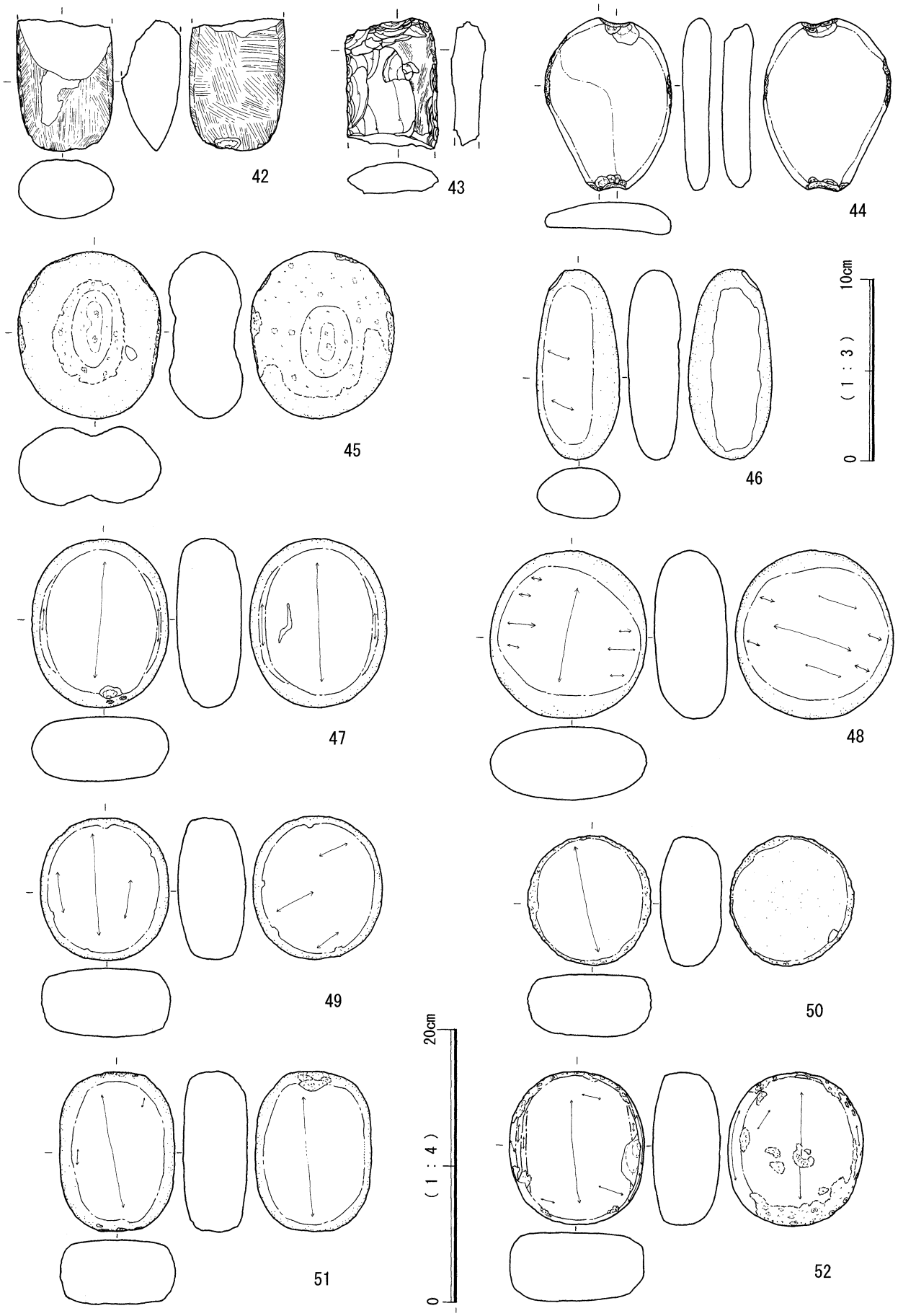
図Ⅴ.06　いせんぼ遺跡　表採遺物（2）

表Ⅴ.03　いせんぼ遺跡　土器の観察表

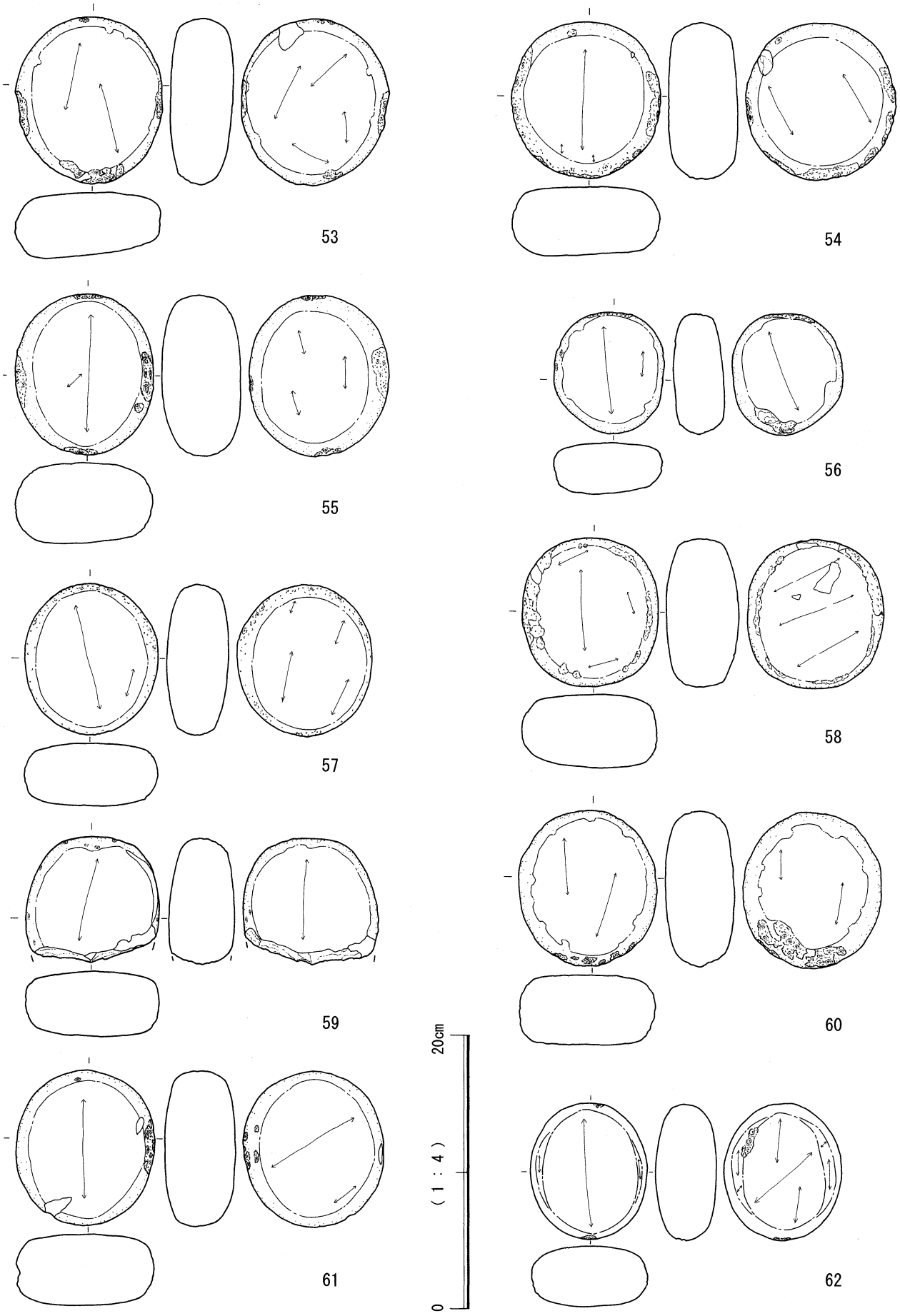
挿図番号	図番号	遺物番号	部位	色調 内面	色調 外面	調整・文様 内面	調整・文様 外面	胎土中の混和材（mm） 粒度	石英	長石	雲母	黒色砂	赤色砂	備考
Ⅱ 06	27	10	口縁	にぶい黄橙 10YR6/4		横のナデ	横のナデ後、やや太い沈線を数条、沈線文の間に貝殻腹縁の斜位の刺突	0.5	○	◎	○金	○	△	内外面がわずかに黒色化
	28	15	胴	にぶい褐 7.5YR5/4		貝殻条痕後、横のナデ	横のナデ後、やや太い沈線文	0.5	○	○	○金	○	◎	内外面がわずかに黒色化
	29	11	胴	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/3	横のナデ	横のナデ後、やや太い沈線を数条、沈線文の間に貝殻腹縁の刺突	0.5	○	○	◎金	○	○	内面がやや黒色化 外面がわずかに黒色化
	30	14	胴	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	ナデ	横の貝殻条痕後、太い沈線文	0.5	○	◎	○金	◎	○	外面が黒色化し、炭化物が付着
	31	13	胴	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	横の貝殻条痕後、横のナデ	横の貝殻条痕後、太い沈線文	0.5	○	○	◎金	○	△	外面が黒色化し、炭化物が付着
	32	12	胴	にぶい橙 7.5YR6/4		貝殻条痕後、弱いナデ	貝殻条痕後、弱いナデ	0.5	○	△	△金	△	-	外面の一部が極わずかに黒色化
	33	4	口縁	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3	横のナデ。口縁部がほぼ直角に外に折れる。口縁端部に２条の沈線文と円形刺突の列がある	工具ナデないし貝殻条痕後に、横のナデ	0.5	○	◎	◎金	△	△	外面と内面の口縁端部が黒色化
	34	1	口縁	明赤褐 5YR5/6		横のミガキを密に	口縁端部：縄文 口縁部：横のミガキを密に	0.5	△	△	△金	△	○	内面が赤色化し、円形剥離が見られる。外面がやや黒色化
	35	9	底	黒褐 2.5Y3/2	にぶい褐 7.5YR5/4	底部：縦ないし斜めの貝殻条痕 底面：貝殻条痕後、縁のみ横のナデ	底部：縦ないし斜めの貝殻条痕 底面：網代網の圧痕	0.5	△	△	△金	△	○	内面が黒色化 外面がやや黒色化
	36	7	底	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4	斜めの工具ナデ後、ナデ	底部：横のナデ 底面：ナデ	0.5	○	◎	△金	△	△	内面の一部が黒色化
	37	6	底	黒褐 2.5Y3/2	にぶい赤褐 5YR5/4	縦のナデ	底部：横のナデ。端部のみが左へのケズリ 底面：網代網の圧痕	0.5	◎	◎	○金	◎	△	内外面が赤色化 底面がわずかに黒色化
	38	5	底	黒褐 2.5Y3/2	明赤褐 5YR5/6	底部：斜位の貝殻条痕後、ナデ 底面：ナデ	底部：横のナデ。胴部近くは斜位の貝殻条痕後、ナデ 底面：ナデ	0.5	◎	◎	△金	△	△	内面が黒色化 外面が極わずかに黒色化
	39	8	底	にぶい褐 7.5YR5/4		横のナデ	底部：横の貝殻条痕後、横のナデ 底面：ナデないし木葉の圧痕	0.5	○	○	◎金	△	△	内面が黒色化 外面がやや黒色化
	40	2	口縁	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄 2.5Y6/4	横の貝殻条痕後、横のナデ	口唇部：横の貝殻条痕？後、横のナデ 口縁部：横の貝殻条痕	0.5	△	△	△黒	△	-	内面が黒色化 外面がやや黒色化
	41	3	口縁	にぶい褐 7.5YR5/4	黒褐 2.5Y3/2	左へのケズリ後、横のミガキを密に	左へのケズリ後、横のミガキを非常に密に	1	◎	◎	○金	○	-	内外面が黒色化

表Ⅴ.04　いせんぼ遺跡　石器の計測表

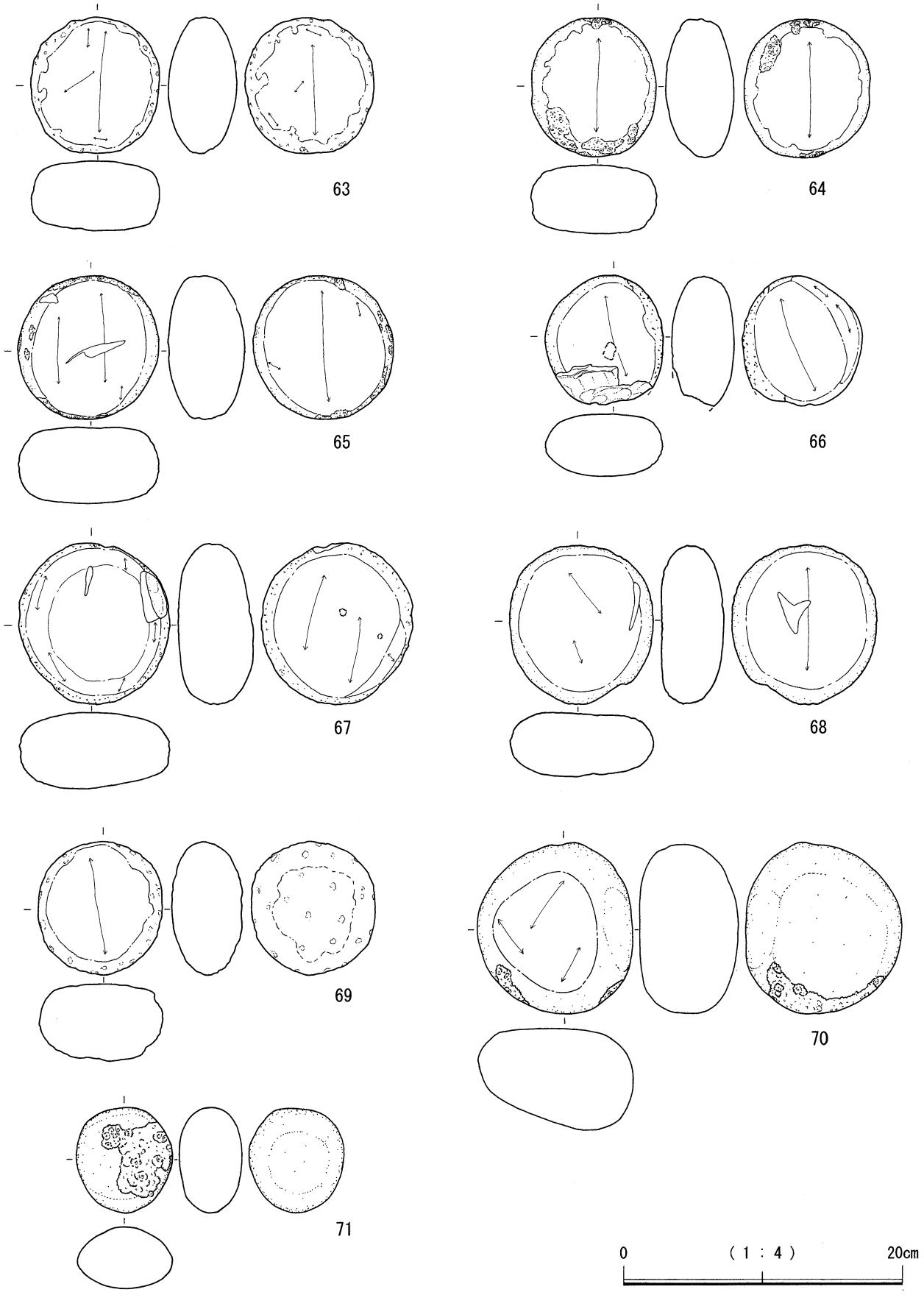
番号 報告	番号 註記	器種	石材	法量（最大値で計測、単位はmmと g、石皿についてはkg） 長さ	幅	厚さ	重さ	番号 報告	番号 註記	器種	石材	法量（最大値で計測、単位はmmと g、石皿についてはkg） 長さ	幅	厚さ	重さ
42	24	磨製石斧	堆積岩？	9.6	7.0	4.3	418.7	66	42	磨石・敲石	砂岩	9.2	8.5	4.5	476.3
43	26	打製石斧	頁岩	9.2	6.6	2.3	229.3	67	40	磨石・敲石	〃	11.6	10.9	5.4	956.5
44	25	石錘	砂岩	9.5	6.9	1.5	148.6	68	39	磨石・敲石	〃	11.5	10.3	4.5	809.0
45	23	凹石	〃	12.3	10.5	4.5	1069.1	69	30	磨石・敲石	花崗岩	9.7	9.0	5.1	672.2
46	43	磨石（棒状）	〃	14.0	6.1	3.7	479.8	70	60	磨石・敲石	砂岩	12.4	11.1	7.0	1441.9
47	20	磨石	硬質砂岩	12.4	10.1	4.7	915.7	71	61	磨石・敲石	〃	7.5	6.8	4.4	315.9
48	22	磨石	堆積岩？	12.4	11.4	5.3	1166.7	72	45	石皿	〃	36.6	33.9	8.1	12.5
49	28	磨石	花崗岩	10.5	9.5	5.0	835.6	73	48	石皿	凝灰岩	30.0	25.0	11.5	10.0
50	38	磨石・敲石	硬質砂岩	9.5	9.0	4.5	565.0	74	44	石皿	花崗岩	27.3	35.2	11.0	16.0
51	17	磨石・敲石	花崗岩	11.7	9.3	4.7	842.2	75	47	石皿	〃	21.7	22.3	10.0	7.0
52	18	磨石・敲石	砂岩	11.2	9.8	4.9	887.0	76	59	石皿	〃	22.6	16.8	9.3	6.0
53	29	磨石・敲石	花崗岩	12.2	10.7	4.6	952.7	77	51	石皿	〃	18.8	24.4	11.3	7.0
54	35	磨石・敲石	砂岩	11.5	10.9	4.9	975.3	78	52	石皿	〃	19.5	16.0	8.5	3.5
55	33	磨石・敲石	〃	11.8	10.1	5.8	1034.0	79	53	石皿	〃	21.9	22.6	9.3	5.5
56	32	磨石・敲石	花崗岩	8.9	8.0	3.7	422.8	80	57	石皿	砂岩	22.7	20.2	9.8	6.5
57	36	磨石・敲石	砂岩	11.1	9.8	4.5	709.4	81	58	石皿	花崗岩	25.5	15.9	7.5	4.5
58	21	磨石・敲石	〃	10.9	9.9	5.3	869.6	82	46	石皿	砂岩	32.2	24.3	9.8	13.0
59	41	磨石・敲石	〃	9.3	9.8	4.8	670.0	83	54	石皿	〃	22.3	25.5	10.5	10.5
60	27	磨石・敲石	花崗岩	11.4	10.0	5.0	956.5	84	50	石皿	凝灰岩	24.5	16.4	8.2	3.5
61	34	磨石・敲石	砂岩	11.4	10.2	5.2	801.5	85	49	石皿	花崗岩	16.6	23.3	6.8	3.0
62	37	磨石・敲石	硬質砂岩	9.4	8.5	4.4	542.9	86	56	石皿	〃	11.5	14.6	8.1	2.0
63	16	磨石・敲石	花崗岩	9.9	9.3	5.0	704.9	87	55	石皿	凝灰岩	15.8	19.3	8.2	3.5
64	31	磨石・敲石	〃	10.1	9.0	4.9	688.8								
65	19	磨石・敲石	砂岩	10.4	10.1	5.5	850.4								



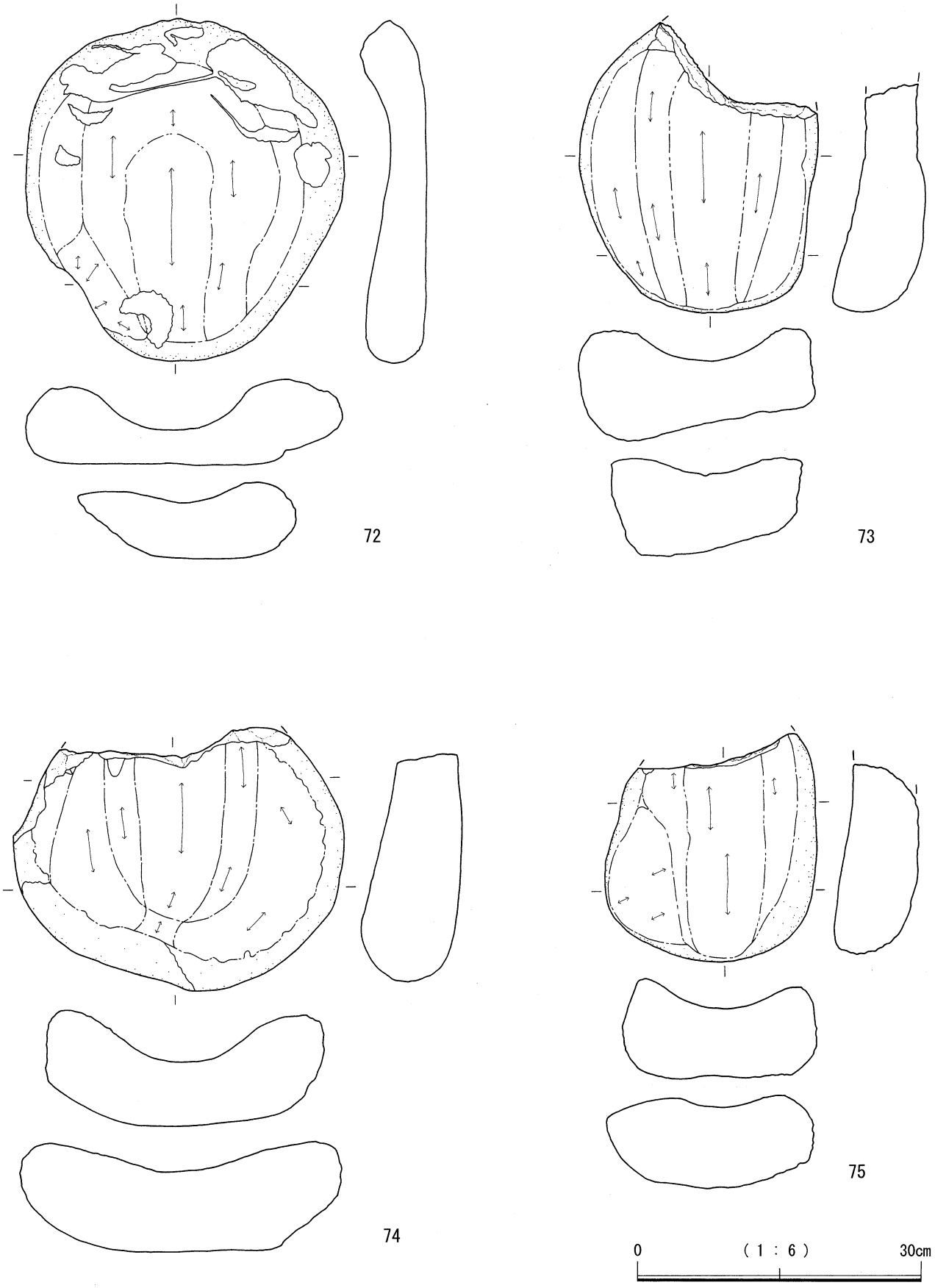
図Ⅴ.07　いせんぼ遺跡　表採遺物（3）



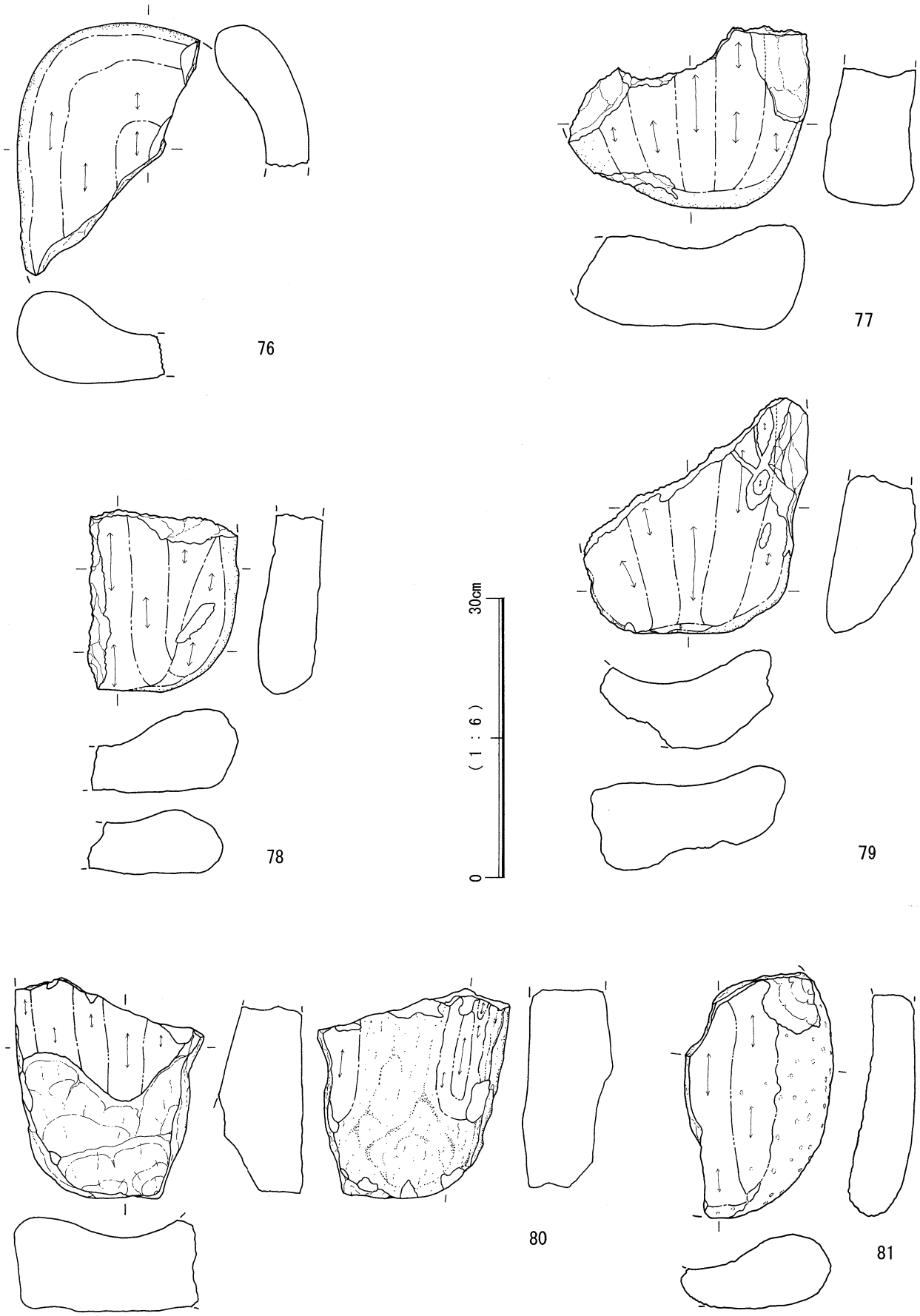
図Ⅴ.08　いせんぼ遺跡　表採遺物（4）



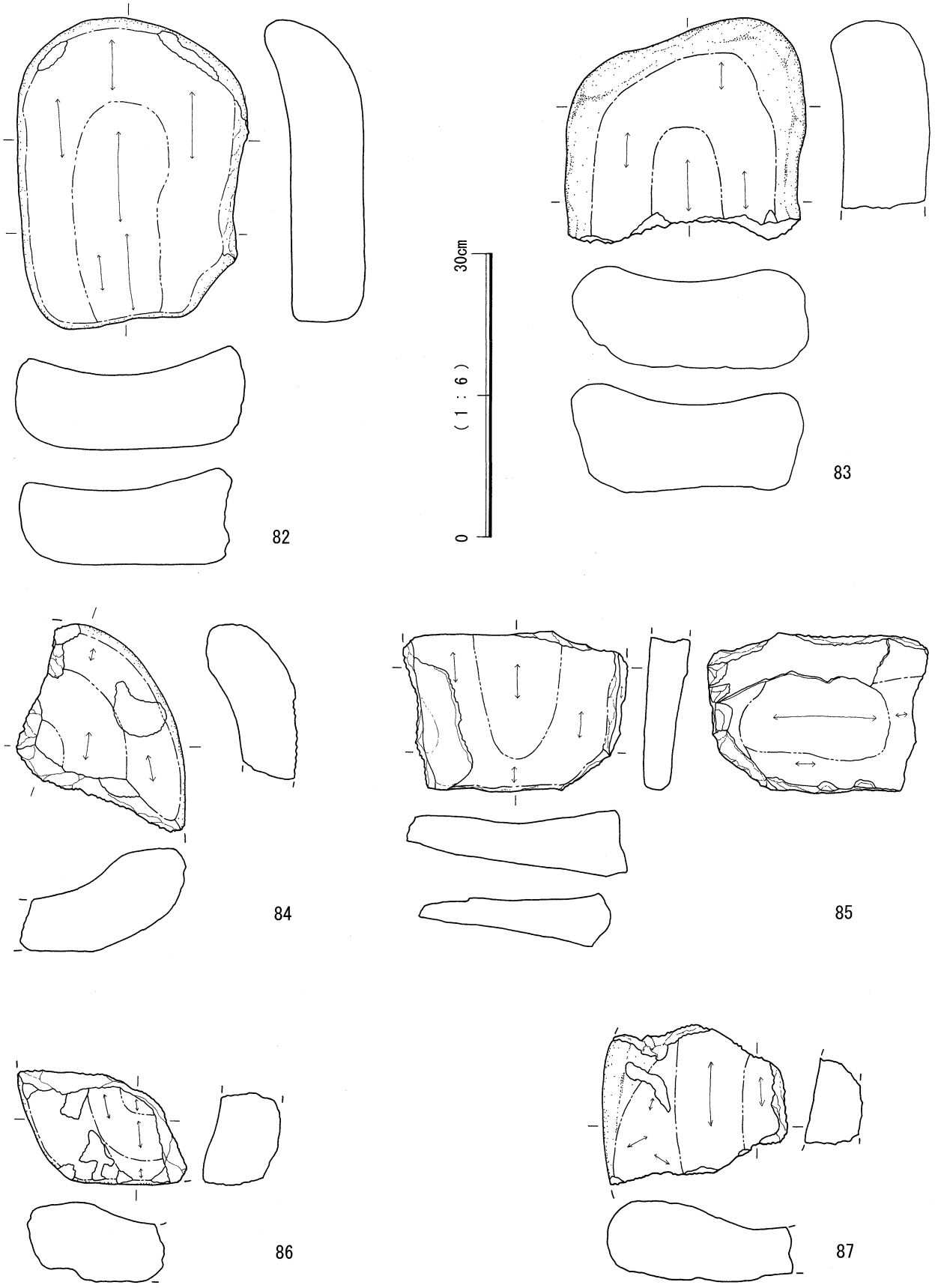
図Ⅴ.09　いせんぼ遺跡　表採遺物（5）



図Ⅴ.10　いせんぼ遺跡　表採遺物（6）



図Ⅴ.11　いせんぼ遺跡　表採遺物（7）



図Ⅴ.12　いせんぼ遺跡　表採遺物（8）

第３節　堂ノ上地点の表採資料

大型打製石斧６点が倉庫Ｂにダンボール箱に入れた状態で保管されていた。収蔵にいたる経緯などは不明で、名札はなく、遺物に直接記入が見られ、伊崎田校区牛ヶ迫集落付近の「堂ノ上」と呼ばれる範囲からおもに出土したことが分かる。採取地点は、周知の遺跡範囲外の可能性が考えられ、今後、現地確認などを経て遺跡として登録する必要があると考えられる。

遺物を観察するかぎり、使用に伴う剥離が少なく、99 ～ 101 などは薄くて実用的とは言いがたい。出土状況が不明であるが、一括出土しているのであれば祭祀に伴う埋納の可能性も考えられる。また、96 ～ 98 は使用痕跡が一部に見られて実用的であり、大型打製石斧は単に製作当初の原型を止めただけとの考え方もできる。当町を含めた大隅地域の菱田川流域では、大型打製石斧の出土例や打製石斧の一括出土例などが多い傾向がある※1 ことと合わせて、今後の検討が必要である。　（東）

表採遺物

大型打製石斧６点の石材はホルンフェルスで、隣接する志布志町に所在の前川・安楽川上流域に見られるホルンフェルスに類似している。96 だけは風化面の色調が黄褐色であるが、原礫の個体差によるものと考えられる。97 ～ 101 は接合こそしないものの、長さが 20 cm弱と共通性があることから、同じ原礫から剥ぎとられた可能性がある。ただし、99 は一部が欠損する。

形態は、96 が長さ 20 cmを超える大型品であり、長さ 20 cm以下の石斧２～６との間に差がある。また、素材についても 97 ～ 101 が横剥剥片を使用しているのに対して、96 は原礫面を残しており、その形状から礫素材である可能性が考えられる。この素材差が両者の厚さや形態差に反映しているものと考えられる。　（和田）

法量は以下のとおりである。

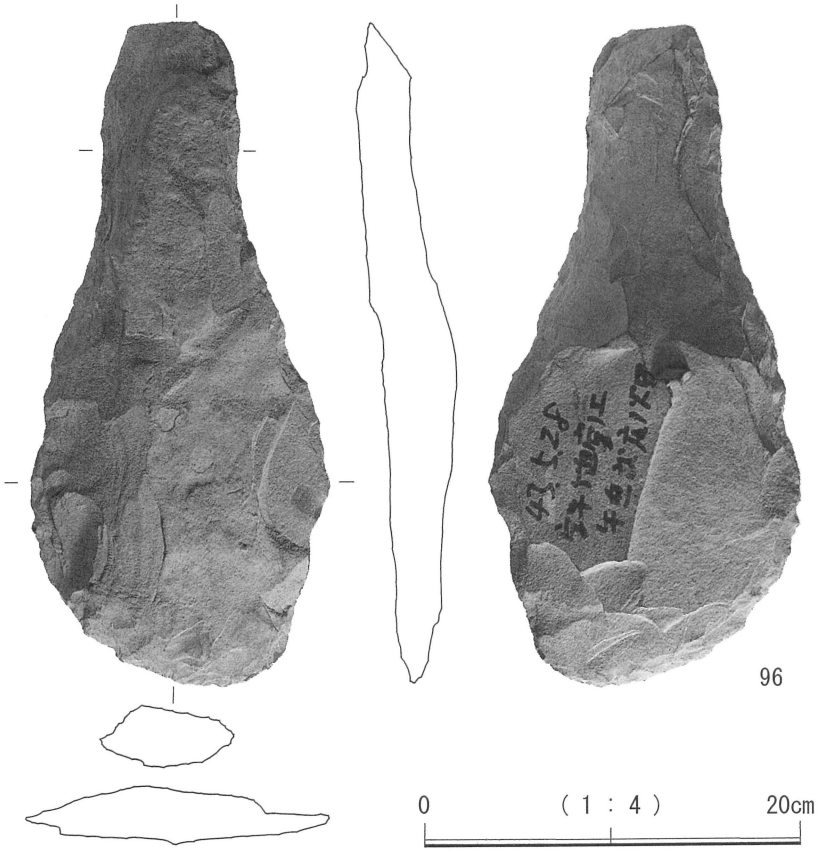
96 は長さ 34.6 cm × 幅 16.1 cm × 厚さ 3.9 cm、重さ 1859.3g を測る。97 は長さ 27.2 cm × 幅 13.5 cm × 厚さ 3.1 cm、重さ 1209.1g を測る。

98 は長さ 22.7 cm × 幅 14.1 cm × 厚さ 2.1 cm、重さ 808.6g を測る。

99 は長さ 20.2 cm × 幅 12.6 cm × 厚さ 0.9 cm、重さ 298.3g を測る。

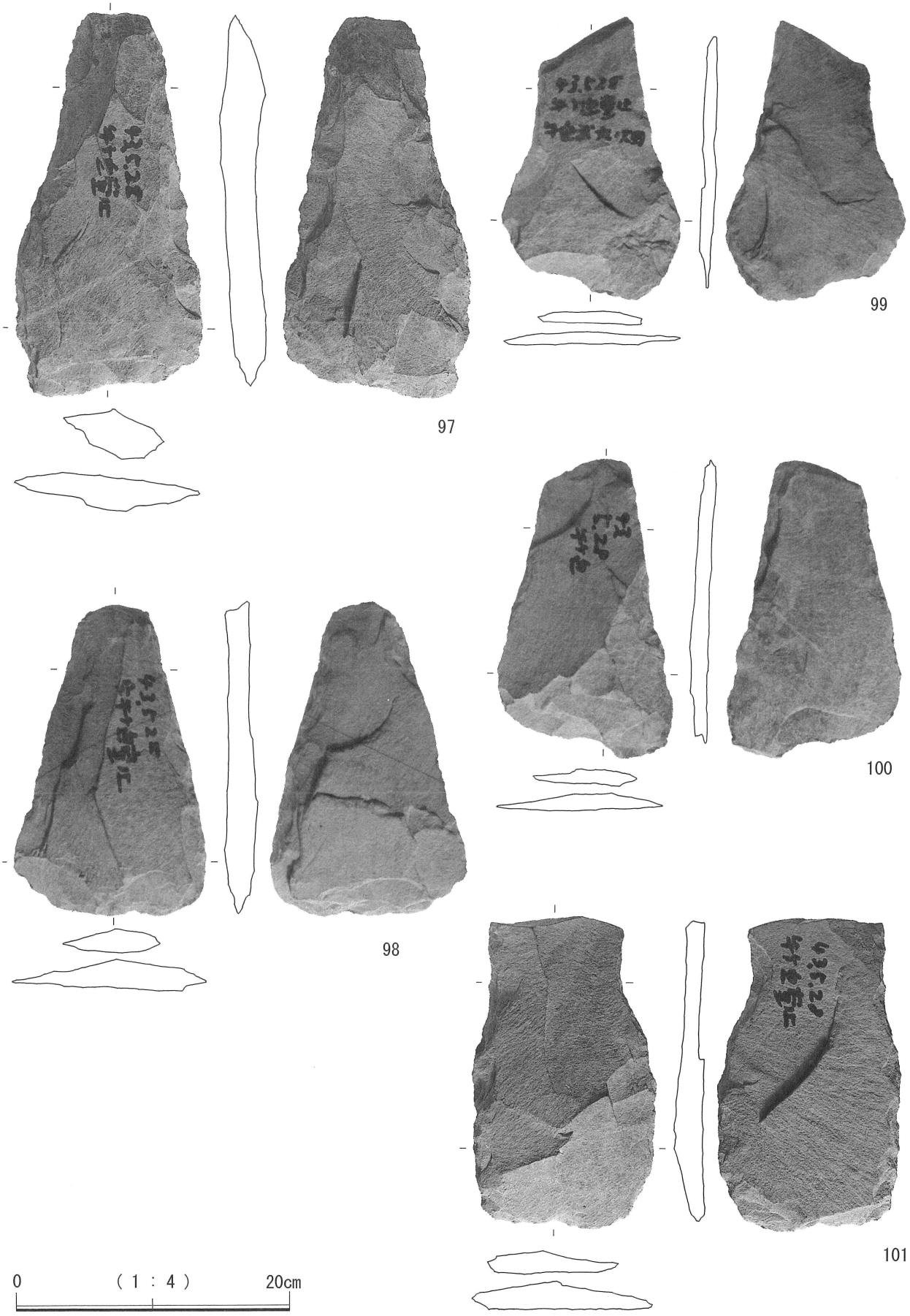
100 は長さ 21.3 cm × 幅 12.2 cm × 厚さ 1.3 cm、重さ 375.71g を測る。

101 は長さ 22.5 cm × 幅 13.0 cm × 厚さ 2.0 cm、重さ 808.72g を測る。



図Ⅴ.13　堂ノ上地点　表採遺物（１）

※１　鹿児島県立埋蔵文化財センター調査課 長野真一氏・中村耕治氏・池畑耕一氏よりご教授いただいた



図Ⅴ.14　堂ノ上地点　表採遺物（2）

第４節　水頭地域の表採資料

倉庫Ｂにダンボール箱に入れた状態で保管されていた。収蔵にいたる経緯などは不明である。名札は虫食い状態であったが、羽口 90 の名札に「…年月日●. 47. 7. 7.（改行）…飯山（改行）…養魚場（改行）…善則」と記入があった。このことから野井倉の飯山集落にある製鉄伝承地である字「水頭」地域より、採取したものと考えられる。倉庫Ａにあった土器 88・打製石斧 89 にも、88 の裏「飯山 水頭 伊集院氏」、89 の表「1969 年. 3 月 17 日」・裏「野井倉字.水頭にて・湯叉」の註記が見られる。

現地は、遺跡の範囲としては未登録であり、以前から鰻の養殖場が稼動している。建設前の地図を見ると大きな侵食谷の下方に貯水池と思われる池が記載してあり、谷を下ると菱田川がある。鉱滓に苔や藻などが付着していたことから、採取地点の一部はこの池もしくは沢付近と考えられる。周知の遺跡範囲外であることから、今後、現地の調査を行い、新たに遺跡とする必要が考えられる。

表採遺物

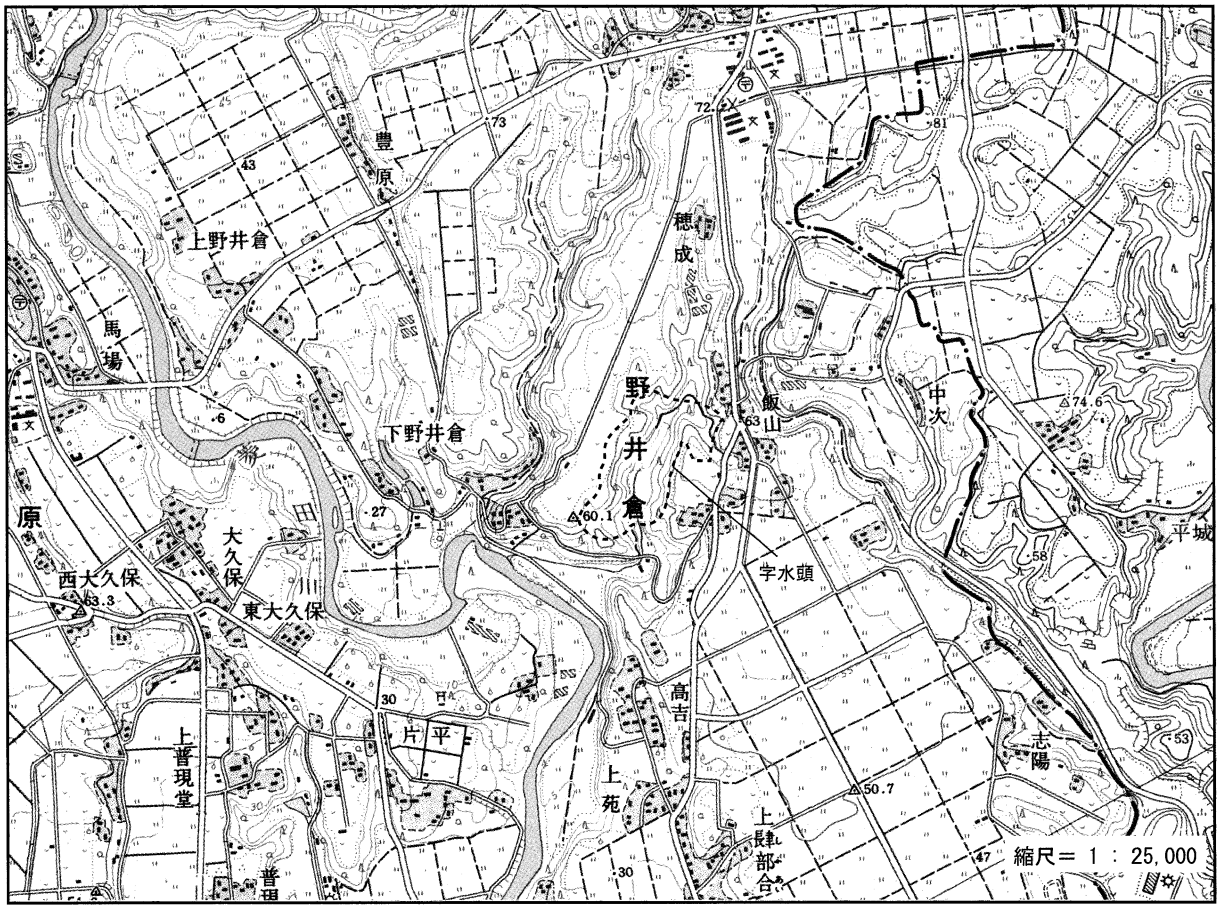
遺物は、土器１点・打製石斧１点・羽口３点・鉱滓３点・石材２点がある。

土器 88 は５cm大の土器片である。色調は内面がにぶい赤褐（5YR5/3）、外面が橙（5YR6/6）色を呈する。器面は、内面が横のナデ、外面がおもに横の貝殻条痕文が施される。胎土に含まれる混和材は長石･石英･金色雲母･黒色砂･赤色砂が見られる。粒度は２mm大以下である。形式は縄文前期の曽畑式であろうか。

打製石斧 89 は、長さ 13.5 cm×幅 4.9 cm×厚さ 1.6 cm、重さ 169.1 g を測る。剥片を加工しており、部分的に磨きを施している。刃部には使用に伴う剥離が見られる。

羽口はいずれも土製で､90 のみがほぼ完形である。羽口 90 と他の羽口 91･92 とは形態などが異なり、後者は器面調整の痕も身られず、やや大きい。また、いずれも内面は、径がほぼ一定で調整痕が見られないことから、何らかの芯棒を用いて成形したものと考えられる。

羽口 90 の形態は、後端部がラッパ状に開いている。法量は長さ 19.7 cm×直径 7.0 cm、孔径 3.4 cm、重さ 984.6 g を測る。先端部から真ん中あたりまで径がやや小さくなる。外面と内面には成形時の指頭



図Ⅴ.15　水頭地域の位置

痕が多く見られる。ラッパ状の後端部には一部窪んだ箇所も見られる。外面の先端部には溶滓が付着しており色調が暗青灰 5B3/1 色を呈する。他の色調は先端部から中央部付近までが緑灰 5G5/1 色で、残りの外面と内面が橙 5YR6/6 色を呈する。胎土中の混和材は 1 ㎜以下で、長石・黒色砂・赤色砂・石英・金色雲母などが見られる。

羽口 91 は、先端部が半分に後端部が欠損する。法量は長さ 10.7 ㎝×直径 7.8 ㎝、孔径 3.3 ㎝、重さ 503.4 g を測る。外面の先端部に溶滓が付着しており色調が青黒 5B1.7/1 色を呈して光沢をもっている。溶滓の縁は 3 ～ 10 ㎜程盛り上がる。この外側の縁は青灰 10BG 色を、それ以外の外面と内面はおもににぶい橙 7.5YR6/4 色を呈する。胎土中の混和材は 1 ㎜以下で、石英・長石・黒色砂・赤色砂・金色雲母などが見られる。

羽口 92 は、欠損が激しく、法量が長さ 7.8 ㎝×直径 8.9 ㎝、孔径 3.3 ㎝、重さ 470.2 g を測る。わずかに溶滓の付着の範囲が残っている。色調・胎土は 91 に類似する。

鉱滓はいずれも磁石※1に反応がなく鉄分がないもしくは少ないものと考えられる。

鉱滓 93 は、長さ 16.9 ㎝×幅 9.6 ㎝×厚さ 6.9 ㎝、重さ 858.6 g を測る。裏面には多量の小礫が付着しており、重量も軽いことから、流出した鉱滓の可能性が考えられる。

鉱滓 94 は、長さ 12.4 ㎝×幅 11.7 ㎝×厚さ 9.2 ㎝、重さ 711.0 g を測る。裏面は土製で、植物繊維の痕跡と 1 ㎝大以上の小礫が見られる。鉱滓の付着した炉壁の一部である可能性が考えられる。

鉱滓 95 は、長さ 21.5 ㎝×幅 11.7 ㎝×厚さ 10.8 ㎝、重さ 1654.7 g を測る。裏面には植物繊維の痕跡が見られる。重量も他に比べて重い。椀形滓の破砕品と考えられる。

補足）有明町内の製鉄跡について

有明町内における製鉄跡もしくはそれに関するものについては、いくつかの文献に記述が見られる。以下、簡単に紹介する。

文献 1：『有明町誌』（有明町郷土史編さん委員会 1980）　3 ヵ所の記述があり、①野井倉 牧之内の「カナクソ谷はその鍛冶の跡だという」、②野井倉 飯山の「木炭粉と鉄滓が一つの層をなしている」、「鍛冶屋の送風管なども発見された」、③野神 針山の「この付近に“金糞段”と称するところは、鉄滓が多く出土している」とある。

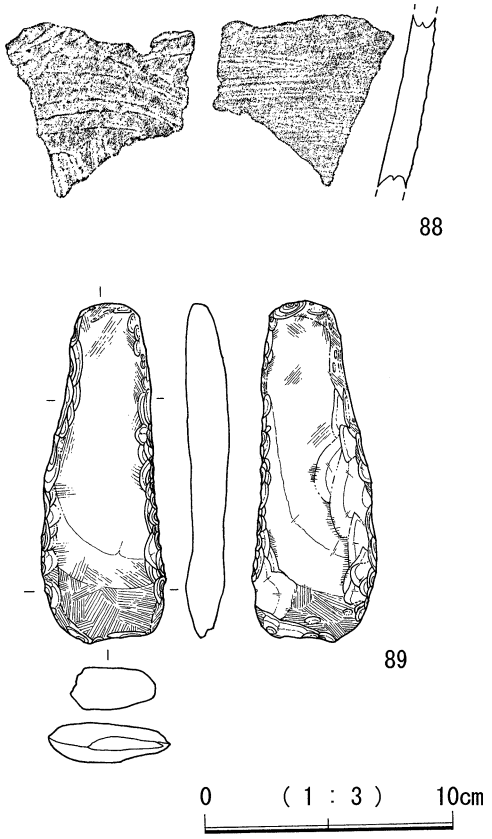
文献 2：『有明町の文化財第 6 集－伝説－』（有明町文化財審議委員会 1982）　1 ヵ所の記述あり、①野井倉 牧之内に「かなくそ谷の湧水」、②野井倉 牧之内は「牧之内部落と牧場」、「小松には「かじ屋」があって製鉄遺跡として「かなくそ谷が残っており、なお、川をへだてて救仁郷の根拠地であった蓬原城に対していたと伝えられる。」とある。なお、現在の牧之内と小松は、金糞谷と呼ばれた谷を挟んで隣接している。

文献 3：『有明町の文化財第 11 集－祭りと講－』（有明町文化財審議委員会 1989）　1 ヵ所の記述あり、①野神 曲※2の「てっさい講（鉄滓講？）」が昔あったが、詳細は不明である。「鉄滓の出土する地が町内に五箇所あるが、曲集落もその内の一つである。」とある。

文献 4：『有明町の文化財第 13 集－有明町の地名－』（有明町文化財審議委員会 1992）　3 ヵ所の記述があり、①野井倉－金糞谷（かなくそだん）、②野神－金糞段（かなくそだん）、③山重－細工谷（せっのたん）、ただし③は「堰」に関するものの可能性も指摘されている。

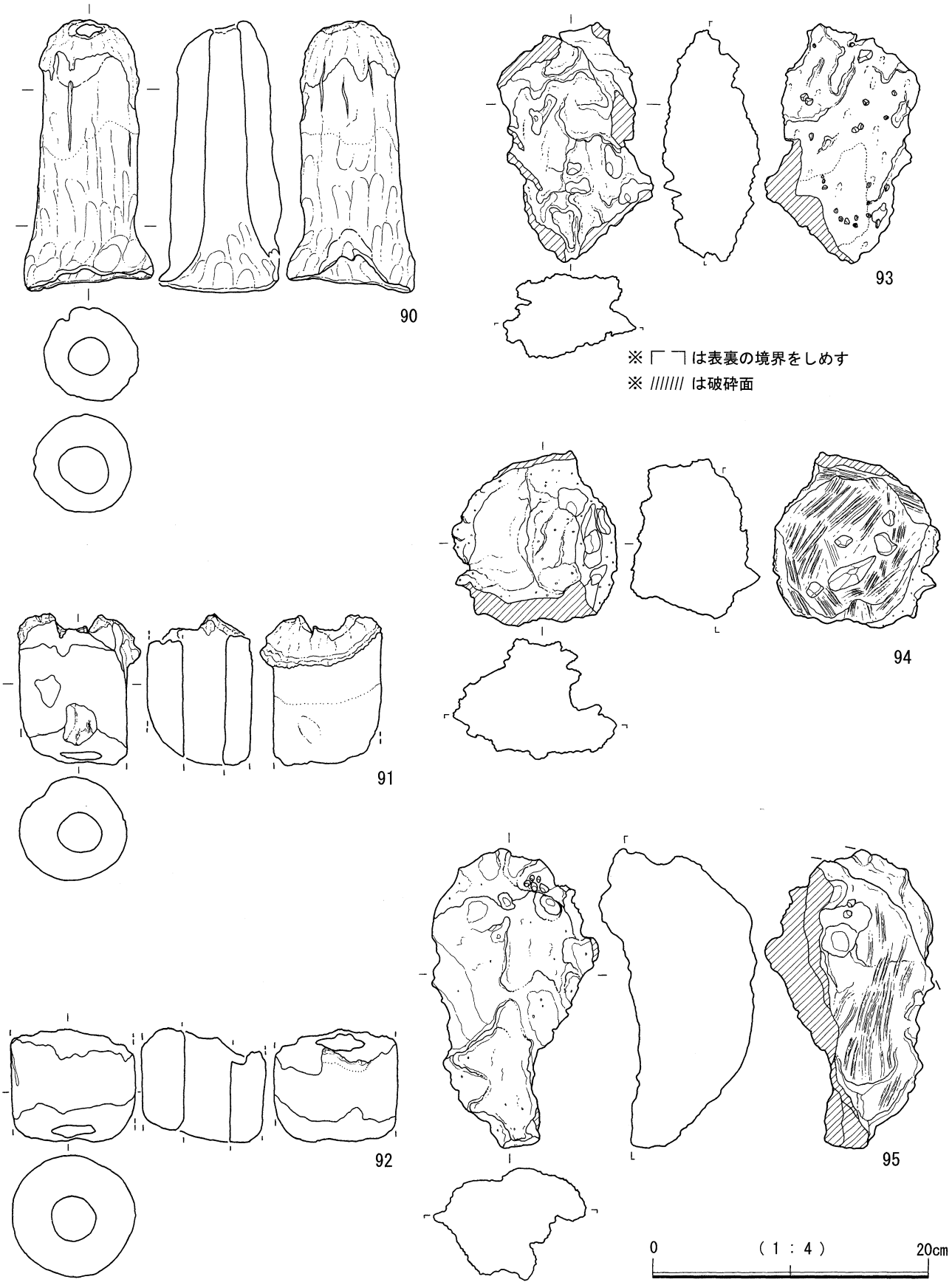
発掘調査などでの羽口・鉄滓の出土例　①仕明遺跡（66）の確認で羽口 1 点、②仕明遺跡の 1 ～ 3 次で鉱滓 2 点以上、楠原遺跡（116）で 5 点、いせんぼ遺跡（16）の表採資料に鉱滓 10 点が含まれている。それ以外でも、菱田流域の仮屋頭遺跡（18）で多量の鉄滓が表採として採取されており、製鉄跡と考えられている（牛ノ浜ほか 1985）。

まとめにかえて　以上のように、町内に製鉄跡に関する可能性のある地点は複数ある。その中でも可能性が高いものは、菱田川流域の仮屋頭遺跡（18）・「野井倉 牧之内の金糞谷」・「野井倉 飯山の水頭」、「田原川上流の野神 針山の金糞段」などが挙げられる。いずれも時期は不明である。しかし、「野井倉 牧之内の金糞谷」に関係して「救仁郷の根拠地であった蓬原城に対していたと伝えられる」と伝承があり、中世にまで遡る可能性がある。



図Ⅴ.16　水頭地域　表採遺物（1）

※1　教材用磁石を使用
※2　大字は野神であるが、地域は山重である



図Ⅴ.17　水頭地域　表採遺物（2）

第５節　その他の資料

今年度に寄贈のあった土器２点について紹介する。

１．土器Ⅴ.102

蓬原校区の中川尚樹氏より土器の底部片を寄贈頂いている。出土地は蓬原小学校裏手の坂道の土手であるとのことである（図Ⅴ.18)。地点は周知の遺跡外であり、シラス台地と河岸段丘の境の斜面部にあたる。

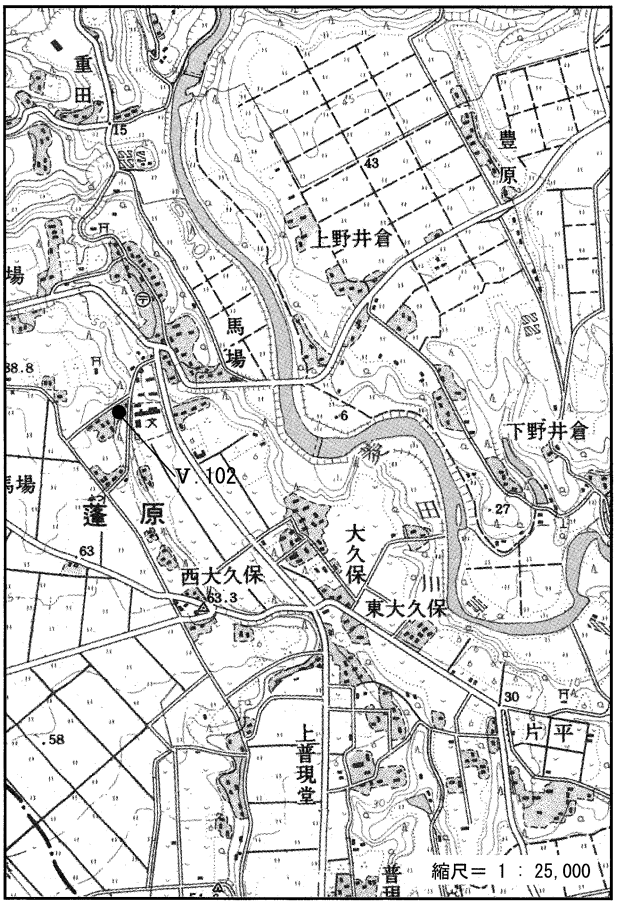
土器102は、胴部外面に山形の貝殻条痕文を施文し、底部と底面の境にキザミを施している。出土地点は、従来遺跡外とされることの多いシラス台地堆積面と河岸段丘面との境であるが、今後注意が必要である。時期は縄文時代早期ないし前期頃であろうか。型式は不明である。

２．土器Ⅴ.103

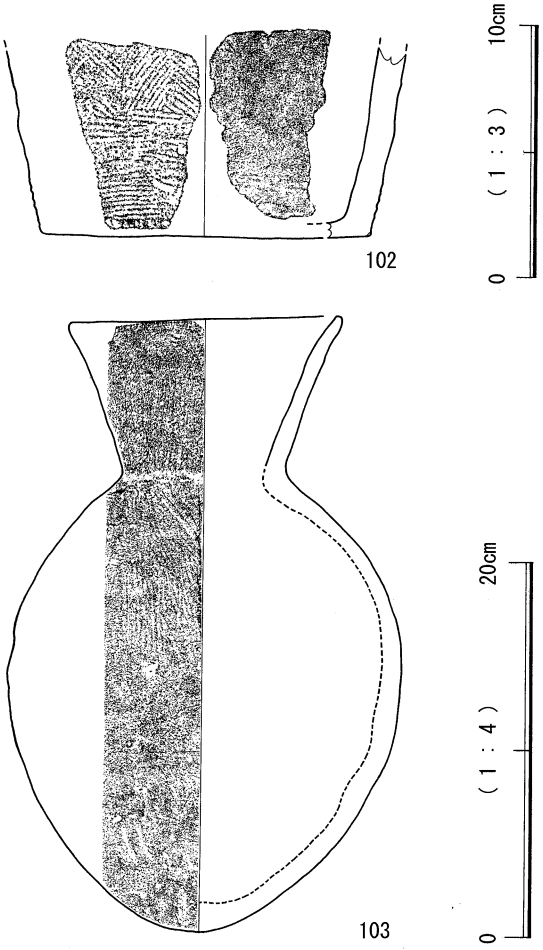
伊崎田校区の鍋集落 徳重時丸氏より土器１点を寄贈して頂いている。土器は以前に友人の重水悟氏※1から預かったものであり、蓬原校区の有明健康ランド蓬ノ郷南側に広がる水田付近（図Ⅴ.20)で砂取りを行った際に発見したものではないかと言うことであった。出土状況などは不明であるが、徳重氏は完形の土器が数個体出土していたと聞かれている。推定される出土地点は周知の遺跡の範囲外にあたる。

土器103は、口縁が一部欠損する以外は破損が見られず、ほぼ完形の壷である。内外面の器面調整にはハケメが多く見られる。器面には鉄分･マンガンが多く付着し、やや赤色化している。胴部下半には大きな円形剥離が見られる。形式は弥生時代中期の中津野式と呼ばれるものと考えられる。

出土地と考えられる範囲は、蓬ノ郷には湧水を水源とした普現堂池と呼ばれる池が古くからあり、



図Ⅴ.18　土器102の出土地点



図Ⅴ.19　2005年度の寄贈遺物

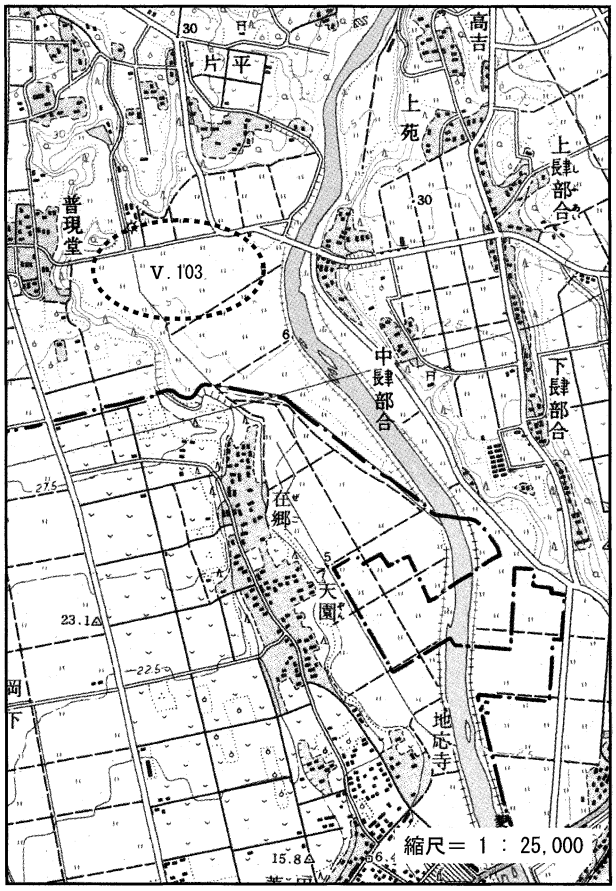
小字にも「中牟田」・「稗田」・「池田」などの名称が見られる。また、明治39年頃までは菱田川が大きく蛇行しており、付近は河川流域にあたる。土器103は、鉄分・マンガンの付着状況から恒常的に水分を含んだ土壌に埋まっていたと考えられ、話と符合する。

これらのことに完形の土器が複数出土していることを合わせると、関西の低湿地遺跡などで見られる水辺の祭祀遺構の可能性が考えられる。有明町内の低地では遺跡が確認されていないが、今後、発見される可能性が高いと考えられる。

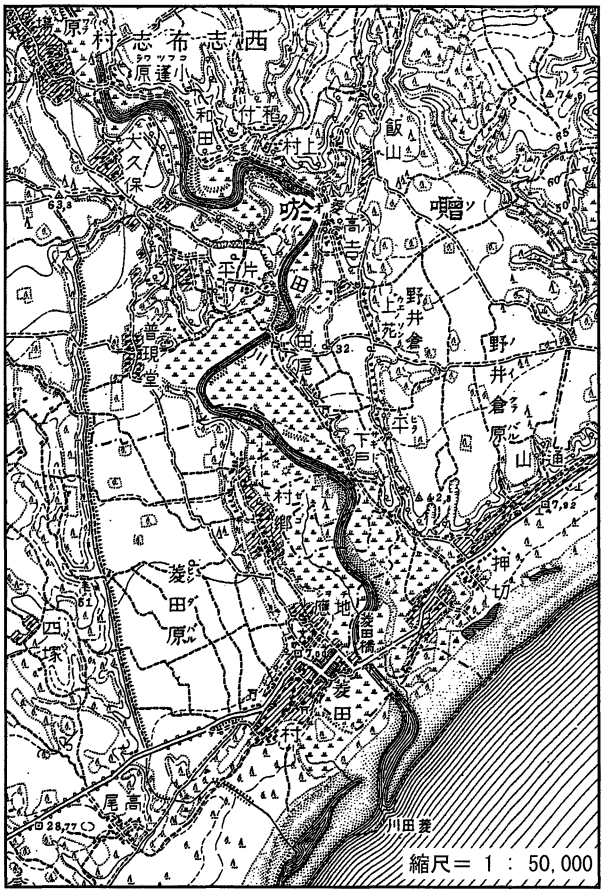
※1　故人である

表Ⅴ.05　土器の観察表

挿図番号	図番号	遺物番号	部位	色調		調整・文様		胎土中の混和材（mm）						備考
				内面	外面	内面	外面	粒度	石英	長石	雲母	黒色砂	赤色砂	
Ⅴ.19	102		底	褐灰 5Y4/1	にぶい褐 7.5YR5/4	胴部：縦のナデ 底部：横のナデ	胴部：山形の貝殻条痕 底部：横の貝殻条痕，角にキザミ	1	○	○	△金	○	△	
	103		完形	にぶい橙 5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	口縁部：横のナデ	口縁部：横のナデ 頸～胴部上半：縦のハケメ 胴部下半：ナデ？	3	△	◎	△金	○	△	外面が鉄分・マンガンの付着により赤色化



図Ⅴ.20　土器103推定出土位置



図Ⅴ.21　明治39年頃の周辺地形

あとがきにかえて

丸岡Ａ遺跡の参加者一同

報告書作成の参加者一同

有明町最後の埋蔵文化財発掘調査報告書となりました。作成は合併や閉町業務の中での作業となり、十分な内容とは言えません。しかし、私達の住む有明にも、すばらしい文化･歴史･文化財が存在することを少しでも知ってもらおうと考えて作業を進めました。本書を始めこれまでの有明町での調査成果が、今後志布志市において活かされることを心より祈っております。

最後となりますが、有明町で作業を始めてから今日まで多くの方々に協力を頂きました。心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

（黒川　晃・中水　忍・東　徹志）

図　　版

図版１　丸岡Ａ遺跡　空中写真

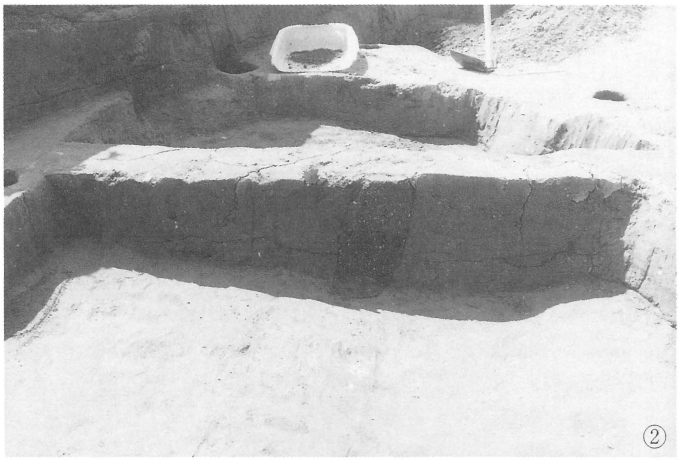
空中写真
※国土画像　国土交通省より
昭和 49 年撮影

調査地遠望

図版２　丸岡Ａ遺跡　遺構（１）

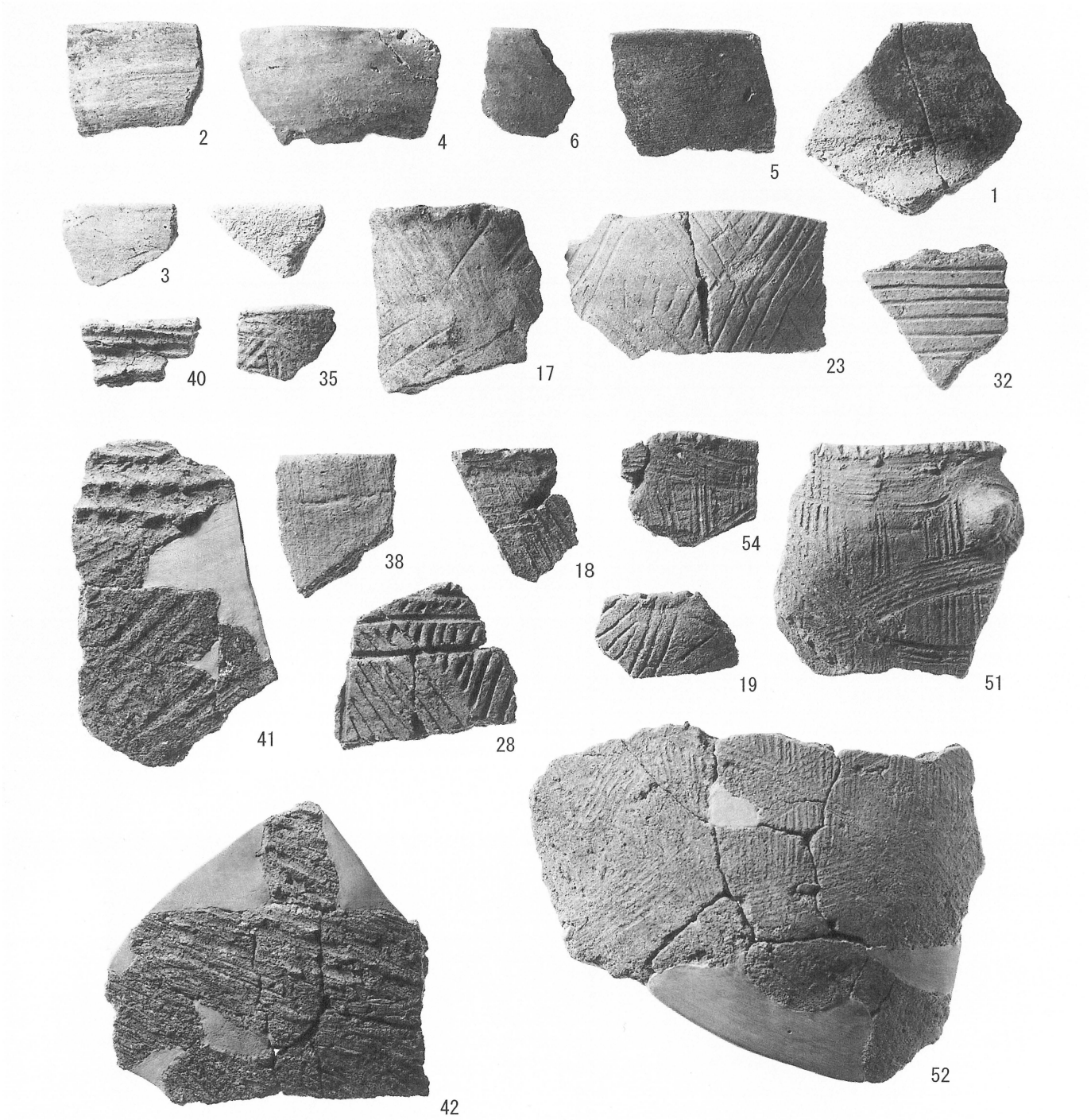
竪穴状土坑及び柱穴１～３　完掘状況

集石遺構１

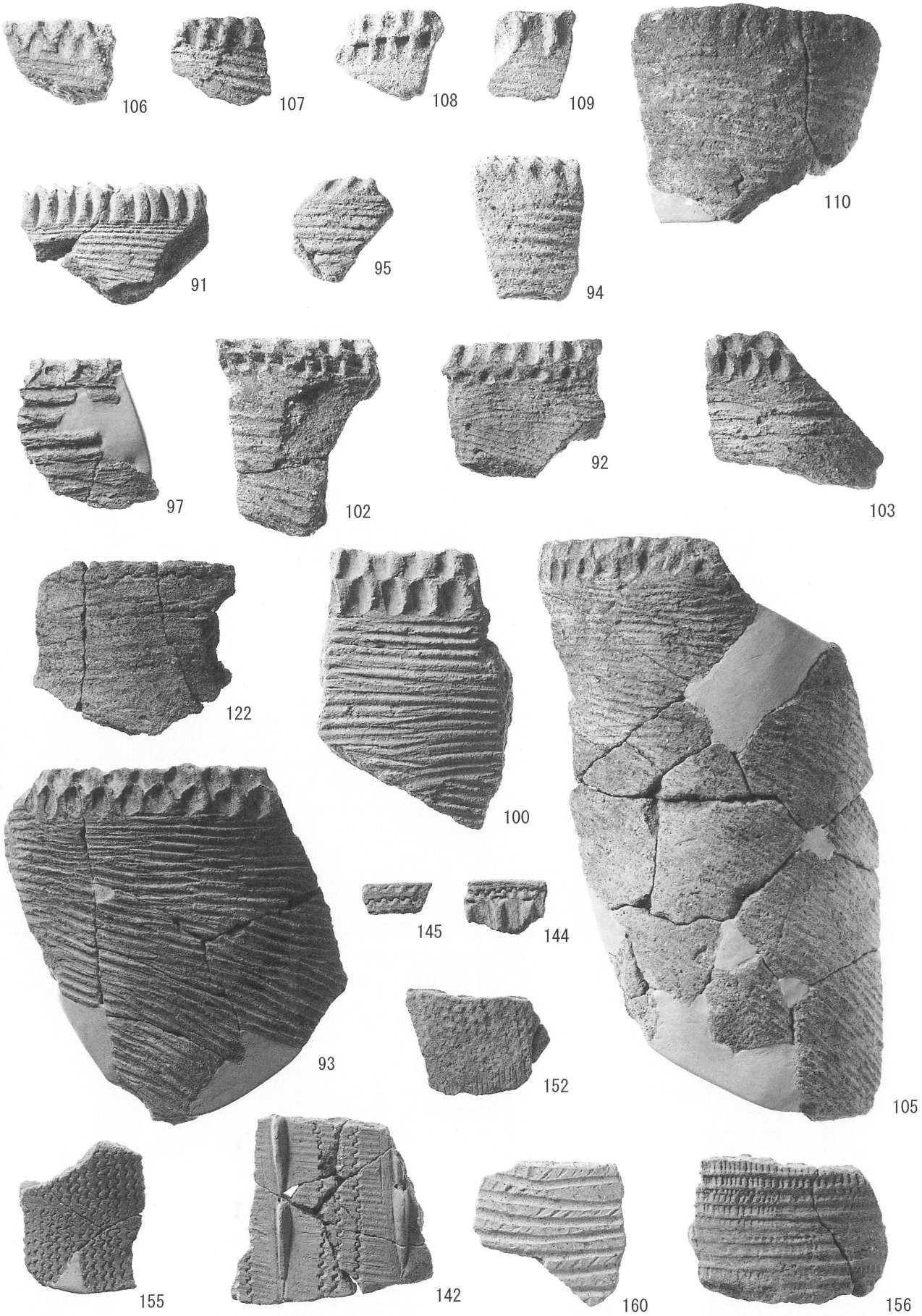


①竪穴状遺構の底面検出状況　②竪穴状遺構の土層断面　③竪穴状遺構の付近調査区断面　④竪穴状遺構の横調査区断面

図版４　丸岡Ａ遺跡　土器（１）

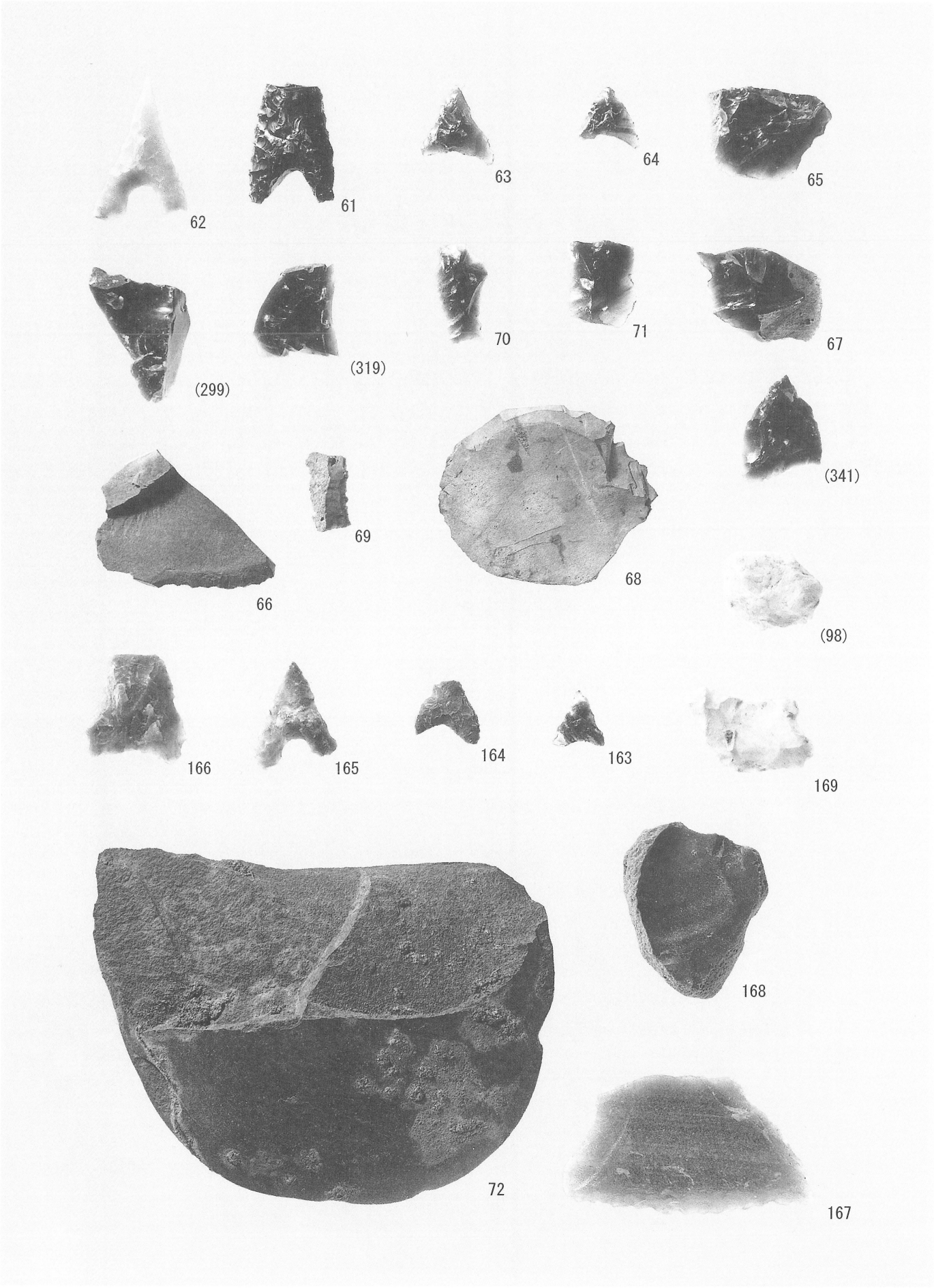


Ⅲ・Ⅳ層　出土土器

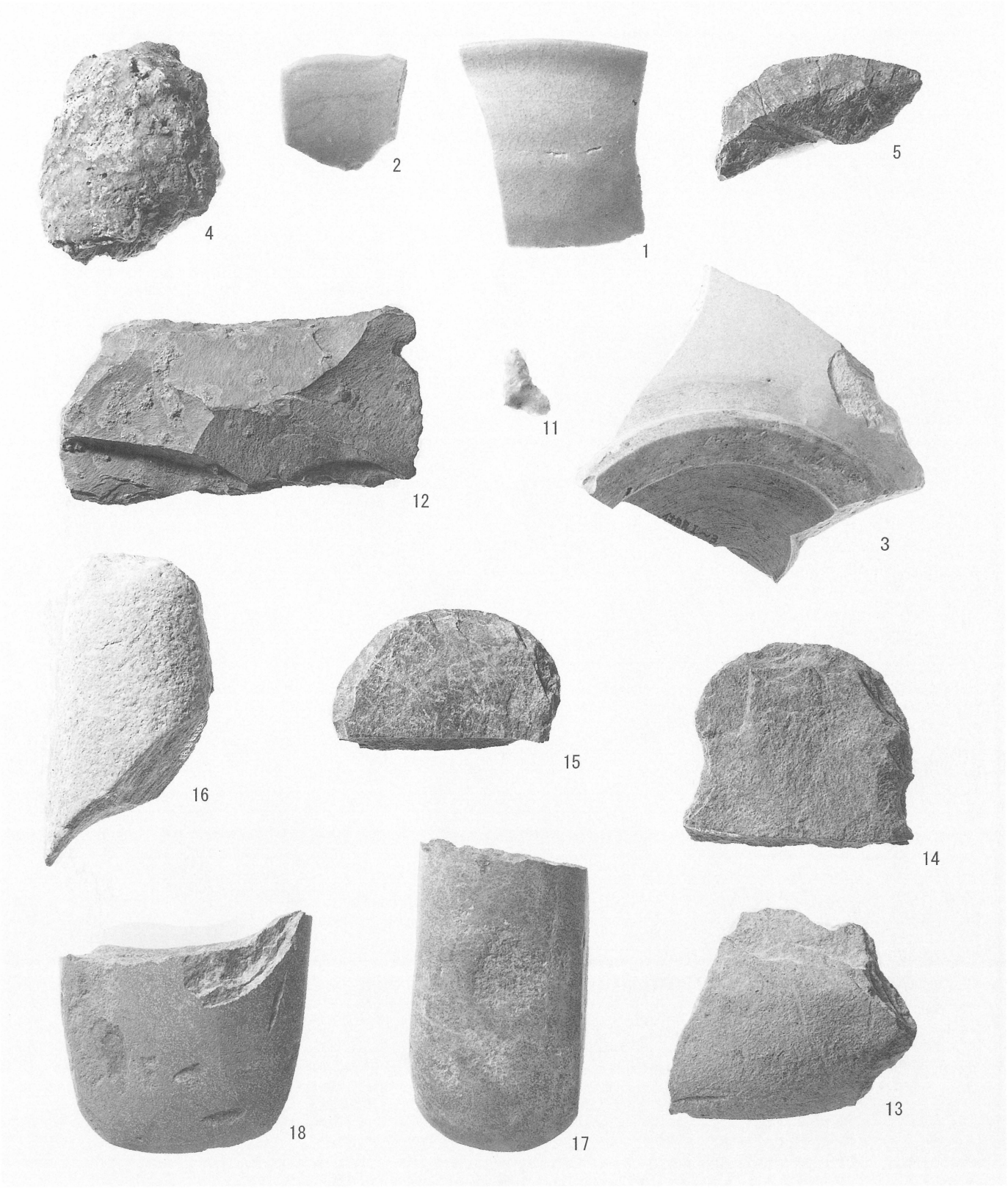

106
107
108
109
110
91
95
94
97
102
92
103
122
100
93
145
144
152
105
155
142
160
156

Ⅵ層　出土土器

図版６　丸岡Ａ遺跡　石器

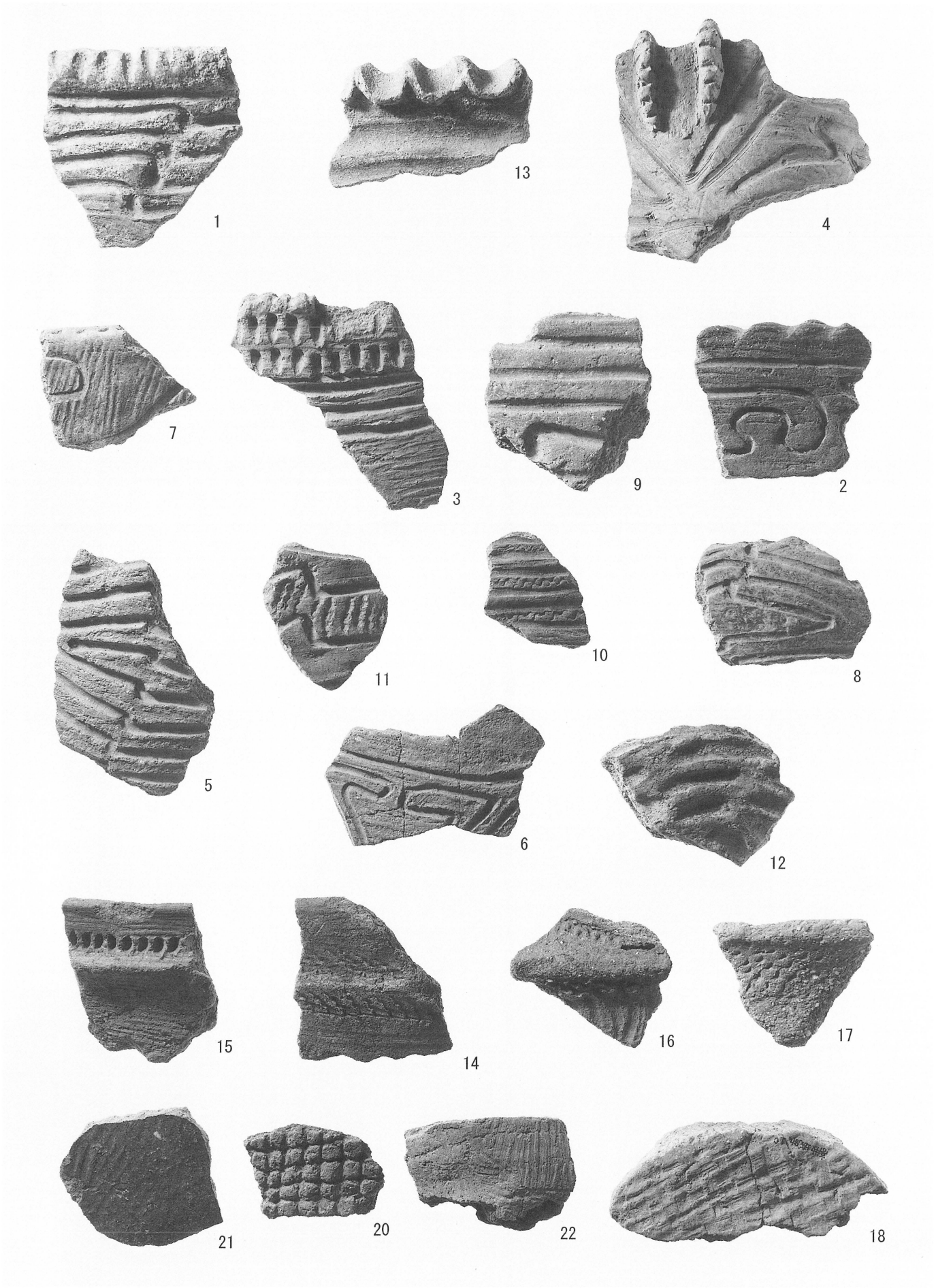


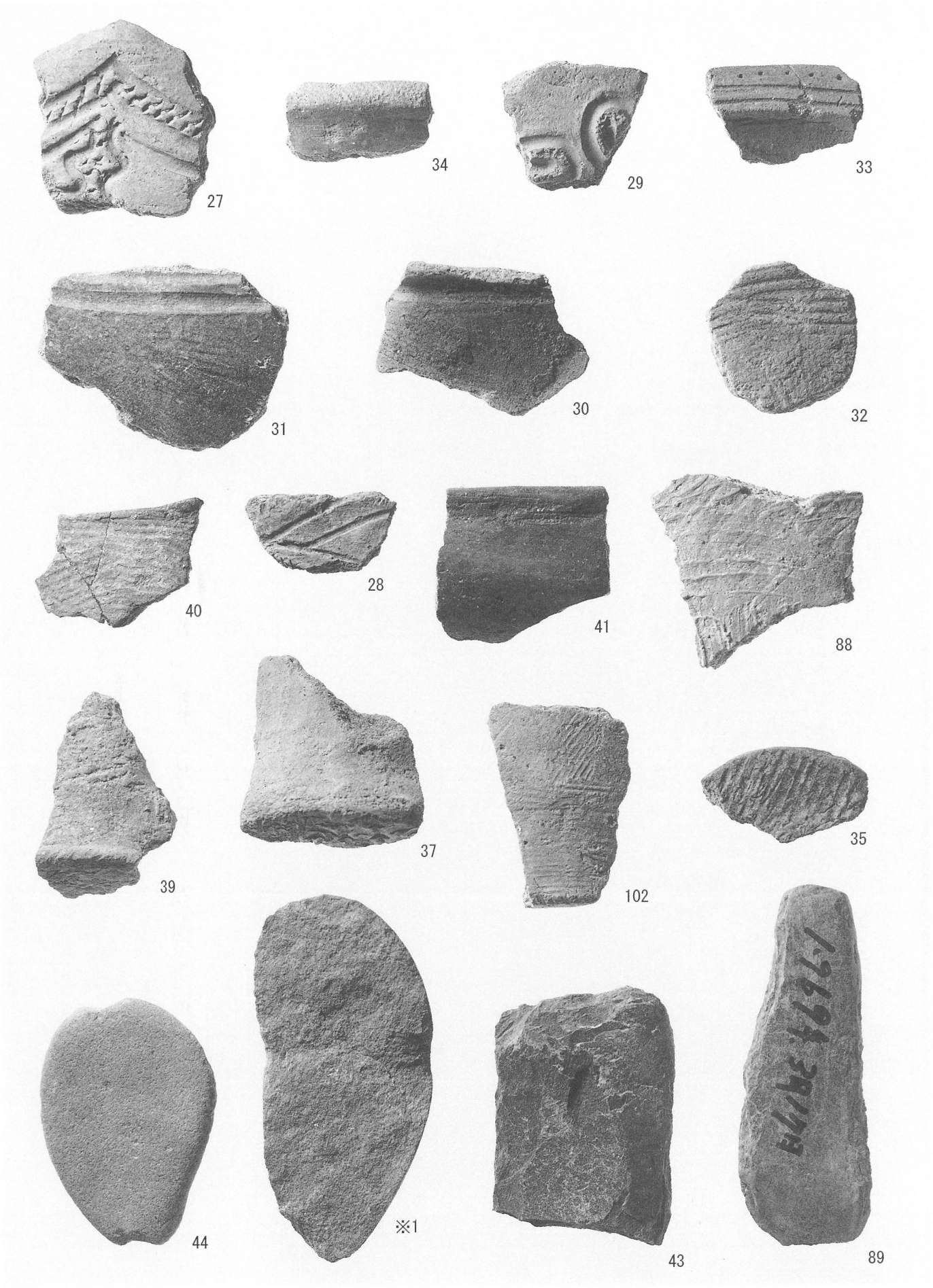
※上半はⅢ・Ⅳ層、下半はⅥ層出土
※（数字）は遺物取り上げ番号


4
2
1
5
12
11
3
16
15
14
18
17
13

8

図版８　高牧城跡遺跡





※１　横掘遺跡出土の縄文時代早期打欠石鐘

図版 10　いせんぼ遺跡・堂ノ上地点・水頭地域ほか

有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（11）

有 明 町 内 遺 跡

発行日　2005年12月28日

発　行　鹿児島県曽於郡有明町教育委員会
〒899－7492 鹿児島県曽於郡有明町野井倉1756番地
TEL 099－474－1111

印刷所　斯文堂株式会社
〒891－0122 鹿児島市南栄２－12－６
TEL 099－268－8211